宮城県文化財調査報告書第25集

東北自動車道関係遺跡発掘調査概報

（白石市・柴田郡村田町地区）

昭和 47 年 3 月

宮城県教育委員会
日本道路公団

序

東北縦貫自動車道関係遺跡の発掘調査も昭和44年度の第1次調査から3年目をむかえました。

本年度は、白石市深谷地区を中心に11遺跡の調査を実施いたしましたが縄文早期から平安時代に及ぶ数多くの遺構、遺物を発見し、古代社会の解明に資する貴重な成果を、おさめることができました。

今後の研究課題として再検討を要する問題もあろうかと思いますが、この小冊子は発掘調査の成果を集録したものであります。埋蔵文化財の保護と研究にいささかでも貢献できればさいわいであります。

刊行にあたり、困難な条件のもとで長期に亘り発掘調査と整理・研究を担当された調査員および関係各位に対し、心から感謝を申し上げます。

昭 和 47年 3月

宮城県教育委員会教育長　**安 倍 辰 夫**

目　　次

Ⅰ　発掘に至る経過 ..... 志 間 泰 治 1
Ⅱ　東北自動車道と関係遺跡 ..... 志 間 泰 治 2
Ⅲ　各遺跡の発掘調査概報
（一）　湯ノ倉館遺跡 ..... 加 藤 道 男 7
（二）　菅生田遺跡 ..... 七 戸 貞 子 11
（三）　青木脇、青木後遺跡 ..... 藤 沼 邦 彦 27
（四）　御所内遺跡 ..... 小井川 和夫 59
（五）　松田遺跡 ..... 丹 羽　　茂 67
（六）　植田前遺跡 ..... 加 藤 道 男 83
（七）　引桜遺跡 ..... 白 鳥 良 一 91
（八）　明神脇遺跡 ..... 白 鳥 良 一 95
（九）　家老内遺跡 ..... 佐 藤 庄 一 107
（十）　西原遺跡 ..... 岩 淵 康 治 121
（十一）東足立遺跡 ..... 佐々木 安彦 133
Ⅳ　図　版 147

白石権現山遺跡は次号に掲載予定

Ⅰ　発掘に至る経過

東北自動車道は着工2年目を迎え、工事もいよいよ本格化してきた。特に仙台以南の地区は48年供用開始予定のため既に着工の蔵王町についで、白石市、村田町、名取市、仙台市が相ついで、次々施工発注されるという状況下にあった。

そこで、宮城県教育委員会としても、これに対処し、46年度早々に着工予定の白石市・村田町内の11遺跡について発掘計画を立案した。ところで、これら遺跡を完掘するには多くの調査員が必要であることがはっきりし、今までの志間、藤沼、白鳥の3名では消化できないため、氏家、小井川、佐々木、岩渕、佐藤、加藤、丹羽の7名を新らたに迎え入れ調査班を編成することになった。

調査は4月6日から村田町内の西原、東足立の両遺跡の発掘を開始、これより若干おくれて4月20目から白石市福岡深谷地内の御所内遺跡を、そしてこれと隣接する松田、青木脇、青木後、植田前、引桜、家老内、明神脇の各遺跡を次々に掘り、調査の全容が明らかになった段階で村田町内では4月30日、白石市内では7月17日、関係者、一般人の参集を願って発掘成果の報告、説明会を催した。

ついで白石市街地北端の菅生田遺跡の調査に着手したが、日本道路公団と営林署との間で立木補償問題の決着がつかなかったため、一部は2次調査に持越されるという結果になった。

また、この調査と併行して、県境の要害、白石市湯ノ倉館跡の調査があった。しかも年度末になって採土場と決定した権現山遺跡の調査も行なわねばならなかったりして、整理も不充分な状況下でこれらの概報をまとめざるを得なかった。

以上の12遺跡発掘のための調査費として、日本道路公団から委託された経費は1622万円の巨額に達した。

これらの調査の概要については別項で概報するが、調査が円滑に行なわれたのも、関係機関の緊密な協力によることは勿論、調査員、調査補助員、地元作業員の努力によるところと感謝すると共に、宮城県遺跡調査指導委員会委員、白石市、同教育委員会、村田町、同教育委員会、同公民館、白石営林署、牧野会館などの関係者からの絶大な指導と助力があったことも特記されねばならない。また、白石市、深谷勝治、平間儀七、大野嘉平、岡崎ナカ子、小山みつ子、村田町小池豊治、大沼はな、森弥太郎各氏の協力援助のあったことも忘れることができない。記して感謝の意を表する。

なお、昭和46年8月1日、宮城県教育委員会は、文化財保護行政の強化をはかる目的で、機構改革を行ない社会教育課から新らたに文化財係を独立させ、文化財保護室とし、発掘調査などの業務は同室調査係の手によって行なうことになったことを付記する。　　(志間泰治)

Ⅱ　東北自動車道と関係遺跡

東北自動車道は、福島県伊達郡国見町から宮城県白石市越河地区に入る。県境は、両側に山が迫り隘路となる。藩政時代には、この険を利用して伊達藩の番所がおかれたところで、東北本線、国道4号線、自動車道がひしめくように平行して北上する。ここまで西側を走って来た自動車道は、この番所跡をかすめたのち、大きく東にカーブし、東北本線、国道4号線を跨ぎ越河盆地東側の丘陵縁辺部を走る。ここで最初に屹立する山塊に到達するが、この山頂に所在する館が湯ノ倉館である。ここで道路はこの館の西半分を掘削する。この南北に細長くのびる盆地両側に点在する山塊、丘陵上には多くの館跡があるが、これは古くから、奥州街道のおさえとしての役割をはたしてきたものと思われる。道路はこの盆地北端の山地を貫いて白石市斎川地区に入る。この町並の北端で西に大きくカーブして大平地区に進む。ここでも飯詰館をはじめとし、大平館、二条館など沢山の館跡が周辺に点在するが、白石川畔までは殆んど遺跡には影響がない。

この川の左岸の段丘上に縄文式時代中期の菅生田遺跡がみられる。この遺跡はかなり広大な面積を占める遺跡であるが、自動車道は、この西半を通過することになり、加えてこれと競合し平行して走る白石バイパスの工事によって壊滅状態になるものとみられている。

白石市福岡地区の河岸段丘上を北上つづける道路は、児捨川を跨ぐと再び段丘上の畑地に達するが、ここに見られる遺跡が青木脇、青木後遺跡である。この地は、曾つて当地に在住する佐藤庄吉翁によって丹念な分布調査が行なわれた結果、縄文式時代早期から弥生式時代、土師式期におよぶ遺物を多量に出すところとして注目され、この周辺では学術調査の行なわれた例も2．3にとどまらず、埋蔵文化財の宝庫とも称されている地域である。

自動車道は、この遺跡を分断する形で通過する。したがって、われわれは、この地域を今年度の調査の最大のヤマ場として考えていた。もちろん、これとすぐ隣接する地続きの箇所に御所内遺跡、松田遺跡が所在する。

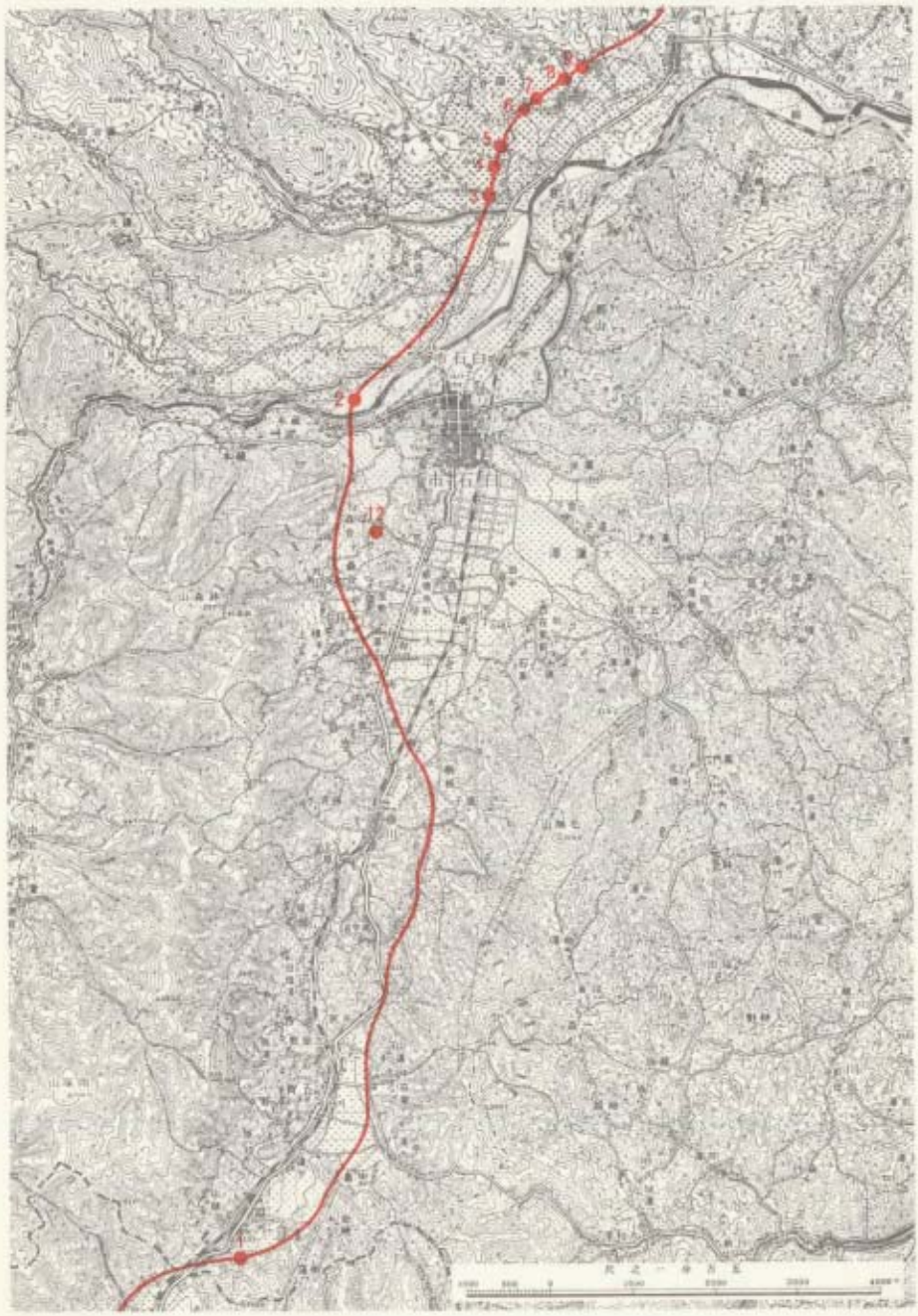
また、この北の弱い谷を形成する水田地帯を距てた北側台地には植田前、引桜の両遺跡がみられるが、この両遺跡は国道4号線と自動車道を結ぶ白石インターのため、殆んど消滅することになる。これから僅か離れて明神脇、家老内の遺跡となるが、以上いずれも平安期の遺跡が中心となっている。この北0.5㎞にして刈田郡蔵王町宮地区に達する。この蔵王町地区については昭和46年度に調査を完了しているので、省略することとし、蔵王町円田地区を通過した道路はやがて柴田郡村田町に入る。この境界をなす背梁山地を越えた山地中腹の東斜面に西原遺跡がみられる。さらにこの北3㎞の東足立の山間地にも縄文・平安時代期の複合遺跡が道路敷にかかる。いずれも山間地であり、遺跡の規模は小さい。ところで、こうした山間辟地にも、既

に古くから人が住みつき、公民としてのムラが発生していたということに注目しておきたい。

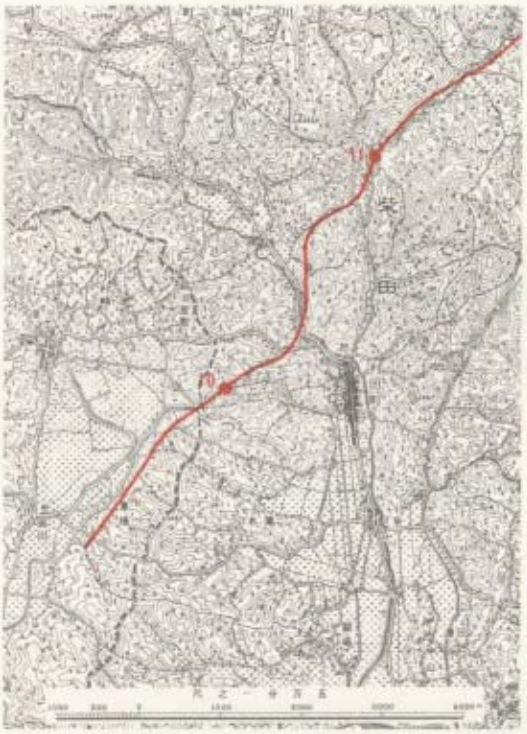
ところで、今回の調査によって、これら遺跡の大部分は、道路敷外にものびていることがはっきりした。残された遺跡は、関係者、地域の方々の深いご理解とご協力により、充分なる保存、保護の手をかざし、大事に後世に残したいものである。　　（志間泰治）

参考文献

1. 佐藤庄吉著「刈田郡全域土器石器調査表」不忘郷土研究所刊
2. 佐藤庄吉著「郷土の変遷」不忘郷土研究所刊
3. 伊藤玄三著「宮城県青木の弥生式遺跡と出土土器」東北考古学第1輯
4. 宮城県文化財報告書第17集「埋蔵文化財緊急調査概報－東北縦貫自動車道遺跡」
5. 宮城県文化財報告書第18集「埋蔵文化財緊急調査概報－東北縦貫自動車道遺跡」
6. 宮城県文化財報告書第24集「東北自動車関係遺跡発掘調査概報」（刈田郡蔵王町地区）
7. 白石市文化財報告書第9集「堂田遺跡」
8. 白石市文化財報告書第11集「白石市郡山横穴群」

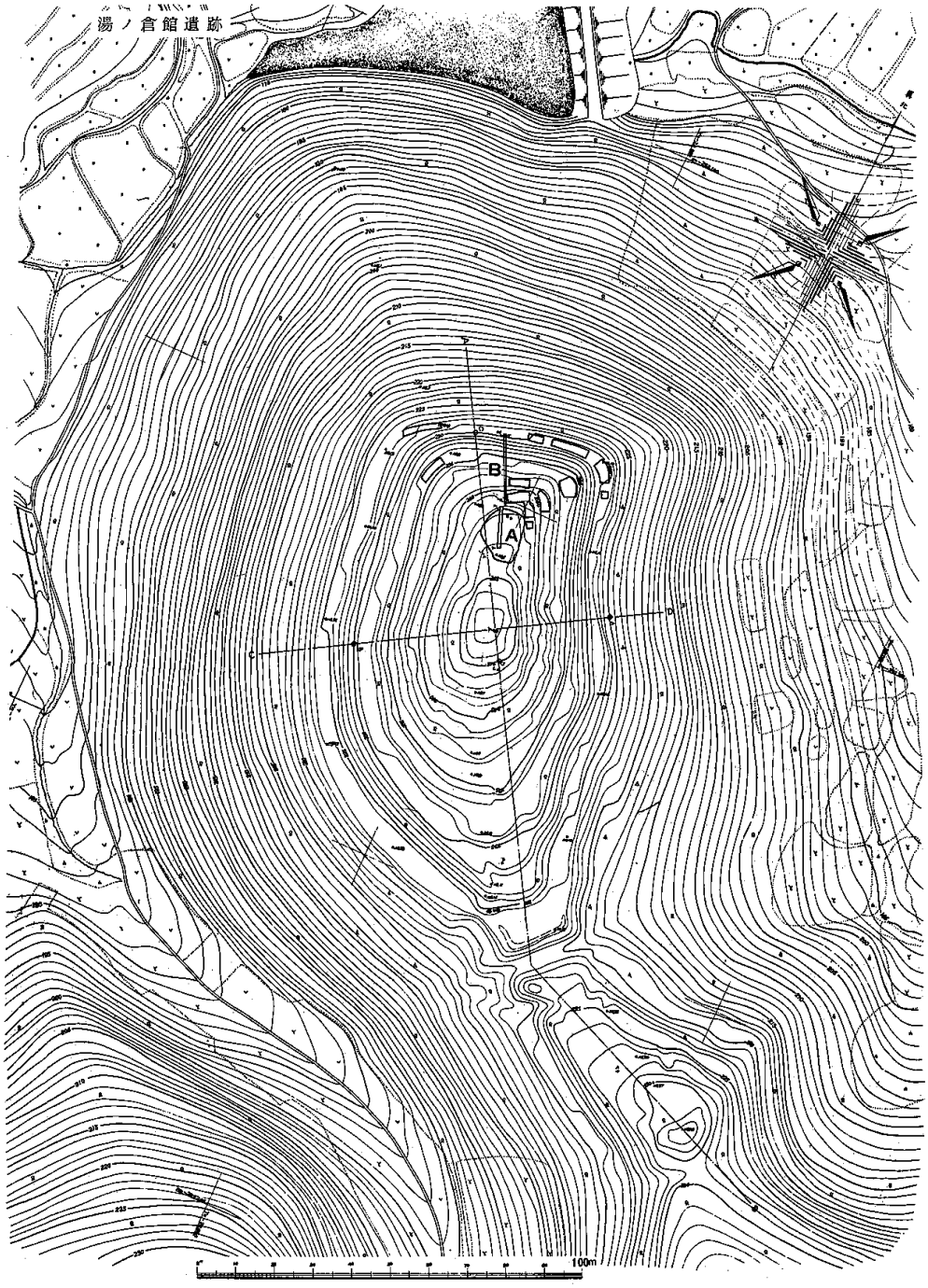


第1図　白石市柴田郡村田町における東北自動車道関係遺跡分布図



1．扇ノ倉館遺跡　7．引桜遺跡
2．菅生田遺跡　8．明神脇遺跡
3．青木脇，青木後遺跡　9．家老内遺跡
4．御所内遺跡　10．西原遺跡
5．松田遺跡　11．東足立遺跡
6．植田前遺跡　12．権現山遺跡

（一）　湯ノ倉館遺跡



第２図　地形図・トレンチ配置図

湯 ノ 倉 舘 遺 跡

1 遺跡所在地

白石市越河字湯ノ倉23・24・25・26・30番地

2 調査期日

昭和46年9月21日～10月9日

3 調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

4 調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室　調査係長　志間泰治　嘱託　加藤道男

5 調査の概要

湯ノ倉舘跡は、宮城県と福島県との県境近くにあり、船ヶ作入山から西にのびた山稜端が小高く盛り上った山の頂に立地する。標高約250m、西麓の平地との比高約80mで、山腹の勾配は30度から45度におよび、かなりの急傾斜をなし、全体に東西に長い。山頂より20mほど下までに山腹をとりまく細長い平坦地がいくつかつくられている。最下段のものは山をとりまくが、これより上のものは段違いになっている。舘の頂上からは、南側より北側の方がはるかに遠くまで見渡すことができ、むしろ北からの攻撃に備えた陣地のように思われる。

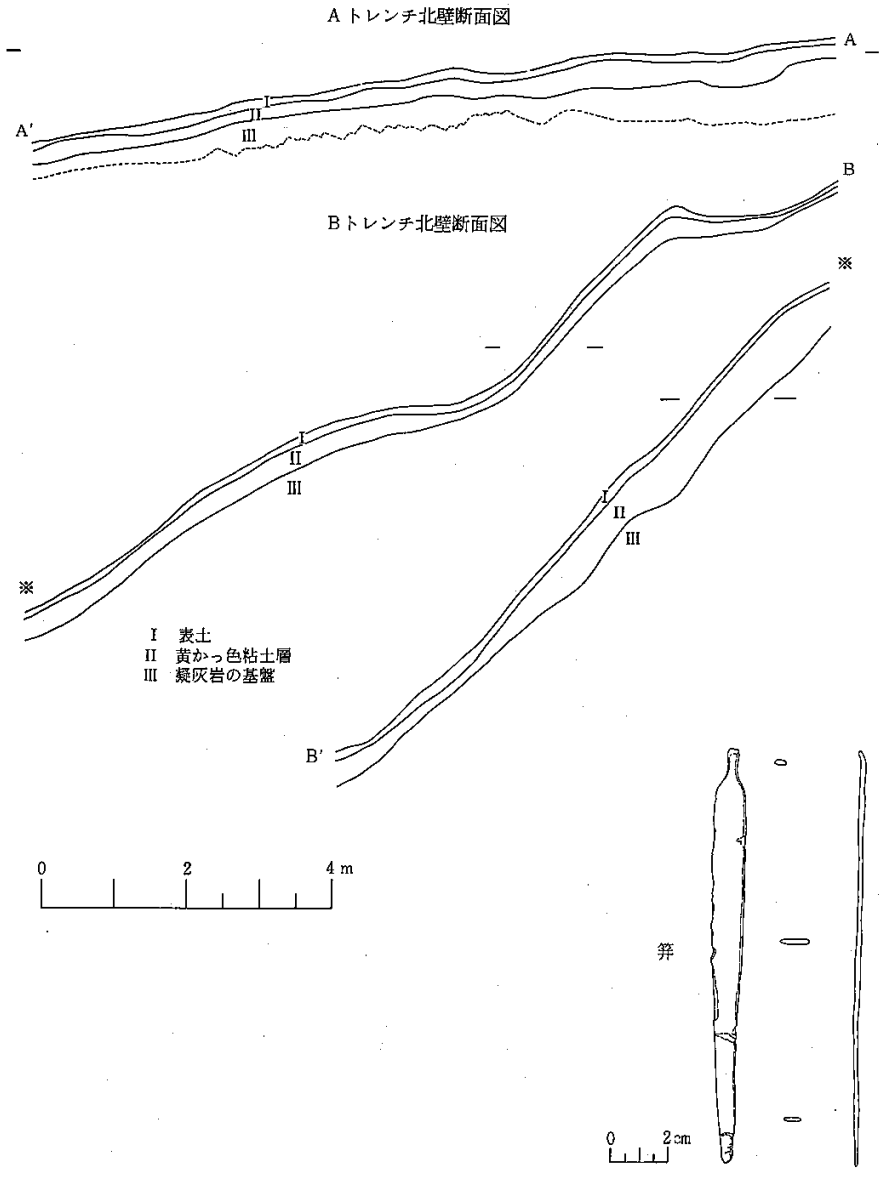
現在、湯ノ倉舘に関する文献はないが、街道沿いに点在する20数ヶ所の舘跡群とともに街道を扼する重要な一拠点をなしたものであろう。またこれらの舘跡群には、文治の役にまつわる伝説も多く、仮に築館がこの時代でなかったとしても、戦国時代末期までには築造されていたと推定される。

今回の調査は、削り取られる北側約4分の1について行った。調査区域には平坦地が9段形成されており、最上段は頂上の北よりで、頂上とほぼ同じ広さをもつ平坦地である。発掘は、まず最下段の平坦地に5ヶ所、他に7ヶ所、計12ヶ所にトレンチを設定して行った。また、セクション図作製のために、頂上から最下段におよぶトレンチを設定した。その結果、基盤の凝灰岩を削平して作られた平坦地の輪郭がつかめたが、これらには何らの遺構も認められなかった。

遺物は上より2段目の平場から、銅製の笄、鉄製品、銅銭が各1点出土した。鉄製品は破片で表土より出土した。現存の長さ10㎝、巾3～4㎝、厚さ約3㎜である。銅銭は径2.1㎝、磨滅が著しく文字がよめない。笄は銅製で、長さ14.3㎝、中央部で巾1.2㎝、厚さ2㎜である。

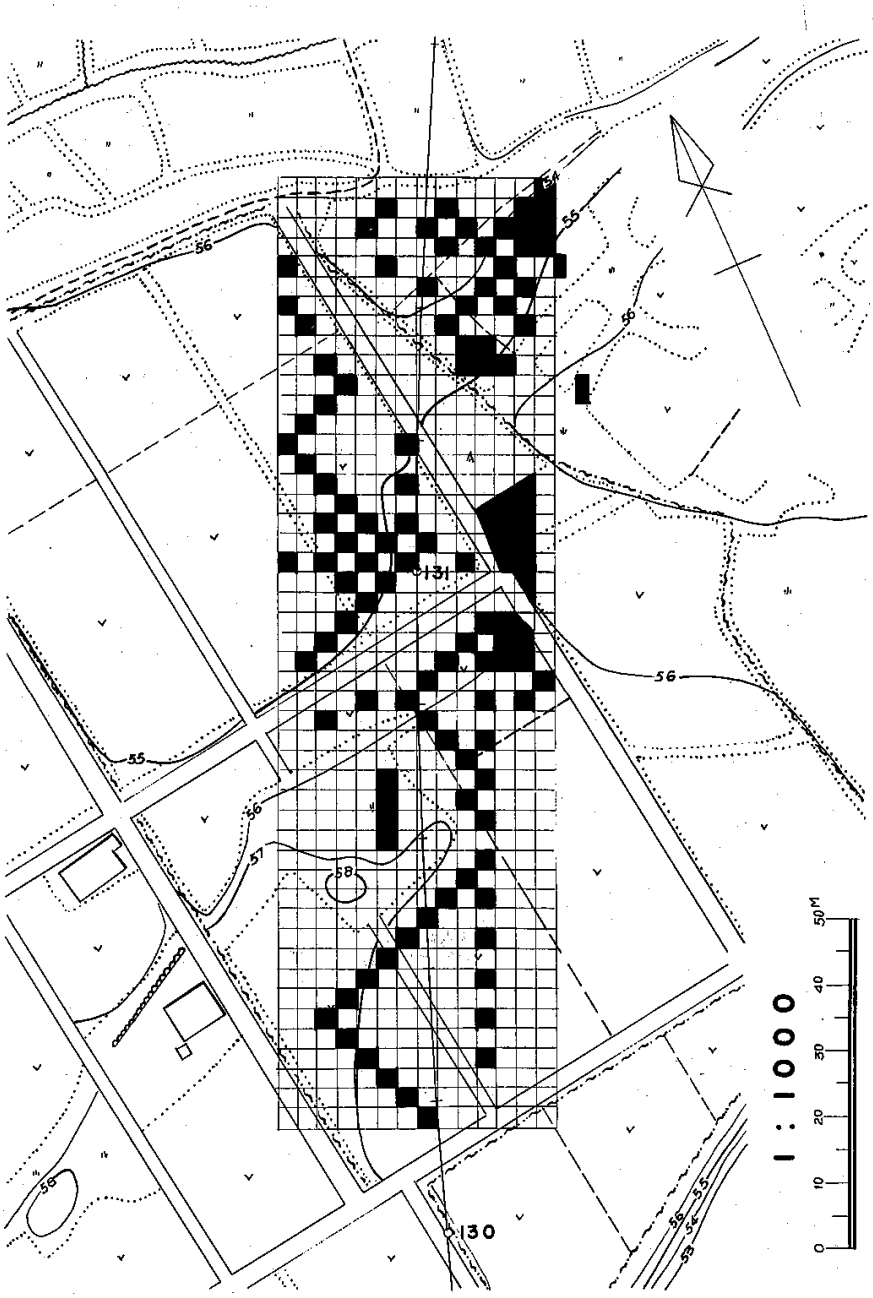
刀の付属品として用いられることも考えられる(第3図)。　(加藤道男)

宮城県文化財報告書第18集「埋蔵文化財緊急調査概報－東北縦貫自動車道遺跡」参照

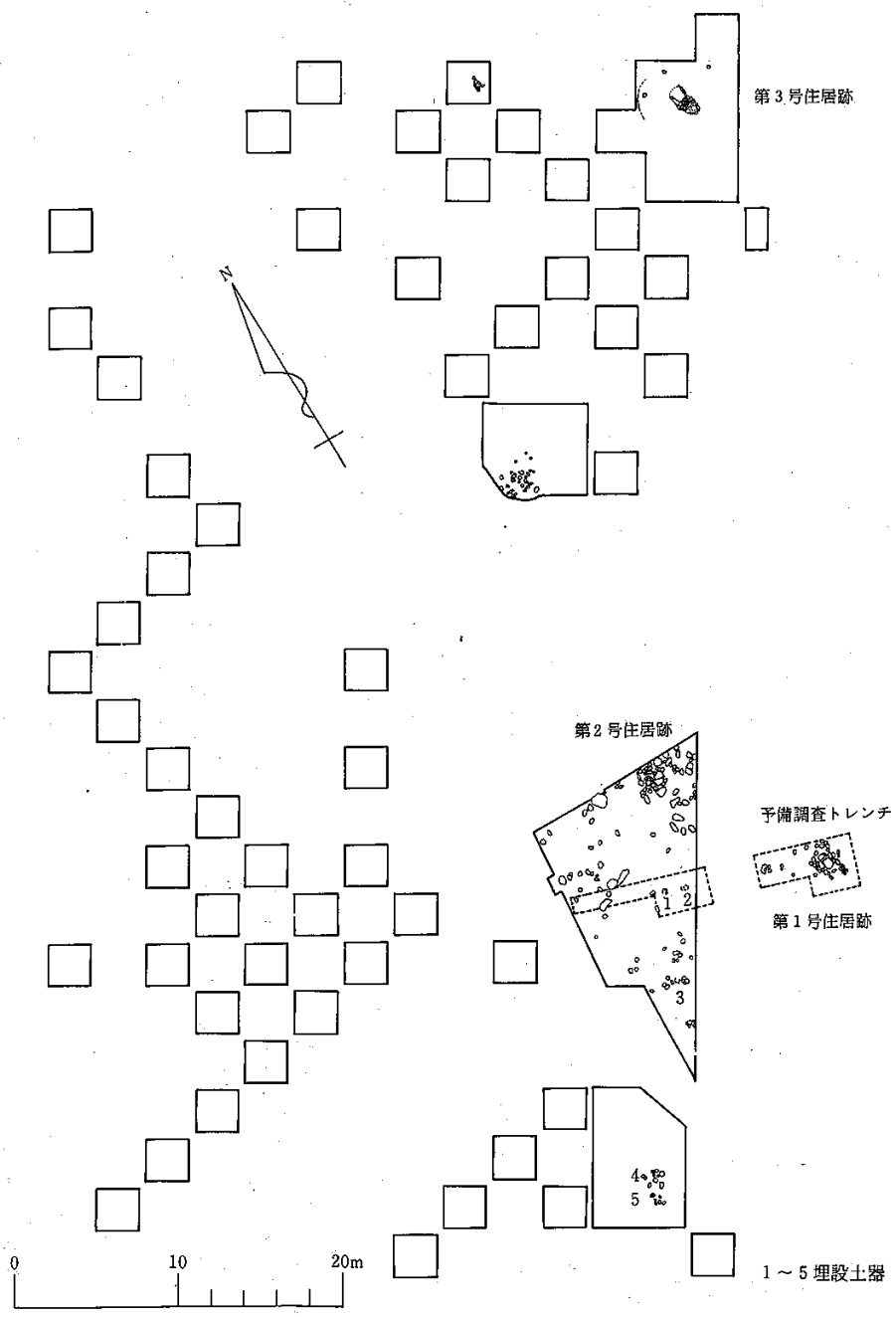


第3図　断面図・遺物実測図

（二）菅生田遺跡



第4図　地形図・グリット配置図



第5図　遺構配置図

菅　生　田　遺　跡

1　遺跡所在地

宮城県白石市福岡蔵本字菅生田

2　調査期日

昭和46年9月13日～11月4日

3　調査主体者

宮城県教育委員会、日本道路公団

4　調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

調査係長　志間泰治
技術主査　氏家和典
技　　師　藤沼邦彦、白鳥良一
嘱　　託　岩渕康治、佐々木安彦、佐藤庄一、小井川和夫、丹羽　茂、加藤道男
補 助 員　七戸貞子

5　調査の概要

(1)　遺跡の立地

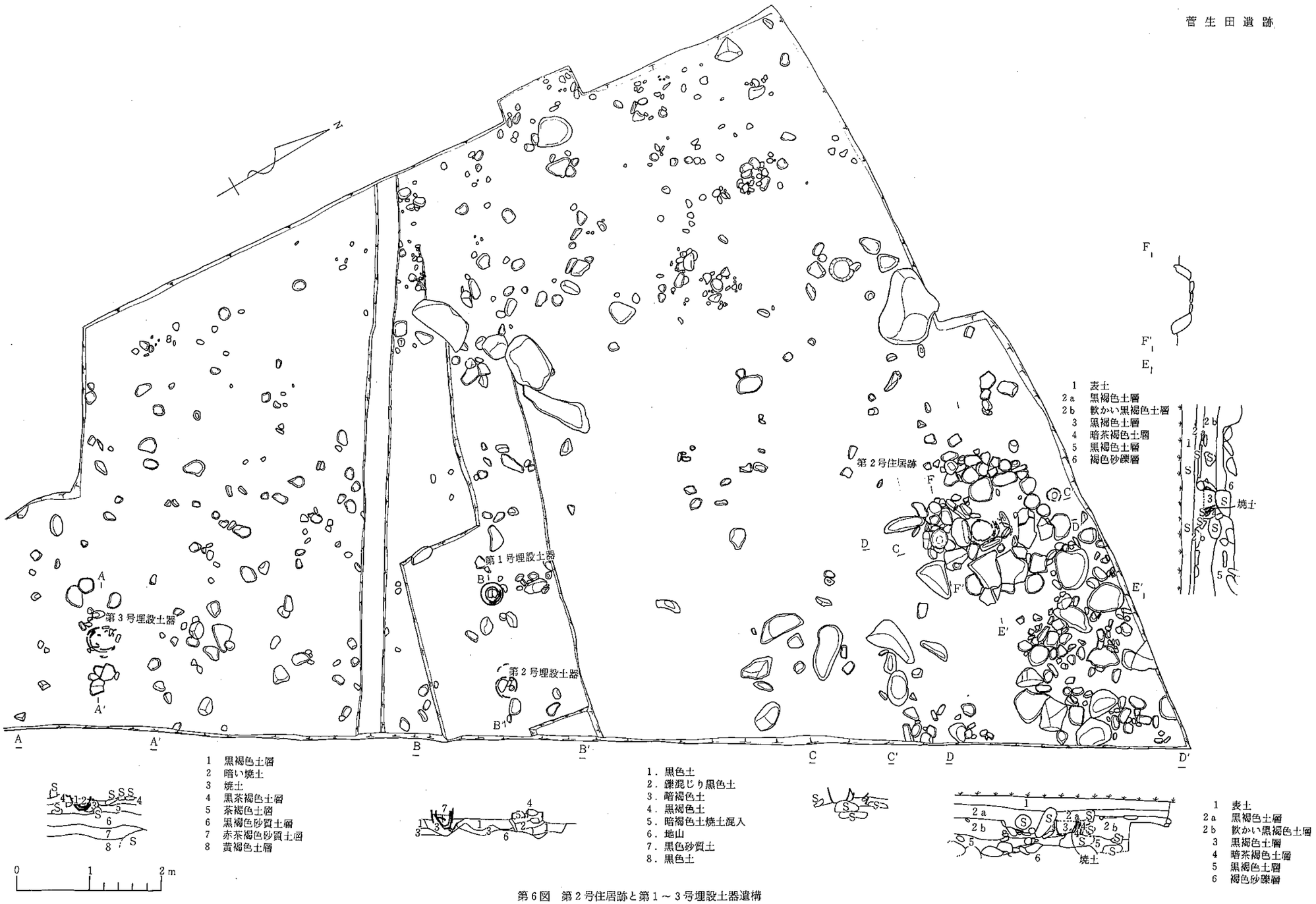
菅生田遺跡は、白石駅の西方約1.3㎞、白石川北西岸蔵本地区の白石営林署苗圃内にある。

この地区は、白石川によって形成された海抜約50～60mの河岸段丘にあり、遺跡はこの段丘上のいく分小高くなった自然堤防上に立地する(第4図)

南は下段の河原をへて白石川に面し、北は比高20～30mの段丘崖に接する。段丘崖との間は、後背湿地で現在は水田が広がっている。道路敷は、遺跡の中心部があると思われる自然堤防の西側を通る。この段丘上の、西方約500mのところに、弥生時代中期初頭の薬師堂遺跡がある。

(2)　調査経過

菅生田遺跡は、昭和43年の後藤勝彦氏が行った予備調査の段階で縄文時代中期末の石組遺構と埋め甕遺構が検出されている。今回は、南北129m、東西42mの区域にグリッドを設定し、1056㎡の発掘調査を行った。基本的な層序は第1層表土、第2層黒色土層、第3層黒褐色砂礫層、第4層黄褐色砂礫層である。遺跡の北側の傾斜面では、第2層と第3層の間に土器を若干含む暗黄褐色の砂質土ないし砂層が入りこむ。遺物包含層はおもに第2層で、第3層以下は地山である（第7図）。調査区の東沿いには遺構が集中的に発見され、予備調査時の石組複式炉、埋め甕に加えて、新たに石組複式炉を備えた住居跡2軒、埋め甕遺構が3ヶ所発見された（第5図）。遺構の検出されなかった南側～西半分にかけては地



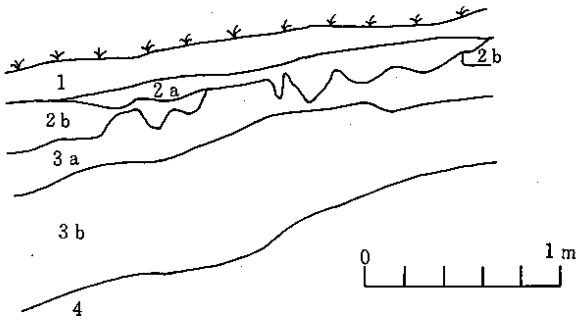
1 表土
2a 黒褐色土層
2b 軟かい黒褐色土層
3 黒褐色土層
4 暗茶褐色土層
5 黒褐色土層
6 褐色砂礫層

1 黒褐色土層
2 暗い焼土
3 焼土
4 黒茶褐色土層
5 茶褐色土層
6 黒褐色砂質土層
7 赤茶褐色砂質土層
8 黄褐色土層

1．黒色土
2．礫混じり黒色土
3．暗褐色土
4．黒褐色土
5．暗褐色土焼土混入
6．地山
7．黒色砂質土
8．黒色土

1 表土
2a 黒褐色土層
2b 軟かい黒褐色土層
3 黒褐色土層
4 暗茶褐色土層
5 黒褐色土層
6 褐色砂礫層

第６図　第２号住居跡と第１～３号埋設土器遺構



1．表土
2a．暗褐色土層
2b．黒色土層
3a．暗黄色砂礫層
3b．黒色砂礫層
4．黄褐色砂礫層

第7図　遺跡H－53区北壁層位図

山が北西に傾斜している部分に第2層が厚く堆積し、遺物の包含がみられるが、傾斜が切れると遺物はほとんどみられなくなる。包含される土器片は、摩滅が著しく、流れた状態で出土するものが多い。

(3) 発見遺構

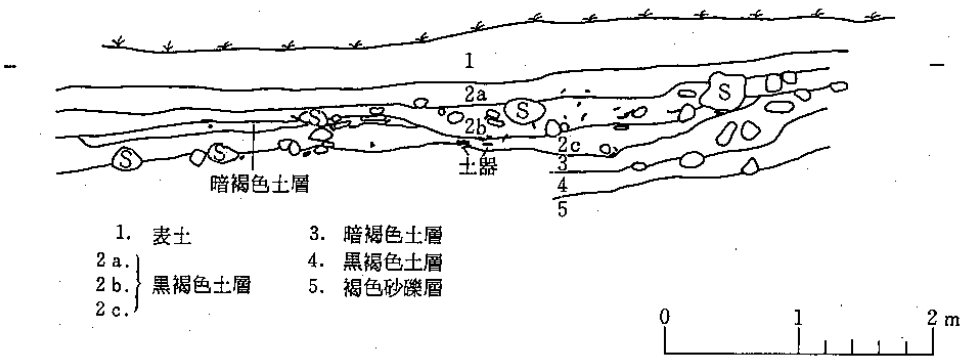
第1号住居跡

昭和43年の予備調査の際、検出された石組複式炉を第1号住居跡とする。この遺構は、道路敷外にあるため、今回は再調査を行なわなかった。

第2号住居跡（第6図）

調査区の東端中央部（N．O－55区付近）に検出された遺構である。石組複式炉を中心に扁平な割石と河原石が敷きつめてある。覆土が浅いため住居跡の壁および周溝は検出できず、柱穴も掘り下げをくり返したが検出できなかった。しかしこの炉は住居に付属する施設であると思われる。

炉は南北1.3m、東西1.0mのほぼ楕円形を呈する石組複式炉である。周囲を扁平な河原石によって囲まれ、中は北側に土器埋設部分〔A部〕、中央部に掘り込みを持ち底に石を敷きつめた部分〔B部〕、南側に石を敷かず掘りくぼめただけの部分〔C部〕、とに分けられる。C部の南側は囲み石がなく、開口した形になる。A部とB部の間は、大きな扁平な石をたてて仕切られている。A部についてみると、直径30cmの下半部の欠損した深鉢が埋設されており、それを他の土器で二重に囲んでいる。掘り方は確認された。埋設土器の間には部分的に焼土がみられた。A部の石組をとり除いたところ、北側の石の下から、もう1個の埋設土器が検出された。直径25cmの下半部欠損の深鉢である。焼土はなかったが掘り方が部分的に認められた。底面のレベルは先の埋設土器と同じである。B部についてみると、レベルは埋設土器の底とほぼ同じで、暗褐色土を掘りくぼめ、約40cmの方形に小礫を敷いている。B部とC部との境は横にした石によって仕切られている。C部は大きな石



第8図　O,N－68区（第3号住居跡）北壁層位図

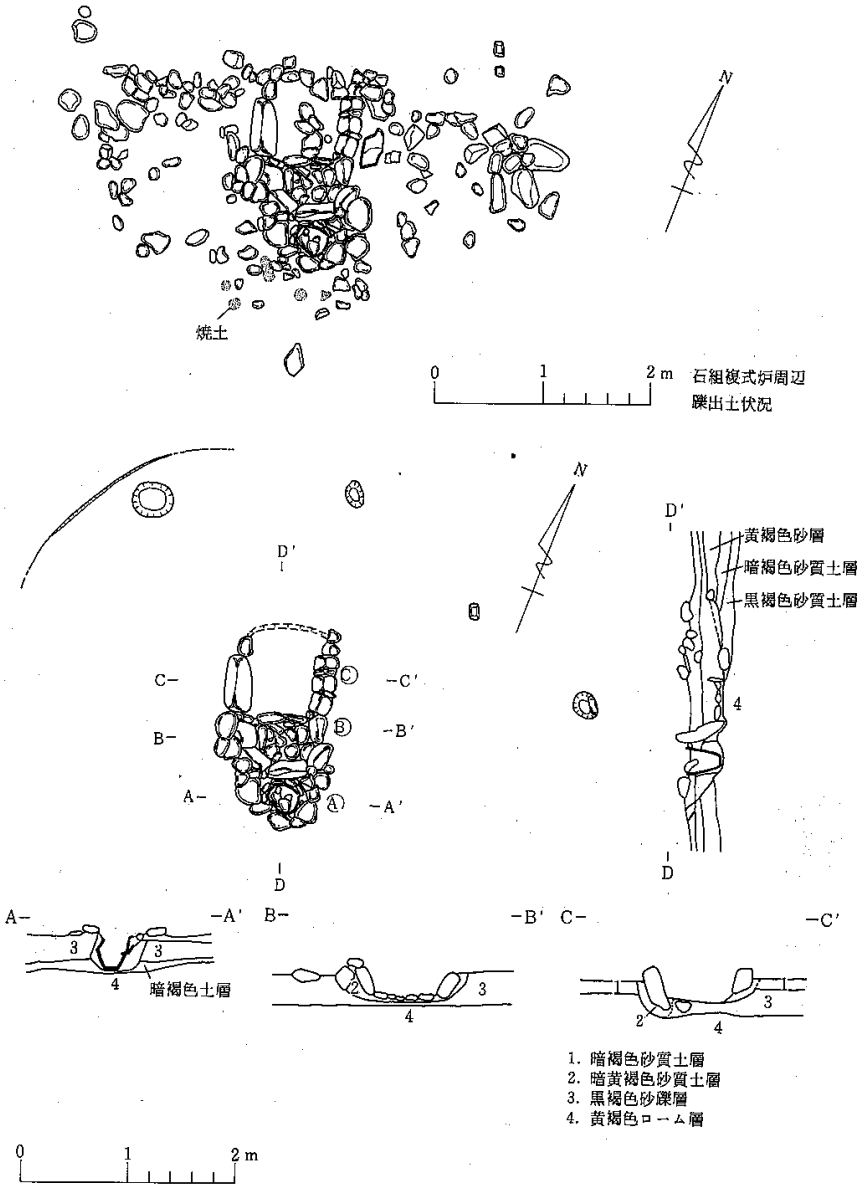
で囲まれ、南側に開口しているのみで、ほかに施設はない。この住居跡の石を敷きつめた部分のすぐ東側に河原石群がみられるが、住居跡との関係は不明である。

第3号住居跡（第8・9図）

この住居跡は、遺跡北側M. N－68・69区の傾斜のすそで検出された。住居跡の輪郭は不明であるが、検出された石組の複式炉は住居の付属施設であると考えられる。柱穴とみられるピット3個を確認したが、壁や床面が不明のため全体としての様相はわからない。炉は、第3層の黒褐色砂礫層を掘りくぼめて構築されていた。南北1.8m、東西1.0mの周囲に河原石をめぐらしたほぼ長方形のプランを持つ第2号住居跡の炉と同じく、A、B、Cの3つの部分に分けられる。A部は直立に埋設された埋め甕の上部周辺に、10数cm前後の扁平な円礫を敷き並べ、更にその間に10×5cm位の小礫をつめた形になっている。埋め甕内部は砂岩を含む数回の礫や焼けた礫の剥片とみられるものなどが入っており、また下部の方へ行くに従い、木炭が濃厚に検出された。埋め甕は2個体分の土器が組み合わされており、口縁部の欠損したカリパー型の深鉢を下にし、その上に一個体分の口辺部と胴部の一部を円形に並べてのせてある。土器は隆線区画の磨り消し文を持つ中期末大木10式のものである。B、CはAとの境が35×50cmの扁平な立石で仕切られ、ほぼ整った形の長方形に河原石をめぐらしている。中はBとCの境を2つの細長い石で仕切っている。Bの部分は周囲の立石の内側に焼けた痕跡があり、埋土は暗褐色の砂質土であるが木炭がかなり含まれていた。炉跡内からは木炭の他には焼土灰は検出されず、炉の東側の少し離れた床面らしきところに検出された。炉はA、B、Cどの部分も掘り方が明確に認められた。この住居跡の部分は、遺構確認以前の上層から多量の礫、土器片、石器の出土がみられた。

第1、第2埋設土器遺構（第6図）

第2号住居跡の南方、5.2mの地点にあり、昭和43年の予備調査の時に発見された遺構である。第1埋設土器は、遺構確認面である2層黒色土、及びその下の3層暗褐色砂質土層


焼土
N
0 1 2m
石組複式炉周辺
礫出土状況
D'
C−
−C'
B−
−B'
A−
−A'
D
黄褐色砂層
暗褐色砂質土層
黒褐色砂質土層
4
A−
−A'
B−
−B'
C−
−C'
3
4
暗褐色土層
2
1. 暗褐色砂質土層
2. 暗黄褐色砂質土層
3. 黒褐色砂礫層
4. 黄褐色ローム層
0 1 2m

第9図　第3号住居跡

を約20㎝掘りこんで埋設されており、掘り方も確認できた。土器は、口縁部の欠損した3個体分の縄文のみ施文された深鉢が三重に埋設されている。外側の土器と内側の土器の間には、砂質の焼土がつまっていた。土器の内部や周囲に焼土、灰はみられない。第2埋設土器は2つの土器が東西に並んでいる。両方とも口縁が欠損し、底部もない。文様はどちらも縄文のみで、掘り方はあまり明確ではないが、2層黒色土を掘り込んで埋設されている。ふたつの土器の間に焼土混じりの暗褐色土がつまっていた。第1埋設土器も第2埋設土器も縄文時代中期末葉に属するものと思われる。周囲にこれと関連するような遺構は確認できなかった。

第3埋設土器遺構（第6図）

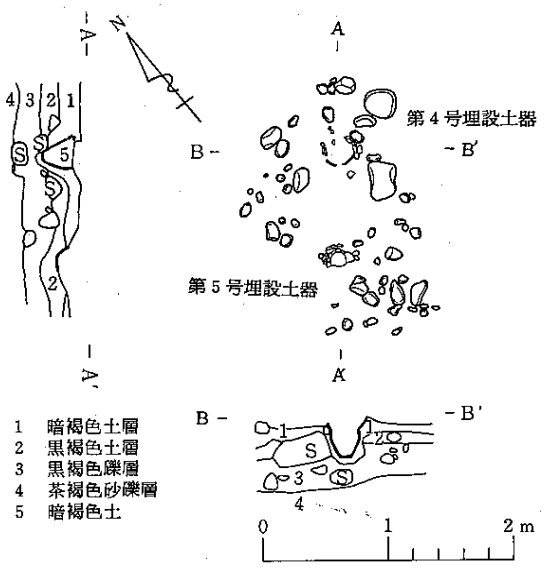
第1、第2埋設土器よりさらに南に6mの地点に発見された。土器は2個体分埋設されており、口縁部が欠損した個体に別の個体が落ちこんでいる形であった。その底の方に焼土がたまっていた。掘り方は明確ではない。土器は縄文のみ施文されているものである。

埋め甕の東脇に扁平な割石が3ケほど並んでおり、両側に焼けた石が数個ある。

周囲にはそれ以外の遺構などは確認できなかった。

第4、第5埋設土器遺構（第10図）

調査区東端中央部、第2号住居跡の約30mほど南に、1mの間隔をおいて2つの埋め甕が検出された。他の埋め甕と異なり、双方とも一個体の土器がそのまま埋設されているだけである。断面を観察した結果、第4埋設土器には若干掘り方と思われる落ちこみが確認されたが第5埋設土器においてはみられなかった。また周囲に発見された礫群は、断面においても雑然としており、埋設土器遺構とは無関係と思われる。



第10図　第４号・５号埋設土器遺構

(4)　出土遺物（第11～13図）

遺物は平箱にして約50箱分あり、ほとんど縄文時代中期末葉から後期初頭の遺物が中心である。

縄文土器の他に石器、石製品、土製品などがあり、弥生式土器もみられた。これらは、現在整理中なので概略を述べるにとどめる。

① 縄文時代遺物

土器―縄文時代中期末～後期初頭の土器が中心となる。復原可能な土器は1点のみで他は摩滅が著しく、保存状態のよくない小破片が多い。器形は釣手型土器の破片が1点みられるのみで、他はほとんど深鉢型を呈すると思われる。文様を大別すると次の様になる。

(a) 口辺部が無文帯で頸部に一条の沈線または隆線がめぐり、胴部は縄文又は撚糸文のみ施文される。沈線がめぐらないで胴部文様のはじまるものもある。（第11図・1～3・5・6）

(b) 口辺部は無文帯で頸部に隆起線文が施され、その上に列点刺突文がつけられる。又、隆線が施されず直接列点文がめぐり、口辺部と胴部をわけているものもある。胴部は縄文が施文されているものが多い。（第11図・4・7～11　第12図1～3）

(c) 沈線又は隆線で区画された磨り消し縄文をもつ。（第12図・4～9）

(d) 刺突具で凹みをつけ、その脇が盛りあがった文様。不規則にボツボツと全体にあるものと列状につけられるものとある。（第11図・12～15）

(e) 口辺部無文帯にひれ状または馬蹄形に隆線文を施し、その隆線の上を溝状にくぼめてあり、ひれの上下及び馬蹄形の上にボタン状の突起がつけられている。（第12図・10～14）

(f) 全体に幅2㎝位の櫛目文が曲線を描いて施される。一部に刻目の入った隆帯のついたものもある。（第12図・15～17）

以上のうちａ～ｄまでは中期末葉、大木10式のものであり、ｅ・ｆは後期初頭のものと思われ、ｆは掘之内Ⅰ式期に併行するものである。出土土器は量的に3分の2が遺構の部分から出土した。最も多かった第3号住居付近では、遺物包含層は第2層、第3層にわけられたが他グリッドでは、包含層は第2層だけであり、出土量も極めて少ない。

土製品

土偶　頭、手、脚部を欠き胴体のみである。腰部に斜め縦の沈線がまわっている。表には中央に隆帯があり、その両側に列点刺突がつけられている。背面と思われる方には沈線の文様が施されている。

獣面把手　動物の顔を模して作られたと考えられる口縁部装飾で、口縁部から長い頸が上へつき出し、三角形の顔面が土器の内側を向いている。頸と頭部から背にかけて、竹管によると思われる円形の刺突文が施されている。土器の口辺部は、沈線文と刺突文の組み合わされた文様がつけられている。

蓋　全部で3点あり、そのうち1点は第3号住居跡の炉付近にあった焼土の上から出土し、赤く焼けている。大きさは約7.5㎝の円形で、浅い小皿をふせたような形をしている。孔の反対側の端に径0.7㎝位の先の欠けた疣状の高まりがあり、そのすぐ内側に1.1㎝の円形の剥離した痕があることから、橋状のつまみがついていたと思われる。無文である。

残りの2点はふたのつまみの部分である。

三角形土製品　土器片を利用して、三角形に周囲をうち欠いて作られている。中央部の表裏両面に貫通していない穴が１ケづつうがたれている。

円板状土器片　土器の破片を利用して円形につくられたもので、200点以上ある。大きさは径1㎝位のものから5～6㎝ぐらいまであり、作り方も周囲をすっかり磨ってあるものと、単に丸くうち欠いただけのものとある。他に加工はみられない。

滑車状耳飾　径4.5㎝位で完形品ではない。片面、端の方に径1㎝の貫通していない穴がある。

釣手型土器　幅約4㎝、帯状でゆるく「く」の字に曲っており、釣手型土器の釣手の部分と思われる。両側に竹管の刺突文があり、表面には隆線による渦巻文が施されている。

石器及び石製品（第13図）

石鏃―48点、磨製石斧―3点、石篦―1点、石匙―2点、玉石―10点、凹石―3点

石皿―2点、うち1点は多孔質の火山岩製、欠損して一部である。もう1点は第3号住居が出土した区の2層礫群中より出土。半分欠損している。

磨石―上下が折れたような径約10㎝現存する長さ30㎝の六角柱で側面が磨られている。

その他、形は不定形でフレークの大きな剥離面の一辺又は二辺に刃をつけたもの―4点。

②　弥生時代遺物

土器は2点出土しており、中期初頭のものと思われる甕の外反する口縁部破片。口唇部に刻目がつき口頸部無文で、その下に縄文が施文されているものと、円田式併行と思われる沈線文が施された壺の口頸部である。(第13図)

6　まとめ

① 道路敷は遺跡の西端にあたり、遺跡の中心部はその東側のいく分小高くなった平坦地上にあると思われる。

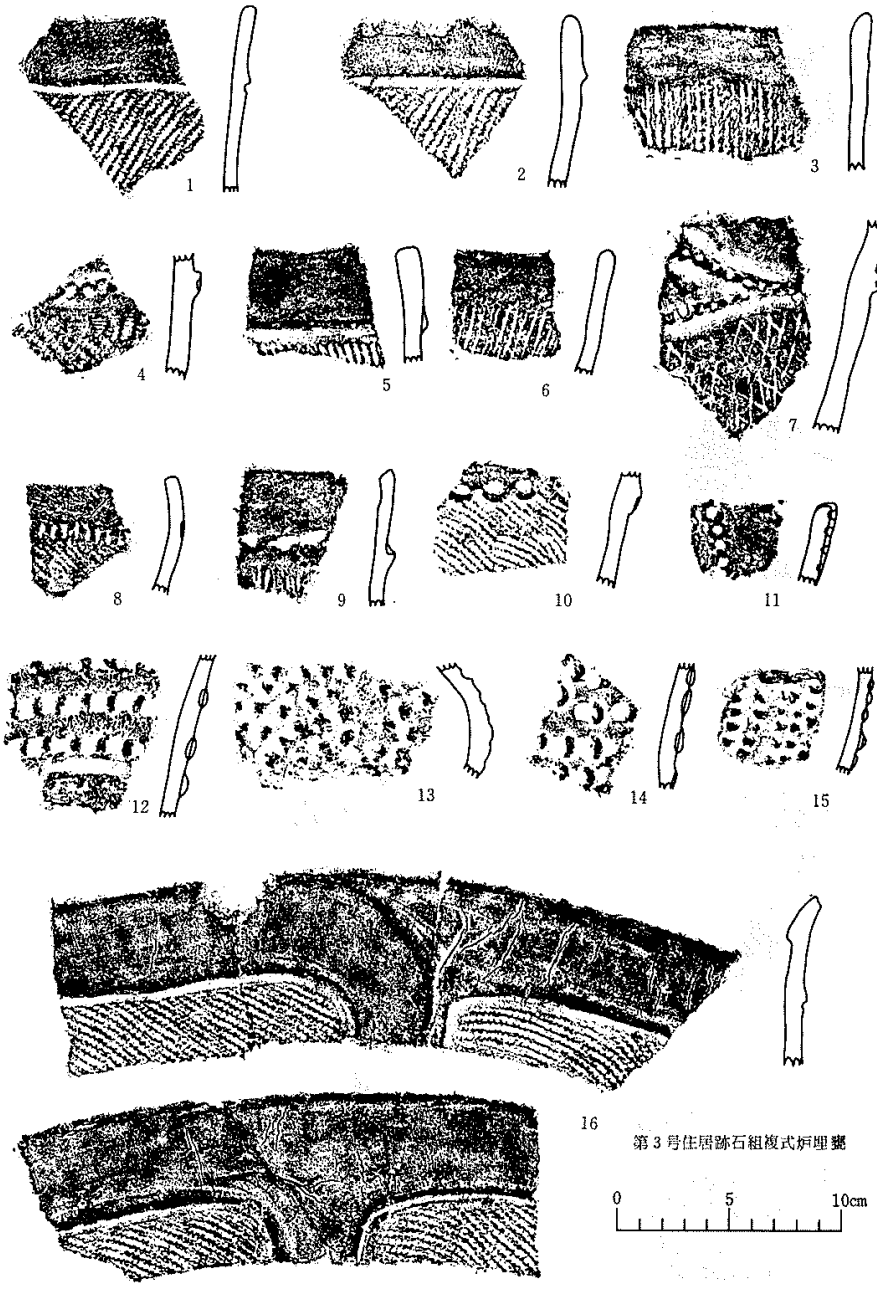
② 予備調査時の理設土器遺構2ヶ所に加えて、石組複式炉を持つ住居跡2軒と埋設土器遺構が3ヶ所発見され、縄文時代中期末から後期初頭に営まれたと思われる。

③ 弥生式土器の出土もあることから、付近に弥生時代の遺構が存在する可能性もある。

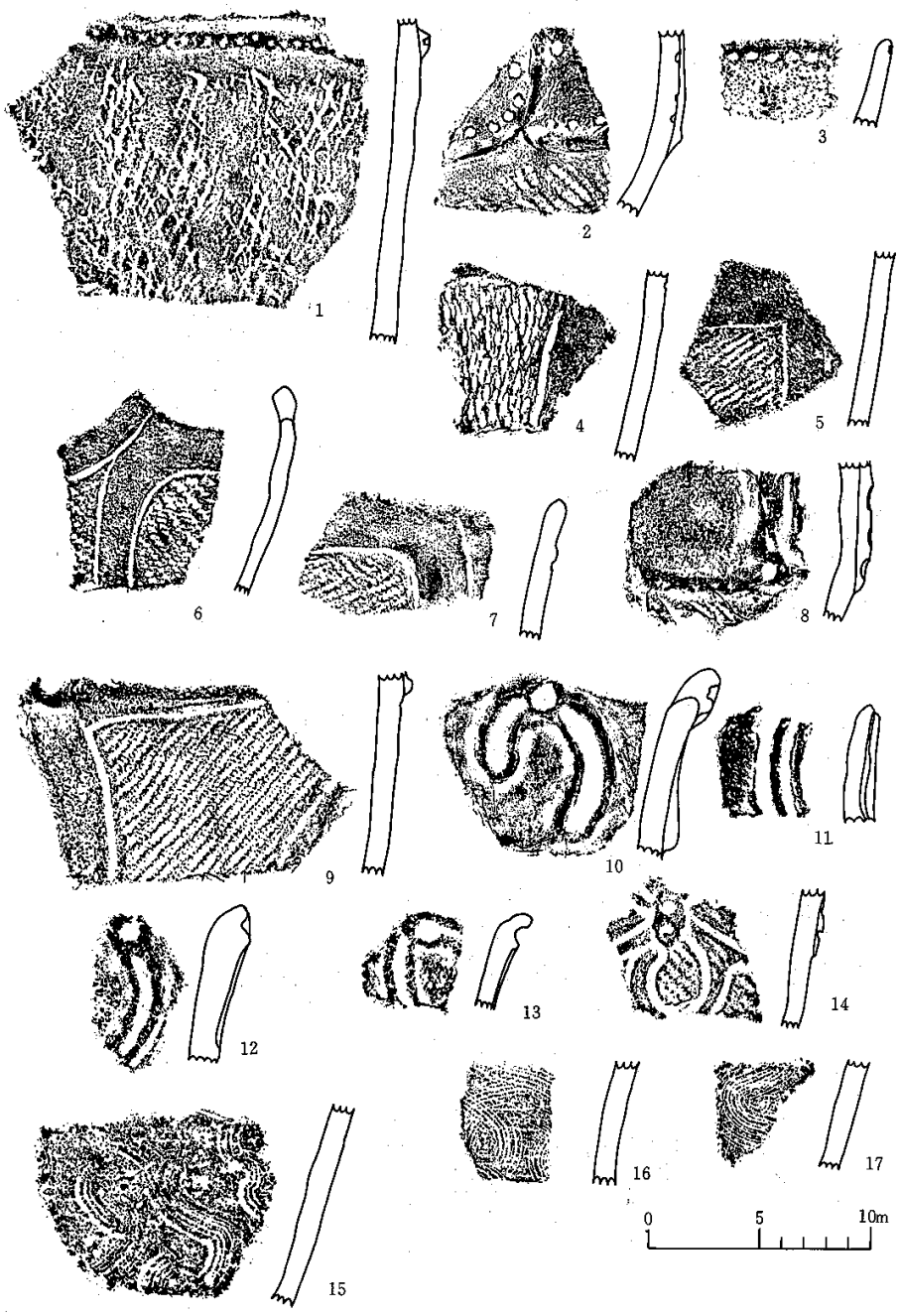
最後に、調査期間中に塩釜女子高等学校教諭後藤勝彦氏においでいただき、ご教示を給わりましたことに深く感謝の意を表します。

参考文献　（七戸貞子）

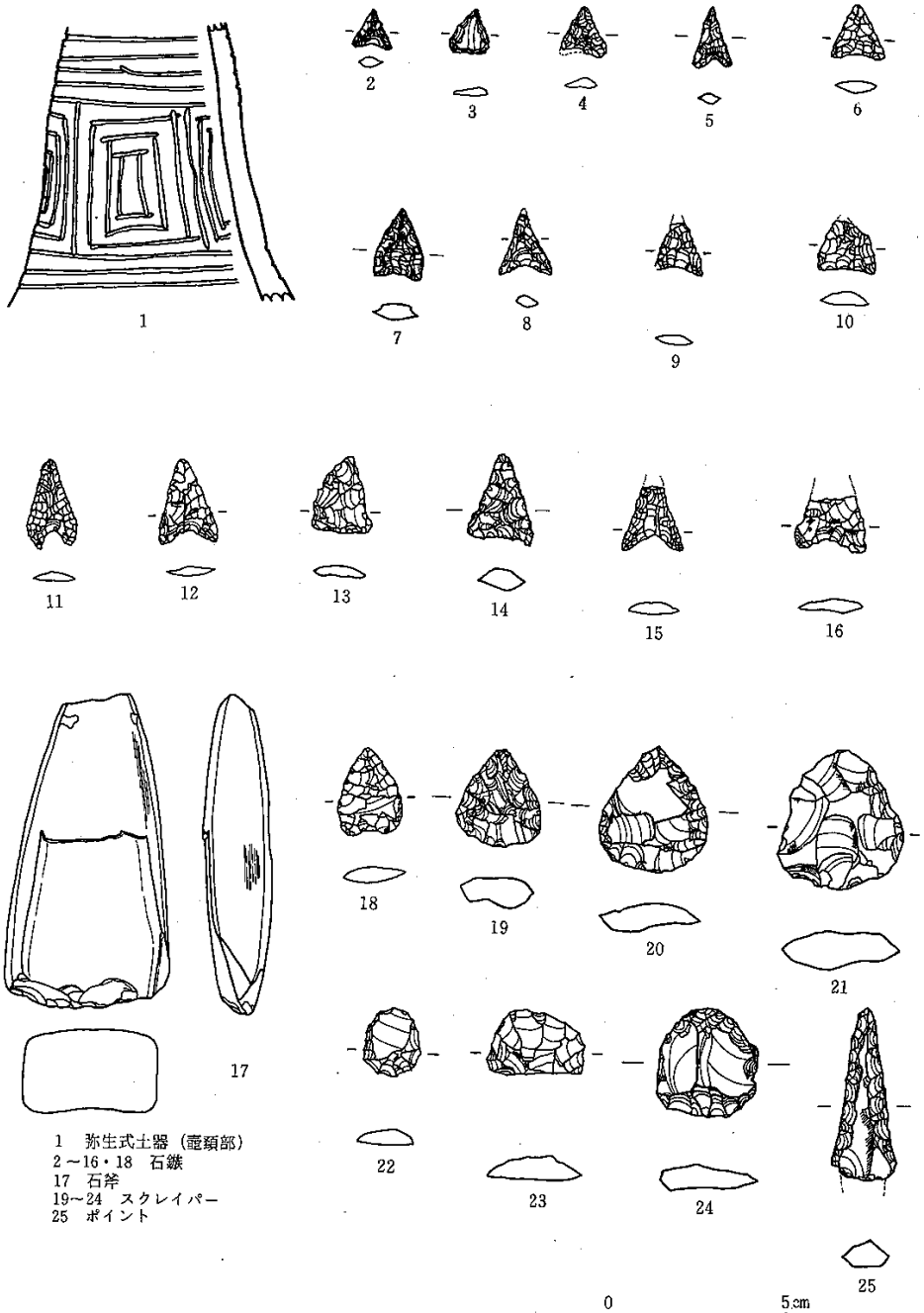
後藤勝彦（1968）「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査 17 集』



第11図　出土遺物拓本



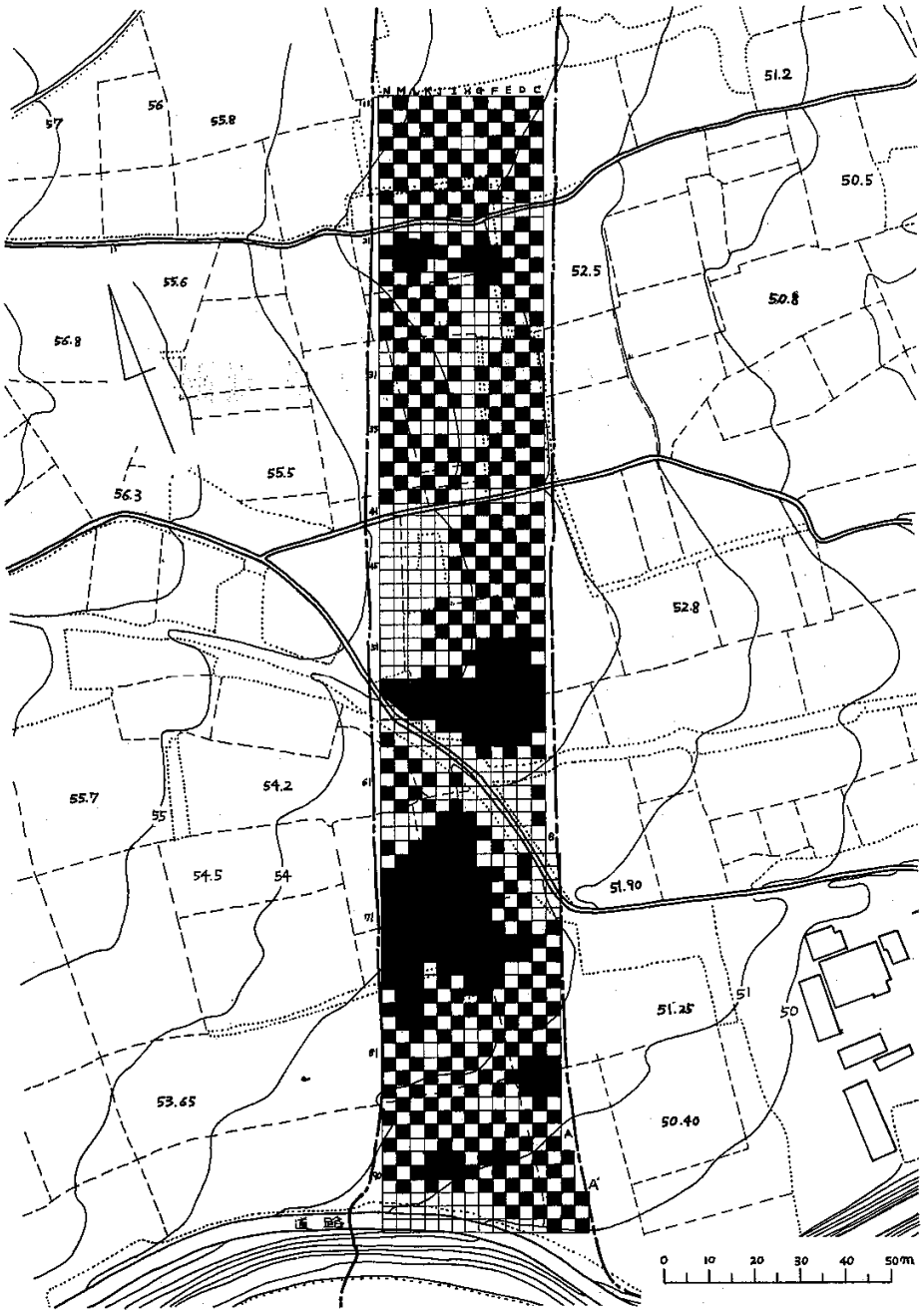
第12図　出土遺物拓本



1　弥生式土器（壺頸部）
2～16・18　石鏃
17　石斧
19～24　スクレイパー
25　ポイント

第13図　出土遺物実測図

（三）　青木脇（あおきわき）、青木後（あおきうしろ）遺跡



第14図　地形図・グリット配置図

青 木 脇 、青 木 後 遺 跡

1 遺跡所在地

宮城県白石市福岡字深谷字青木脇、青木後

2 調査期日

昭和46年6月6日～9月20日

3 調査担当者

宮城県教育委員会、日本道路公団

4 調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

調査係長　志間泰治
技術主査　氏家和典
技　　師　藤沼邦彦、白鳥良一
嘱　　託　佐々木安彦、小井川和夫、佐藤庄一、丹羽茂、加藤道男、岩渕康治
補 助 員　七戸貞子

5 調査の概要

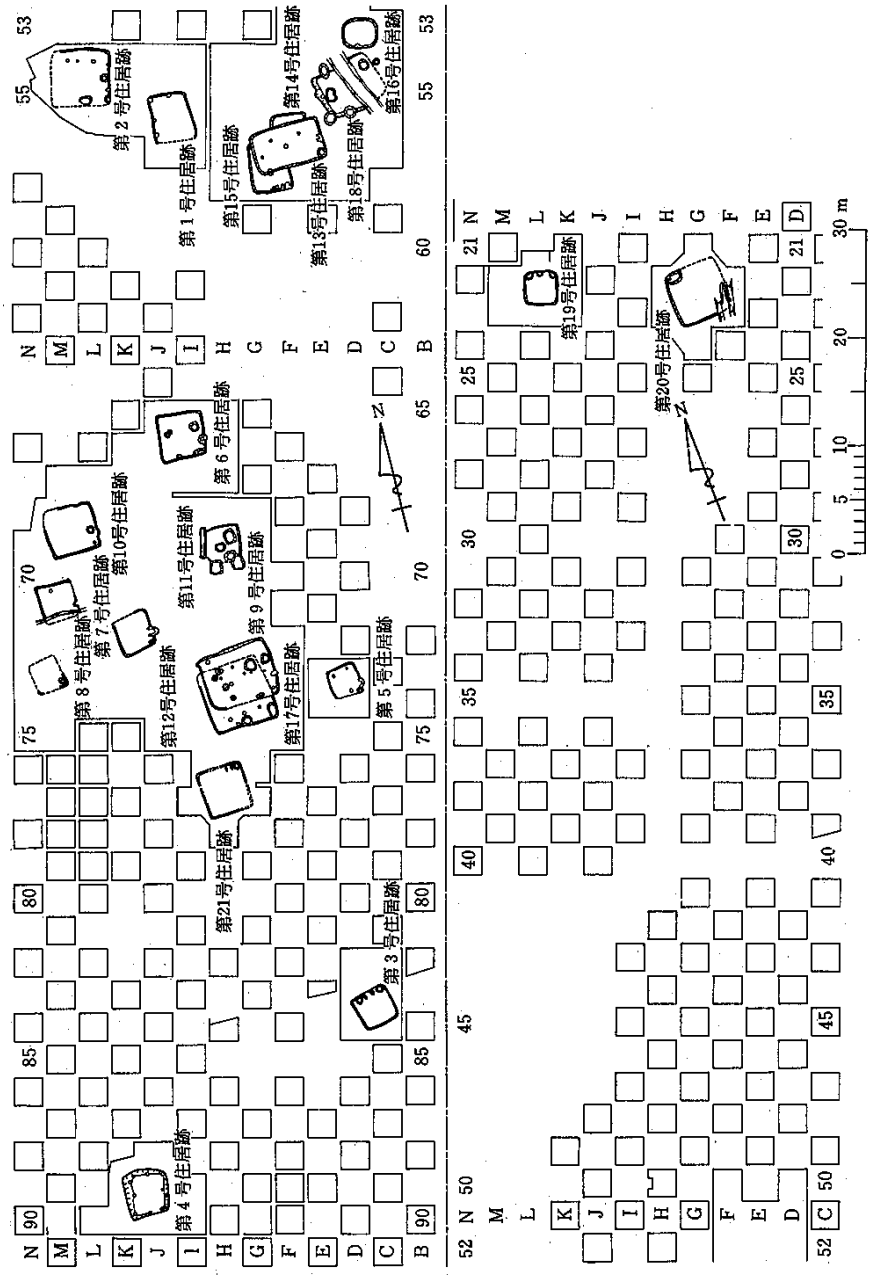
(1) 遺跡の立地

白石市の北部にある深谷地区には、青麻山から西南にのびる丘陵が発達している。この丘陵の東縁は白石川によって形成された河岸段丘で、海抜50～70mある。現在、丘陵の東と西にはそれぞれ白石川と児捨川が流れている。

青木脇、青木後両遺跡は、連続したひとつの大きな集落跡で、深谷地区の河岸段丘の東南端に位置する。標高約50m、段丘下の水田面との比高約15～20mで、かなりひろい平坦面を有し、東南にむかって若干の傾斜を示す。遺跡の範囲は広く、周辺一帯に縄文時代から平安時代にかけての遺物が散布している。弥生中期初頭の埋葬遺構の検出された著名な青木遺跡は、本遺跡から東南へ約300mはなれた地点にある。

(2) 調査経過

昭和43年度の試掘調査のさいに、青木脇遺跡では、平安時代の竪穴住居跡が1軒検出されており、また青木後遺跡でもトレンチには遺構がかからなかったが、畑地の表面における散布状況から精密調査の価値ありと判断されていた。今回は両遺跡を連続したひとつの遺跡—集落址—と考え、まづ東西36m×南北249mの範囲に一辺3mグリットの網をかけ、交互にグリットをあけてゆき、遺構の確認できた地点を順次拡張するという方法をとった。
その結果、調査面積8964㎡のうち1550㎡を発掘した。基本的な層序は、第一層（表土、耕


第1号住居跡
第2号住居跡
第3号住居跡
第4号住居跡
第5号住居跡
第6号住居跡
第7号住居跡
第8号住居跡
第9号住居跡
第10号住居跡
第11号住居跡
第12号住居跡
第13号住居跡
第14号住居跡
第15号住居跡
第16号住居跡
第17号住居跡
第18号住居跡
第19号住居跡
第20号住居跡
第21号住居跡
0 5 10 20 30 m

第15図　遺構配置図

作土）・第2層（暗褐色土層）・第3層（黒褐色土層）・第4層（黄色ローム層）となる。第2層も耕作によって撹乱されているものが多い。表土からローム層まで浅い所では第2層、第3層を欠く場合もある。

遺構としては、平安時代の竪穴住居跡21軒と時代、性格不明のピットが多数検出された。遺物は上記住居跡に伴うものが大部分で、それ以外の地域では少ない。種類は土器（土師器、須恵器、灰釉陶器）、鉄製品（鏃、紡錘車）、土製紡錘車、砥石、木製竪杵などで、その他縄文時代後期初頭の土器や石器の破片も少量出土している。

A縄文時代の遺物

この時期の遺物は、児捨川に近いゆるやかな南斜面にある小さな埋没谷の黒土層、および平安時代の住居跡の埋め土から発見されている。種類は、土器片、石鏃、石斧、掻器などである。土器片は後期初頭に位置する。その他、弥生土器片が数点検出された。

B平安時代の竪穴住居跡と遺物

竪穴住居跡

合計21軒ある。平面プランは方形を基本とし、カマドをもつものが多い。道路敷内に限定された調査のため、集落全体の中でどのような位置を占めていたかは不明である。伴出する遺物から平安時代のものと推定されるが、時期的な細分は困難である。ここでは発掘所見を概略するにとどめる。

第1号竪穴住居跡

昭和43年の予備調査によって検出された住居跡である。第2号と第15号住居跡との中間に住置する。

北壁3.9m、西壁の現存長3.9mで、やや長方形のプランをもつと思われる住居跡である。カマドは東壁中央にある。柱穴と断定できるものは3個、貯蔵穴状のピットは2個ある。遺物には、土師器（坏・甕）、須恵器（坏、壺、甕）がある。（県文化財報告17集参照）

第2号竪穴住居跡（第16図）

東壁4.9m、北壁現存長4.5mで、ほぼ方形のプランをもつと考えられる住居跡である。床面近くまで深耕されているため、南壁、西壁と北壁の一部は破壊されている。床から遺構確認面までの高さ（以下、壁の高さという）は、保存のよい北壁で約12㎝、東壁で15㎝である。北東隅の壁の内側に幅22㎝、深さ2～3㎝の溝が検出されたが、他の所では壁、床の保存のよい部分でも検出されなかったので、全体をめぐることはないと考えられる。

床面はローム直上で、黄色ロームと黒土がまじり、固くしまっているが、西半分および南側の一部は耕作のため削平されて残存しない。

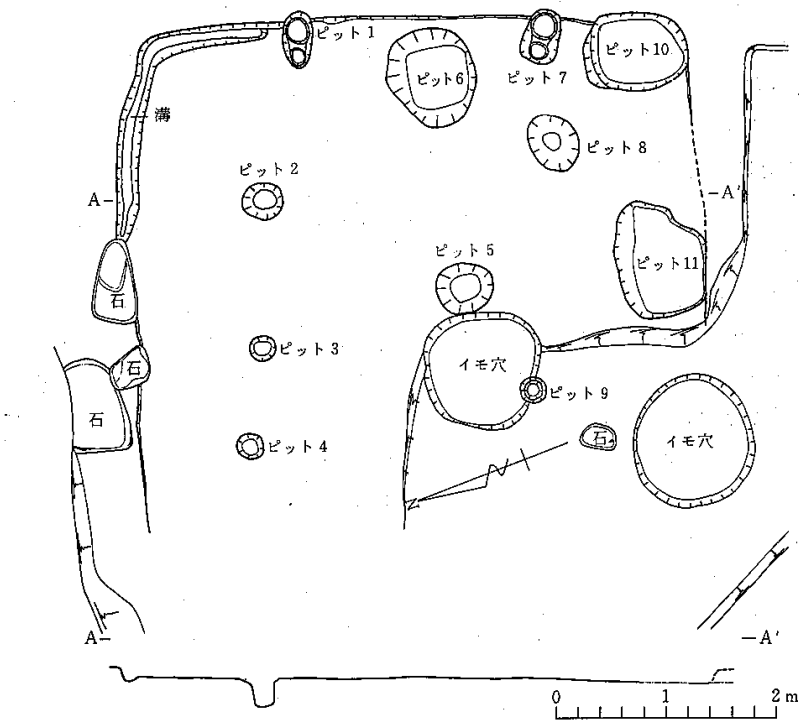
柱穴状のピットは8個（ピット1～5、7～9）ある。ピット1とピット7は、形態が

相似し、炭化物をふくむ埋め土もよく類似し、対をなすと考えられる。ピット2はおちこみの上端の傾いた面までたたきしめられていた。ピット8は床面をはがした時に検出できたものである。ピント3～5、9は、褐色の埋め土が入っていたもので、深さは15cmから30cmまである。これらのピット群のうち、どれとどれが柱穴として組み合うかは不明である。

カマドは検出できなかった。ピット6やピット8の近くで、床面が焼けて赤くなっており、その周辺に炭化物をふくむ焼土が多少分布していた。破壊されている部分が多いのでこの住居跡がもともとカマドを備えていたかどうかについては不明である。

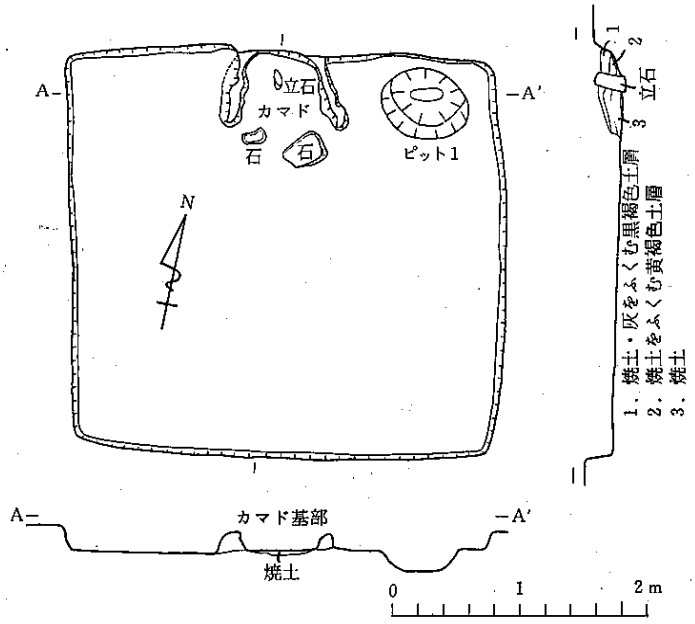
貯蔵穴状のピット（柱穴としては大きすぎるピットを便宜的に表現した）は3個（ピット6・10・11）ある。ピット6は東壁中央近くにあり、その上に焼土が分布し、内部から土器が数片出土した。ピット10は東南隅にあり、甕の破片が落ちこんでいた。ピット11は、掘り方が不定形で、埋め土も表土に類似したものなので新しいものと思われる。

出土遺物は、床面近くまで深耕されているためか、すべて破片のみである。須恵器（長



第16図　第2号竪穴住居跡

甕、大甕、坏）、土師器（甕、坏）がある。土師器坏2点に墨書があるが、判読できない。床面上のものとピット6から出た甕の破片は良好とはいえないが、住居の時期を示すものであろう。



第17図　第３号竪穴住居跡

第3号竪穴住居跡

（第17図）

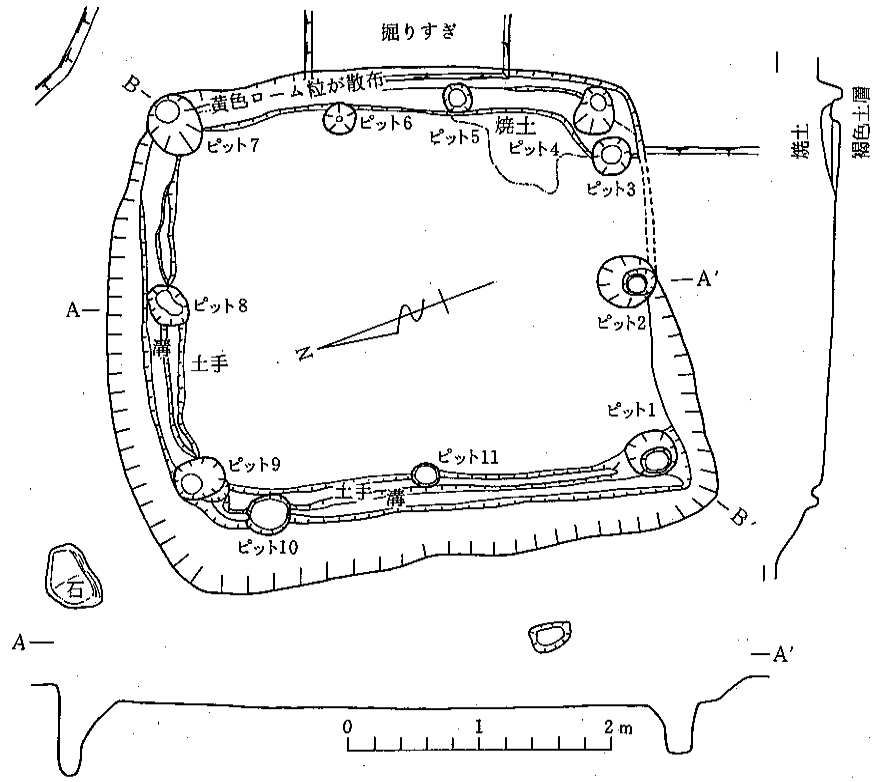
東西3.3m×南北3.3mのほぼ方形のプランをもつ住居跡である。表土下のローム面で遺構が確認された。壁の高さは、南壁で約20cm、北壁で約25cmであり、たちあがりは垂直にちかく、保存がよい。床面は白色粘土をふくむ黄褐色土で、非常に堅いが壁に近づくにつれ、やや軟らかくなる。この床面をはぐと、深い所で10cmほどのロームブロックを含む土層があり、その下が地山のローム層となる。従って、この床は貼床の一種と考えられる。柱穴状のピットは床面で検出できず、吟味のため、床面を削平したのちも、検出できなかった。また、周溝もみとめられなかった。

北壁中央に、粘土構築のカマドがある。残存する基部は、幅約1m、奥行約0.6mあり、馬蹄形である。カマド内部に高さ24cm、幅12cm、横6cmの細長い石（酸化のためもろい）が立っていた。これは煮沸の際に甕をささえる支脚の役割を果したものと思われる。カマド周辺には焼土が堆積し、なかから焼けた須恵器の大甕の破片が出土した。また、カマドと貯蔵穴との間に一括の甕の破片が検出された。貯蔵穴はカマドの右脇（住居跡の東南隅）にあり大きさは径65cm、深さ16cmある。うめ土は木炭をふくむ黒褐色土で内部から甕の破片が出土した。

住居跡内の出土遺物は少なく、土師器（坏・甕）と須恵器がある。

第4号竪穴住居跡（第18図）

東西3.8m×南北4.2mのやや長方形のプランをもつ住居跡である。遺構の確認面は、ローム層が東に傾斜しているため、西半分ではローム面であるが、東半分ではローム層の上



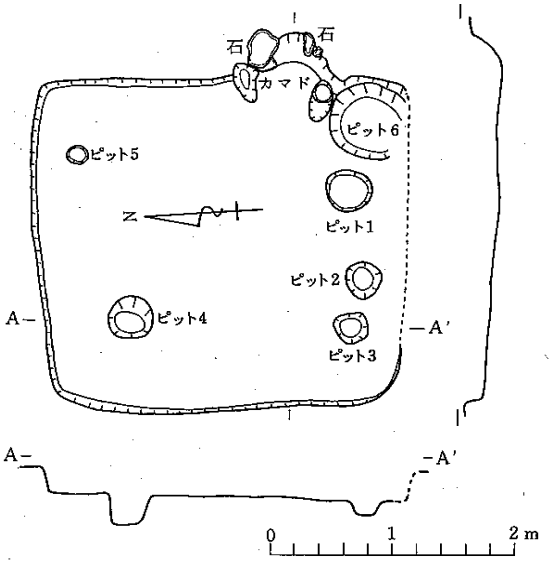
第18図　第４号竪穴住居跡

層である黒色土層となる。壁の高さは、西壁で約30㎝、東壁で約15㎝ある。壁のたちあがりは西壁ではかなりゆるやかであるが、東壁は高さが低いためか、かなり垂直に近い。また北壁と西壁の内側に幅18㎝の周溝が明確に残っている。床との境に4～8㎝の高さの土手を築いて作られた溝で、溝の底面の高さは床面と同じか、それよりも高いのが特徴的である。東壁に近い部分でも高まりはないが、東壁に平行して土手の痕跡と思われるローム粒をふくむ帯が細長くのびていた。南側では明瞭でなかったが、これは掘りすぎのためかもしれない。床面は小礫をまじえる黄色ロームであるが、東壁近くでは褐色土となる。かなり堅いが小礫まじりで凹凸がみられる。

柱穴状のピットは10個（ピット1～7、9～11）ある。ピット8は浅いくぼみであるので除外する。柱穴としての組合せを考えると、ピット1とピット7が、ピット3、4とピット9、10とが、ピット5と6とが、対になりそうである。またピット2では掘り方と本来の柱穴とを区別することができた。全体として柱穴状のピットの埋め土は軟らかい黒色土である。カマドは検出できなかった。南東壁に焼土の堆積がみとめられた。断面で観察すると、焼土は壁から20㎝ほどはなれて床面上にある褐色土層にのっており、焼土自体も

暗褐色土のブロックをかなりふくんでいる。またその部分の床面も焼けておらず、その下に発見されたピット内にも焼土はおちこんでいない。従って、この焼土は住居が廃棄されたのち、外からなげこまれたものと推定される。貯蔵穴と思われるピットはなかった。

遺物は、土師器、須恵器の破片が埋め土や床面からごく少量発見されたにすぎない。



第19図　第５号竪穴住居跡

第5号竪穴住居跡（第19図）

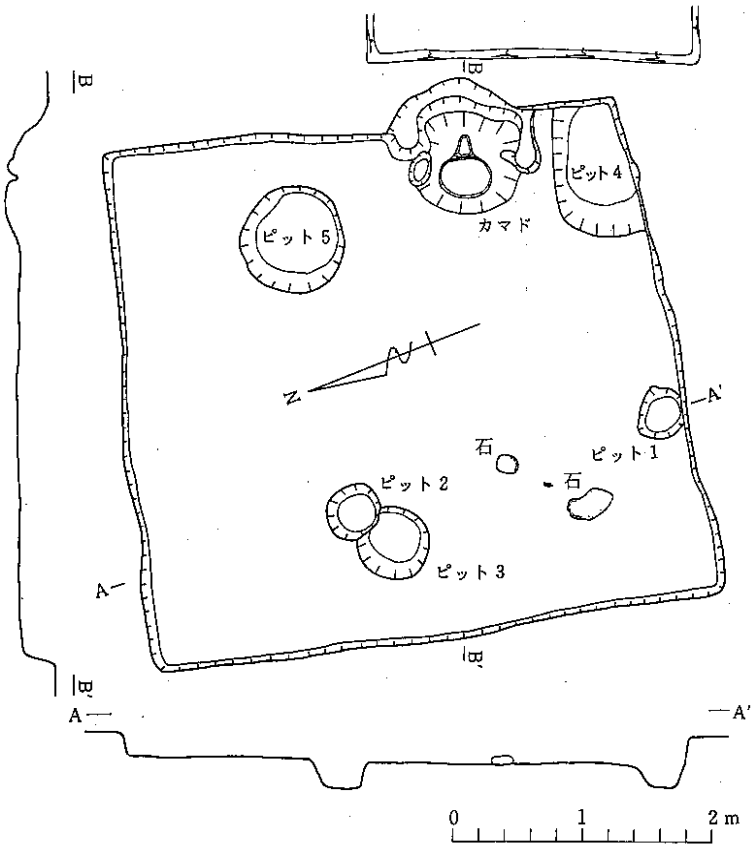
東西約3.0m×南北約2.9mのほぼ方形のプランをもつ住居跡である。ただし、南壁の大部分は電柱工事のため破壊されていた。表土下のローム面で遺構が確認された。壁の高さは、東壁約19㎝、西壁で約22㎝ある。立ちあがりは垂直に近く、南壁をのぞけば保存良好である。床面は黄色ロームで、堅くしまり、若干凹凸がみられる。柱穴状のピットは4個（ピット1～4）ある。埋め土は4個ともロームを混えた黒色土で、深さは約10㎝から28㎝まである。ピット5は浅いくぼみである。

東壁中央の南寄りにカマドがある。壁の外側まで掘りこみ、その西脇に礫および礫の抜取り痕と思われるものがある。またカマド内部に焼土に混じってかなりの石が発見された。石を芯とした粘土構築のカマドである可能性がある。またカマド内部中央に坏と甕が伏せた形で2個重なって発見された。この土器は再酸化のためもろい。支脚として利用された可能性がある。カマドおよびその周辺には多量の焼土と白色粘土が散布していた。貯蔵穴状のピットは1個（ピット6）ある。径70㎝、深さ25～30㎝あり、底面はナベ底状である。底近くに灰が堆積し土器片が検出された。

遺物は少量であるが、床面やカマド周辺から良好な資料が発見されている。種類は土師器（坏、甕）、須恵器（坏、大甕）である。床面直上からでた土師器坏に「大村」の墨書がみられた。

第6号竪穴住居跡（第20図）

東西約4.0m×南北約4.3mのほぼ方形のプランをもつ住居跡である。表土下のローム層が遺構確認面である。現存の壁の高さは、西壁で約25㎝、東壁で約7㎝である。壁のたちあ



第20図　第6号竪穴住居跡

がりは垂直に近く、壁面の保存も良好である。床面は黄褐色のロームで、凹凸があり非常にかたいが壁に近づくにつれ、軟らかくなる。カマド前面のかたい床面をはぐと深さ数cmの浅い黒色土のおちこみがみられた。この中からも土器片が発見された。柱穴状のピットは3個（ピット1～3）ある。深さ約10cmから20cmまであり、埋め土の状況は類似する。ピット2はピット3を切っている。柱穴としてどのような組合せをするのか不明である。

東壁中央のやや南よりにカマドがある。壁を少し掘りこみ、周囲を白色粘土で馬蹄形にかためたカマドの基部が残っていた。基部の左裾に石の抜きとり痕とみられるものがある。石を芯とした粘土構築のカマドの可能性がある。カマド内部は浅く掘りくぼめられており、焼土が層をなして堆積していた。煙道はない。貯蔵穴状のピットは2個（ピット4・5）ある。ピット4はカマドの右脇（住居跡東南隅）にとりついているもので内部から土器片が出土した。

出土遺物は埋め土中に多量にあるが、床面出土のものは少ない。土師器（坏、甕）、須恵器（坏、壺、甕）、鉄製品などがある。また、底部に「四」のヘラ書きをもった土師器坏もある。

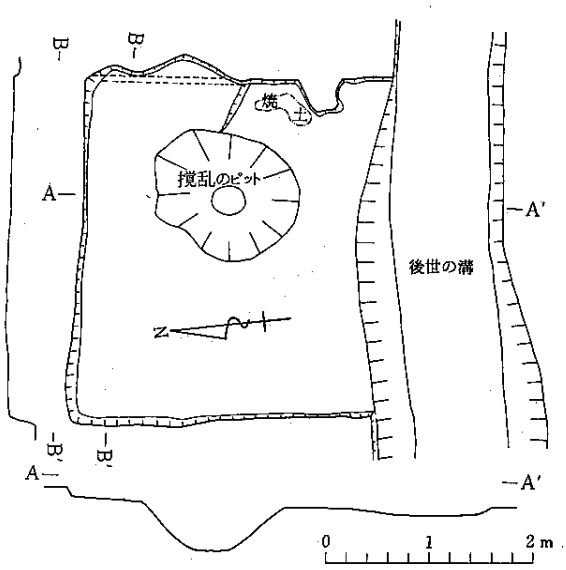
第7号竪穴住居跡（第21図）

北壁約3.5m×東壁の現存長3.0mで方形のプランをもつと推定される住居跡である。南半は後世の溝によって破壊されている。遺構が確認されたのはローム面で、現存の壁の高さは、北壁で15cmある。立ちあがりは垂直に近い。また東壁の北側はくずれていたが、こ

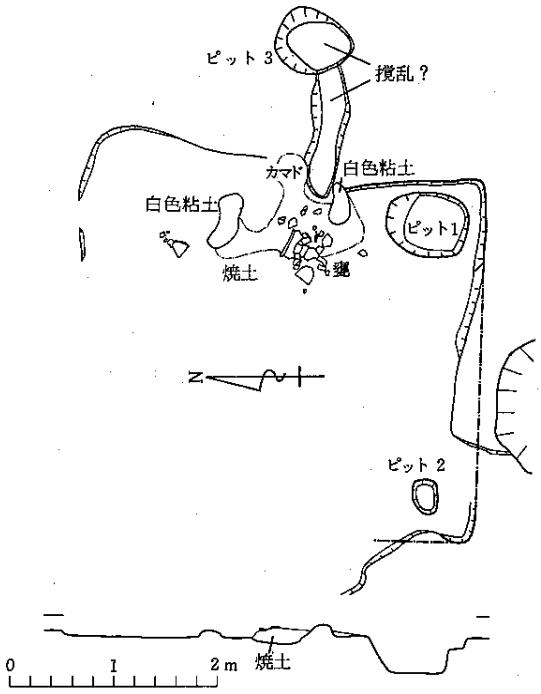
の部分の床面はしっかりしていたため、その境は明確であった。床面は、暗褐色のローム面で、かなり木・根などであれていた所が多い。床面直上には焼土が散在していた。柱穴や貯蔵穴と思われるピットは検出できなかった。ピット1は、埋土中から掘りこまれた新しいものである。東壁近くに焼土が分布するが、カマドについては不明である。出土遺物は少量であるが、土師器(坏、甕)、須恵器(坏)、鉄鏃1点などがある。

第8号竪穴住居跡（第22図）

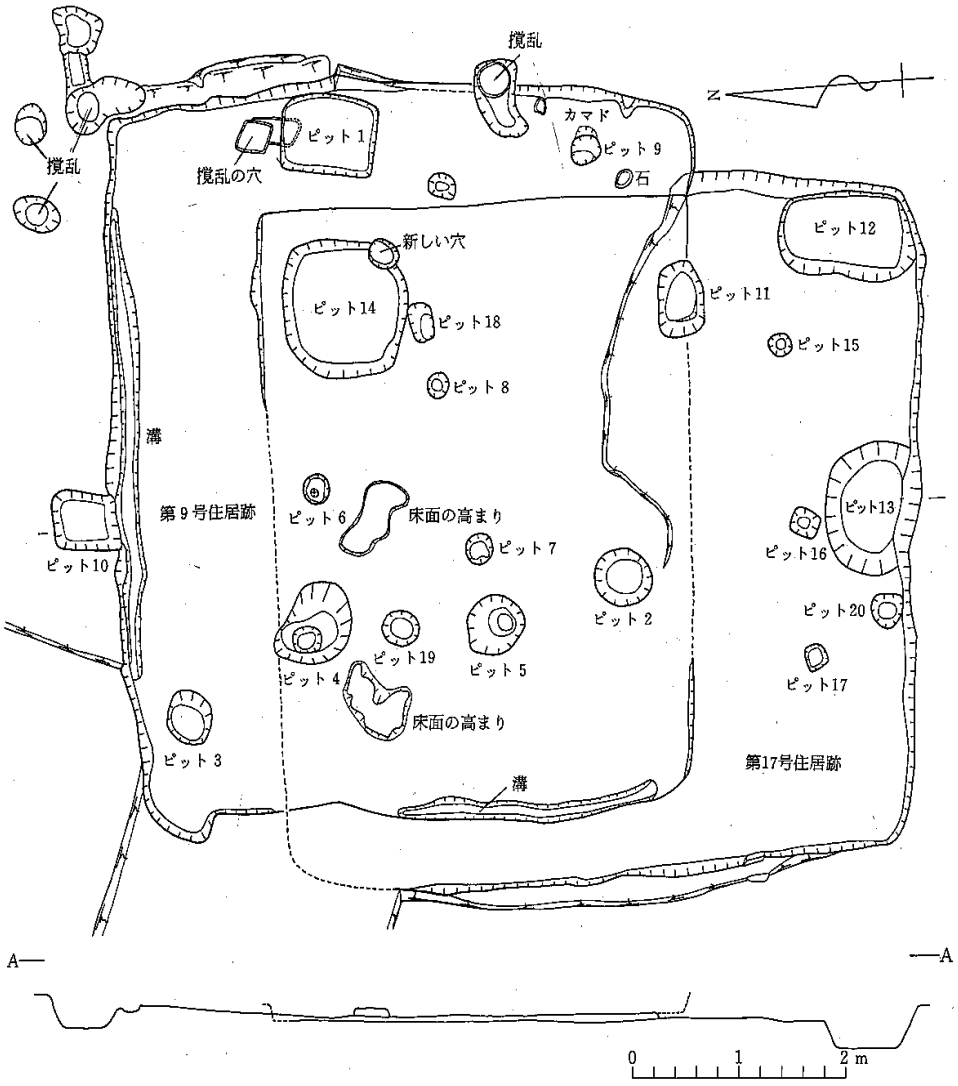
この住居跡のある地点は、にんじん畑で、床面まで深耕されていたため、住居跡の輪郭は東南隅の一部がとらえられたのみである。残存した床面は硬くわかりやすいものであったが、大部分は破壊されていて、住居跡の規模(範囲)はわからない。柱穴状のピットは2個(ピット1、2)ある。ピット1は直径30㎝、深さ26㎝のもので貯蔵穴である可能性がある。東壁と推定される部分にロームの焼けたものと思われる焼土のブロックと白色粘土とが分布し、その



第21図　第７号竪穴住居跡



第22号　第８号竪穴住居跡



第23図　第９号・第17号竪穴住居跡

中に一括の甕の破片があった。焼土をとり除くと、浅いくぼみが検出されたので、カマド跡と推定される。この焼土の東側に、溝とピット（ピット3）があるが撹乱によるものと思われる。貯蔵穴や周溝は発見できなかった。出土遺物は、破壊が著しい割には、残存の床面上や埋め土（焼土、灰を多くふくむ褐色土層）から多量の土器片が出土した。種類は、須恵器（坏、甕）、土師器（坏、甕）である。

第9号竪穴住居跡（第23図）

本住居跡のある箇所は、西半の部分で、黒土層が深いことと、耕作による撹乱のために遺構の輪郭を把えるのが困難であった。2軒の住居跡が重複していることを確認できたのは床面近くまで掘り下げた段階である。

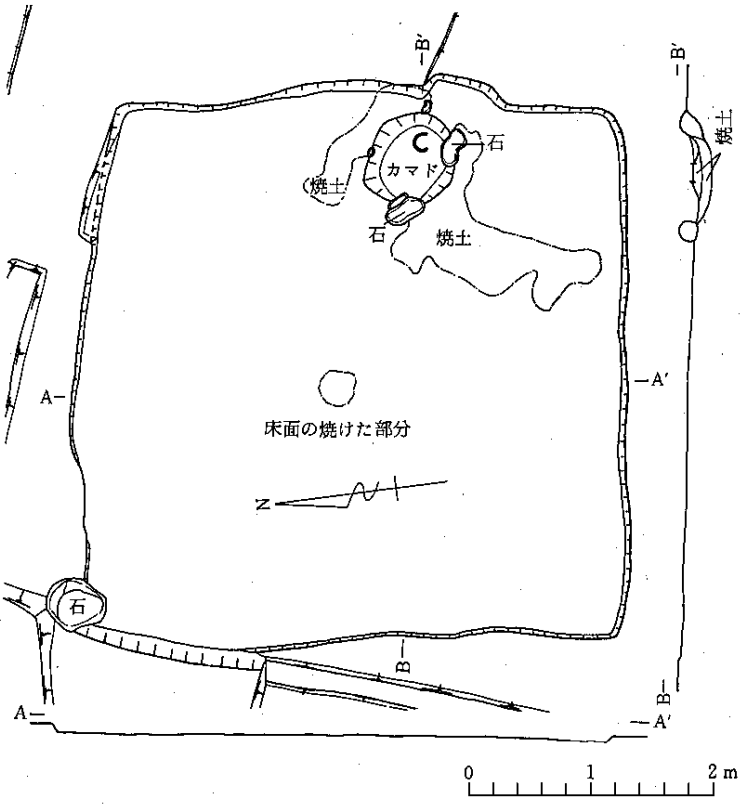
東西約6.2m×南北約5.5mのやや長方形にちかいプランをもつ住居跡で、第17号住居跡を3分の2ほど切ってつくられたものである。壁の高さは最も保存の良い北壁で20～30cmあり、立ちあがりも垂直に近い。床面は貼り床で、第17号住居跡の床面より、約5cm前後高い。この貼り床は堅く保存がよかったが、西壁に近い所でははっきりしない。また中央の一部やカマド前面に、さらに5cm高い貼床状の高まりが認められた。本住居跡の範囲に属するピットは合せて9個（ピット2～10）ある。これらは床面で検出された、埋め土は軟かい暗褐色土が多い。大きさや深さは、いろいろあり、どれとどれとが柱穴として組合うか断定することはできない。ピット9はカマドの前面にあり、一段高い床面状の高まりを削平したのち確認したものである。ピット10は北壁の外側にあり、焼土や白色粘土をかぶり、埋め土はロームを混じえた黒褐色土であった。

東壁の東南隅に近い所に、焼土の堆積がみられ、これらを除去すると、カマドの基部が検出され、右裾に黄色粘土・左裾に壁にとりつくような形で礫が残存していた。保存が良くなく、巾は92cmあるが、奥行12cmしか確認できない。このカマド周辺以外にも、焼土の分布が3個所に認められたが、これらは住居の廃絶後に投げこまれたものと考えられた。また床面の一部が焼けて赤色を呈している所も1個所あった。貯蔵穴状のピットは2個（ピット1・14）あり埋め土は黒色土である。内部から土器片が若干検出された。しかし、ピット14は、第17号住居跡の北東隅と推定される所にあり、本住居跡よりむしろ第17号住居跡に属すると考えた方がよい。また東壁沿いに周溝が一部みられた。

遺物は、土師器（坏、甕）、須恵器（坏、長頸壺）、鉄製紡錘車、土錘がある。土師器坏には墨書「上」がある。

第10号住居跡（第24図）

東西約4.4m×南北約4.2mのほぼ方形のプランをもつ住居跡である。遺構が確認されたのはカマド周辺の焼土が検出されてからであるが、輪郭は一部をのぞいて明瞭にとらえら



第24図　第10号竪穴住居跡

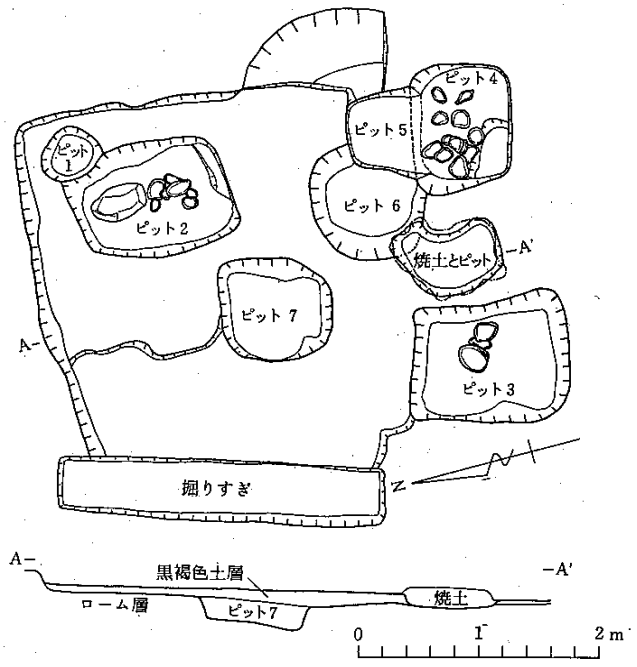
れた。遺構確認面は黒土層中で、壁の高さは、東北隅で約10cm、南壁で約5cmある。床面は、中央部およびカマドの前面では、非常に堅く明瞭であるが、壁に近づくにつれ軟らかくなり検出しにくい。

柱穴状・貯蔵穴状のピットは、床面が黒褐色土のためか検出されず、床面をはがし削平をくり返したのちもついに発見できなかった。

カマドは、東壁中央のやや南よりにある。酸化した粘土の基部が残存していたが、削平してしまい、図面に記録できなかった。カマド内部に堆積した焼土をとりのぞくと、径70cmのくぼみとなっており、粘土をつめた甕（半欠・底部なし）がさかさに立ててあった。これも支脚の役割を果したものと推定される。またくぼみの周辺に礫が残っており、石を芯にした粘土構築のカマドであった可能性がある。カマドおよびその周辺には、多量の焼土が広く分布し、その中に土器片がふくまれていた。

遺物には、土師器（坏・甕）と須恵器（坏・甕）のほか、鉄鏃の破片がある。

第11号住居跡（第25図）



第25図　第11号竪穴住居跡

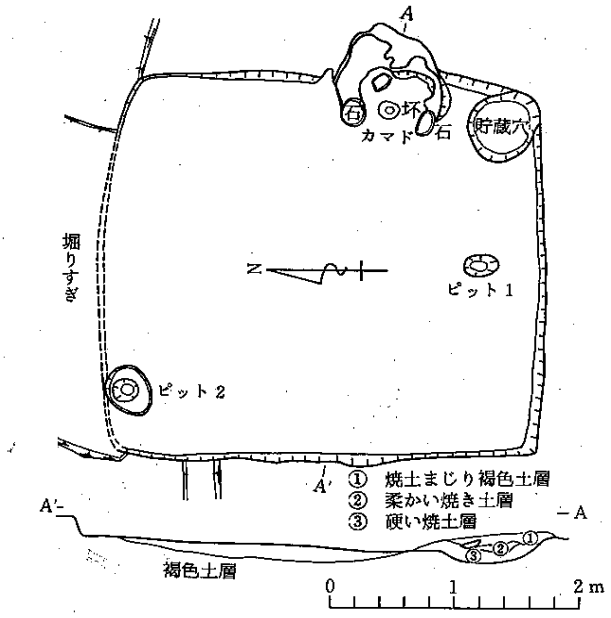
表土下の黄褐色ローム面で、遺構と思われる落ちこみの一部を検出し、全体の輪郭を把らえるため、幾度も削平を繰り返したが北壁と東壁とを確認できたにすぎない。西壁および南壁については不明である。壁の現存長は、北壁で3.0cm、東壁で2.8cmあり、壁の高さは7～10cmある。床面は黒褐色土をまじえたやわらかい黄色ロームで、かなりの土器片が散布していた。この床面も南半にちかづくにつれ、次第に汚れた黒褐色土となり不明瞭となる。床面下には約10cmの黒褐色土があり、基盤のローム層となる。柱穴状ピットは床面では検出できず、床面をはがしたローム面で1個発見した。

カマドについても不明であるが、南半に焼土の堆積が床面の二ヶ所にみられた。一つは単なる焼土の堆積であるが、もうひとつは長径70cm、厚さ20cmあり、灰と焼土塊が混入し、この下に舟底状のくぼみが検出された。これはカマドであった可能性がある。貯蔵穴状のピットは6個(ピット2～7)ある。いずれも床面ではなく、基盤のローム面で確認された。すべて隅丸の長方形に似た平面形をもち、底部が平坦面をなしているものが多い。うめ土はローム粒をふくむ黒褐色土でほぼ共通する。ピット4～6の3個は切りあっており、ピット4・5・6の順に新しい。またピット2・3・4の底面に20cm前後の礫が落ちこんでいた。これらのピット群の性格は不明である。

遺物は、土師器（坏・甕）と須恵器（坏・甕）がある。

第12号住居跡（第26図）

東西約3.3m×南北約3.4mで、ほぼ方形のプランをもつ住居跡である。遺構確認面は黒褐色土層であり、北壁は掘りすぎのため確認できなかった。壁の高さは東壁で20cm、西壁で15cmあり、たちあがりは垂直に近く、壁面の保存もよい。床面は黄色ロームを混じえた黒



第26図　第12号竪穴住居跡

褐色土で、中央部はかなり硬いが、周壁に近づくとかたさを失う。床面上には多くの土器片が散布していた。柱穴状ピットは、床面では汚れのためか検出できず、床面をはがしたのち2個(ピット1・2)発見した。東壁中央のやや南よりに壁をほりこんだカマドがある焼けた粘土の基部が馬蹄形（巾9.0cm、奥行80cm）に残存し、その両裾に、一個ずつ石がおかれていた。補強用の石と考えられる。カマドおよびその周辺には、焼土が厚く堆積し、その中から土器片が出土している。

貯蔵穴状ピットはカマドの右側、住居跡の東南隅に1個ある。径50cm、深さ12cmの浅い鍋底状をしたもので、床面から確認された。内部に焼土がおちこみ土器片が検出された。貯蔵穴と考えて良い。

遺物は土師器（坏・甕）と須恵器（坏・甕）がある。

第13号住居跡（第27図）

東西6.5m×南北4.0mの長方形のプランをもつ住居跡である。表土をはぐとすぐロームの遺構面で第14号・第15号住居跡を破壊して作られていた。壁の高さは、北西隅で30cm、東壁で約8cmあり、第15号住居跡と切りあった部分を除いて、壁面の保存は良好であった。

床は黒色土が混じったローム面でややかたく保存がよかったが、第15号住居跡と重なった部分は貼床になり、検出が困難であった。

柱穴状のピットは10個ある。ピット1とピット5は穴の上面に、炭化した長さ数cmの木材が立ったまま残存していたが穴の内部までおよんでいなかった。この木材は柱と考えてよさそうである。これらのピット群は細部において差異はあるが埋土は住居跡の埋土と同質のやわらかい暗褐色土である。これらが柱穴としてどのように組み合うかは不明である。また第14号や第15号住居跡と重複している部分では、これらに属するピットがふくまれている可能性がある。

カマドは東壁中央のやや北寄りにある。基部と思われる黄色粘土（部分的に赤く酸化している）が残存し、礫が3個カマド内部にあるが、原位置ではないと思われる。このカマドには厚く焼土が堆積していた。そのほか、床面がやけて赤色を呈している所が2ヶ所あった。

貯蔵穴（ピット17）は東南隅に1個ある。1.1m×0.8mで深さは約15cmと浅く底面は平らで土器片が出土した。

東南隅と北西隅の壁の内側に溝（巾10cm・深さ4cm）がある。しかし他の部分では検出されなかった。

礫を集めて組んだ炉が住居跡の北東隅に近い部分で検出された。径68cm×62cmで南西側に石の配列がない。この部分の石がもともとなく、カマドの焚き口的な役割を果していたものなのか、あるいは破壊されてなくなったのかは不明である。内部に焼土と一括のカメの破片が入っていた。周囲の石もやけてもろい。

また、この炉から65cmはなれた所に、長方形の凝灰岩の切り石がある。この石は第18号住居跡のカマド内部に支脚として利用されていたものと同一の形状である。

西壁に接して須恵器の大甕の底部が検出された。底部がまるいため、安定を保つように石の支えがあった。

出土遺物は非常に多い。住居跡のうめ土は炭化物や焼土をかなりふくんでおり、大形の炭化材もあった。火事に遭ったものと考えたが、それにしては床面には焼土、炭化材が少ない。出土遺物は須恵器（坏、大甕）、土師器（坏、甕）、灰釉陶器（坏）、土製紡錘車、鉄鏃、木製竪杵がある。

第14号住居跡（第27図）

北壁3.3m×西壁の現存長1.0mで、方形のプランをもつと推定される。南側の大部分は第13号住居跡のために破壊されて、北壁に近い部分が残存している。壁の高さは北壁で約16cmあり、たちあがりはややゆるやかであるが保存は良い。

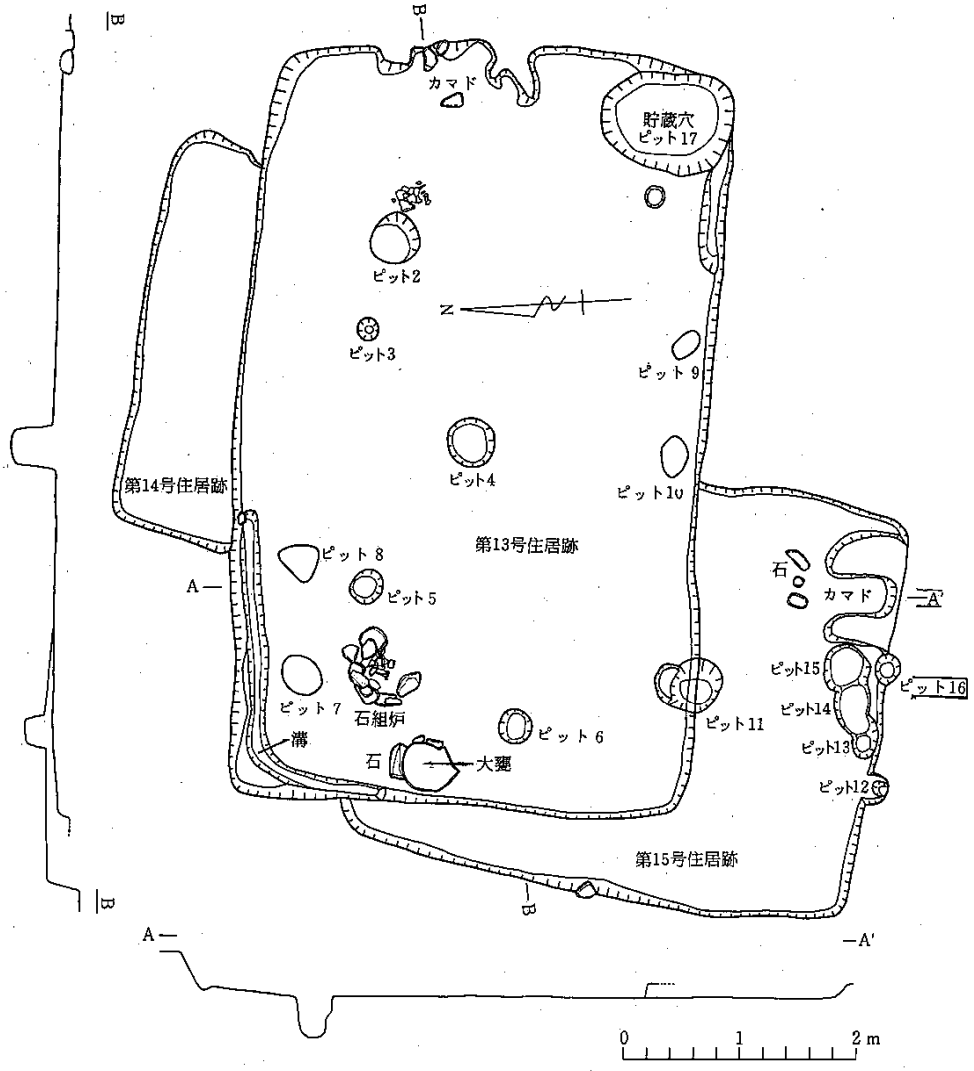
床面は基盤のローム面で堅く、第13号住居跡の床面より、4～5cm高い。北東隅に近い床面から須恵器坏の完形品が出土したのみで、床面上の遺物は少ない。

柱穴や貯蔵穴は検出されなかった。しかし、第13号住居跡と重複している部分に、本住居跡に属する柱穴状のピットが含まれている可能性はある。

出土遺物は、上記の須恵器坏のほか、若干の土器片がうめ土中から出土している。

第15号住居跡（第27図）

南壁3.4m×西壁4.2mのやや長方形のプランをもつ。第13号住居跡によって破壊されているため、東壁と北壁の大部分は不明である。

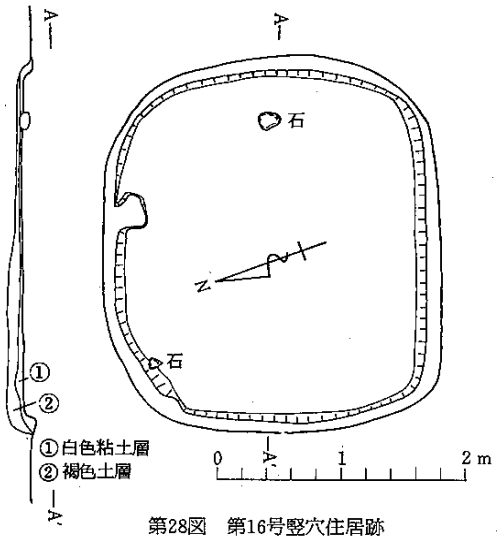


第27図　第13号・14号・15号竪穴住居跡

壁の高さは、西壁で約28㎝、南壁で約20㎝あり、立ちあがりは垂直に近く保存もよい。

床面は黒褐色土の混じった基盤のローム層で、やや固い。西半の一部で第13住居跡の床面より約5㎝低いので、北壁と東壁の立ちあがりをおさえることができると考えたが、ゆるやかに第13号住居跡の床面に続いてしまい、その境を明確につかむことはできなかった。

柱穴状のピットは7個(ピット11～16)ある。ピント13～15の3個は穴の壁がくずれて、



第28図　第16号竪穴住居跡

3個連続した形になっている。ピット12とピット16は南壁に半分くいこんだもので、対となりそうである。ピット11は第13号住居跡の東壁の真下にあるが、本住居跡に属するものであろう。そのほか、第13号住居跡と重複している部分に、本住居跡に属するピットがふくまれている可能性がある。

南壁の東南のコーナーに近い所に焼土の堆積が見られ、この部分にカマドの基部と推定される粘土が、巾1m、奥行0.6mの馬蹄形状を呈して残存していた。カマド内部はごく浅いくぼみ状を呈していたが、底面は焼けていない。また前面に4個の礫があるが、原位置ではなさそうである。貯蔵穴はない。

遺物には、土師器（坏、甕）と須恵器（坏）の破片がある。

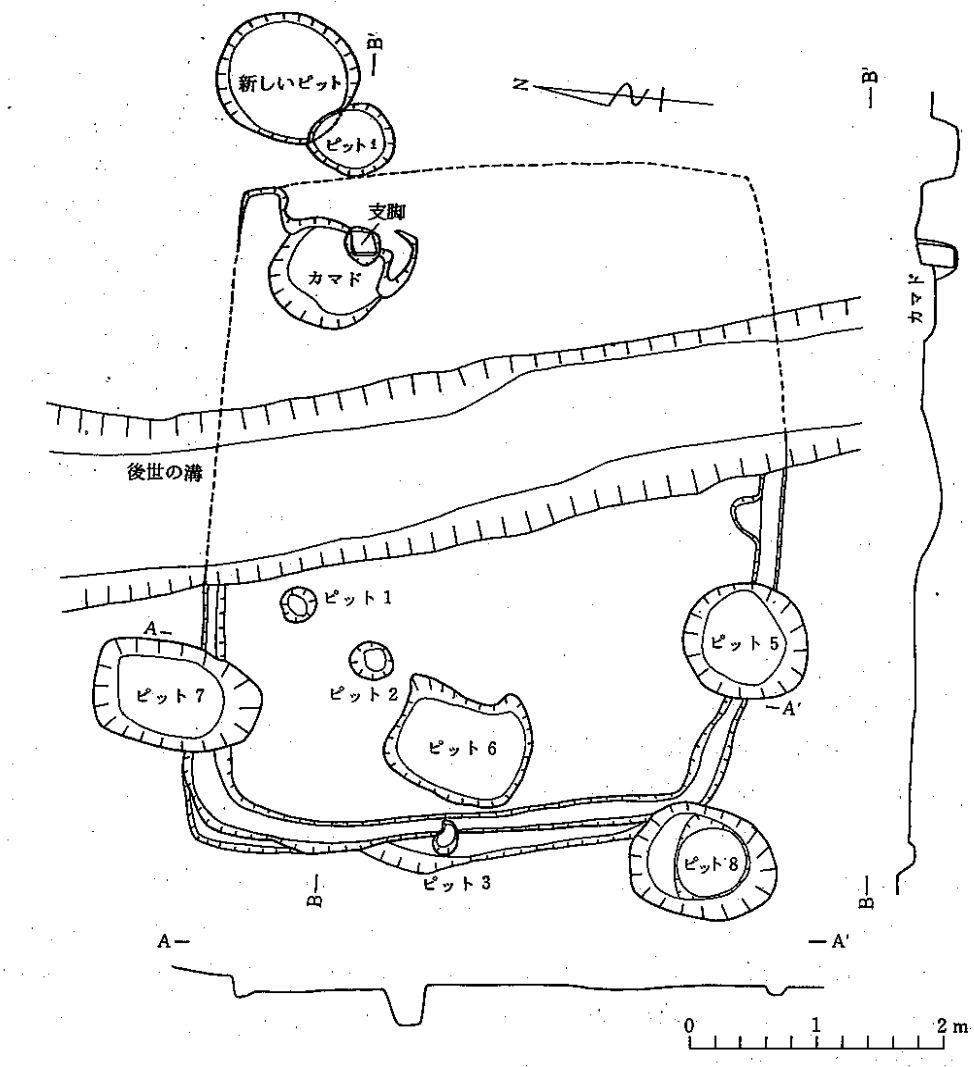
第16号住居跡（第28図）

東西3.0m×南北2.8mの隅丸長方形のプランをもつ住居跡である。表土下のローム面で遺構が確認された。壁をふくむ竪穴全体に2～8cmの白色粘土が貼りつけてある。壁の高さは北壁で約12cm、東壁で約7cmあり、たちあがりは比較的ゆるやかである。床面は汚れた白色粘土が面をなし、中央部はややしまりがある。床面上には遺物は少ない。この白色粘土の床面をはぐと、黒色土のまじったロームが層をなし、その下に基盤のローム層がある。柱穴や貯蔵穴と思われるピットは、床面でも、床面下の基盤のローム層面でも検出できなかった。またカマドや周溝もない。住居跡としては特殊な例である。

第17号住居跡（第23図）

東西6.0m×南北6.0mのほぼ方形のプランをもつ住居跡である。第9号住居によって3分の2近く破壊されている。壁の高さは南壁で約12cm、東壁で18cmある。床面が第9号住居跡より5cmほど低いので、北壁の一部もわずかの高さで検出できた。床面はロームで堅く保存がよい。

柱穴状のピットは7個（ピット11、15～20）ある。ピット18、19の2個は第9号住居跡の床面をさらに削平して検出されたものである。ピット11は第9号住居跡の南壁の真下にあり、内部から一括の土器片（精査中、夜間に紛失した）が検出された。これらのピット群のうちピット15、17、18、19の4個は、ほぼ対角線上にあり柱穴として組合う可能性が



第29図　第18号竪穴住居跡

ある。

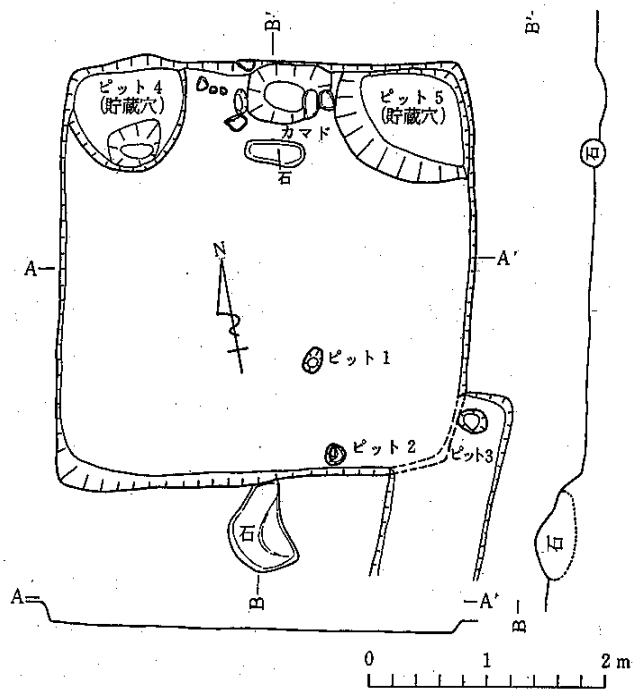
カマドは検出されなかった。黒土を混じえた焼土が4個所にみられたが、カマドの施設とは関係ないと思われる。本住居跡のカマドは、第9号住居が構築される時に、破壊された可能性がある。貯蔵穴状のピットは3個（ピット12～14）みられる。ピット14は第9号住居跡と重複する範囲にあるが、本住居跡の東北隅に位置するので、本住居跡に属するとみてよい。

遺物は土師器（坏・甕）と須恵器（坏）があるが、量的に少ない。

第18号住居跡（第29図）

南北約4.1m×東西4.5mのやや長方形のプランをもつ住居跡であると推定される。畑の深耕や住居跡中央部を南北にはしる後世の溝のため、西半分と東壁のカマド周辺しか残存しない。壁の高さは西壁で13cmあり、立ちあがりはやや垂直に近い。東壁は外側に彎曲すると考えられる。壁の内側には、巾15cm、深さ3～8cmの周溝がめぐる。北東隅は西半にみられる周溝もないので、果して住居跡の北東隅の壁としてよいか疑問がのこる。

柱穴状のピットが3個（ピット1～3）ある。ピット3は壁に半分くいこんでいる。これらが柱穴としてどのような組合せをするかは不明である。カマドは東壁の北寄りにあり基部と考えられる黄色粘土が馬蹄形状（巾1.1m、奥行0.4m）に残存していた。カマド内部の奥壁に接してピットがあり、現存の長さ25cmの凝灰岩の切石が立てられてあった。支脚としての役割を果したものと思われる。ピットはこの切石を据えるための掘り方であろう。切石の前（カマド内部中央）は、深さ13cm前後の浅いくぼみとなっていた。カマドおよびその周辺には焼土の分布がみられた。また、本住居跡のプランを残存部から推定して、長方形プランであると仮定すると、カマドの軸は、推定される東壁に対し、直角にならない。この点でも、本住居跡のプランを単なる長方形と考えるには疑問がないわけでない。



第30図　第19号竪穴住居跡

貯蔵穴状のピットは4個（ピット4～7）ある。ピット4はカマドの東側にあり、推定される東壁の外側になるが、なかから坏などの一括が出土している。ピット5～7はローム塊が斑点状にまじる黄褐色土が埋め土で、後世の掘りこみと思われる。従って竪穴内部に伴う貯蔵穴はないといえよう。

遺物は土師器（坏、甕）と須恵器（坏・甕）で、量的にも少ない。

第19号住居跡（第30図）

東西約3.5m×南北約3.4mのほぼ正方形のプランをもつ住居跡である。掘りすぎのため、南東隅を破壊したが、全体的に保存は良好であった。遺構確認面は黒褐色土で、ローム層も約10㎝掘りこまれている。壁の高さは、東壁で約20㎝、南壁で約15㎝あり、たちあがりは垂直にちかい。床は黄色ロームと暗褐色土の混じった固い面をなしており、とくに中央部での保存は良好であった。

柱穴状のピットは3個（ピット1～3）ある。深さは約25㎝から35㎝まである。ピット3は南東隅の外側の部分にあたる。

カマドは北壁中央部にあり、巾70㎝、奥行50㎝である。カマドの右側に石があり、左裾に石の抜き取り痕がある。その周辺にも移動したと思われる礫が数個みられるので、礫を芯にした粘土構築のカマドであったと推定される。また、カマド内部には深さ10～15㎝の浅いくぼみが検出され、その前面に長さ50㎝の細長い礫が北壁と平行して配置されていた。カマドの内部およびその周辺には焼土（暗褐色土が混入）が堆積しており、土器片の分布も多い。貯蔵穴状のピットは、カマドの左右に1個ずつ検出された（ピット4・5）。ピット4は底面がせまく、ピット5は広く平らであるが、両者とも住居跡の埋め土と同じである。ピット4からは土師器片が出土した。貯蔵穴して良いと思われる。

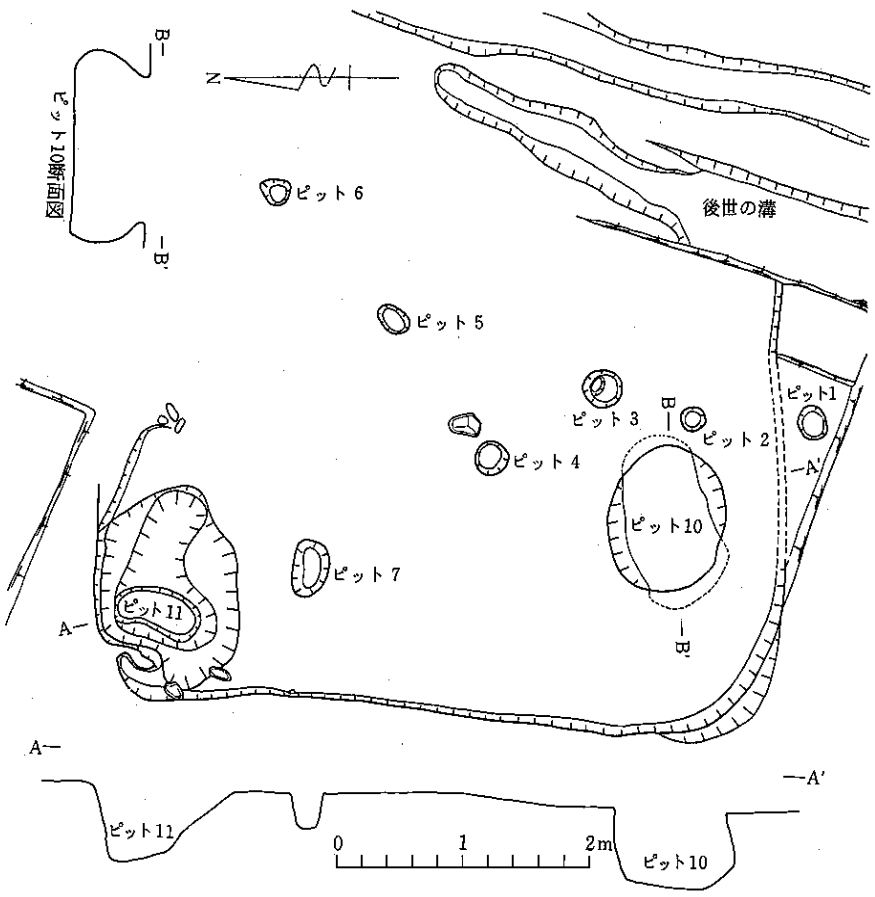
遺物はあまり多くなく、土師器（坏・甕）と須恵器（坏）が若干出土した。その他砥石が一点ある。

第20号住居跡（第31図）

東西の現存長3.5m×南北5.4mで隅方形と思われるプランをもつ住居跡である。表土をはがすとすぐロームの遺構確認面であるが、畑の深耕が床面近くまでおよんでいることと、竪穴の東部を南北にはしる後世の溝のため、東半部の形状は不明である。西壁の高さは15㎝あり、壁面の保存は良い。床面は南半の部分で、堅い面として検出されたが全体的に保存がよくなく凹凸が目立つ。

柱穴状のピットは7個（ピット1～7）ある。深さは、各々異となり、9㎝から41㎝まである。ピット1は竪穴の外にとびだす。これらのうち実際に柱穴の役割を果たしたものが、どれであるかは断定できない。カマドは検出されなかった。床面の2個所に焼土の堆積がみられたのみである。

貯蔵穴状のピットは2個（ピット9・10）ある。ピット9は竪穴の北西隅にあり貼床状の部分的なロームのブロックを剥いで検出された大きな掘りこみである。掘り方が整然としておらず内部にも遺物は検出されなかった。ピット10は南壁に近い所にあり長径1.1m（底面での長径1.4m）の袋状を呈する掘りこみである。これも出土遺物はない。2個と



第31図　第20号竪穴住居跡

も各住居にみられる一般的な貯蔵穴と異なる。

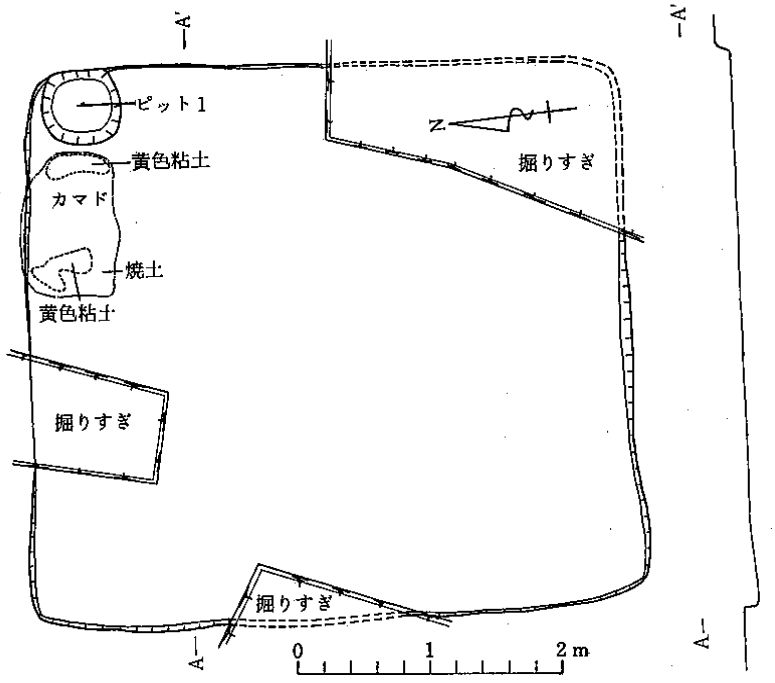
遺物は少なく土師器（坏、甕）と須恵器（坏、甕）がある。

第21号住居跡（第32図）

第17号住居跡の南隣にある。はじめ、住居跡であることに気がつかず、壁と床の部分を掘りすぎた所がある。南北4.6m×東西4.4mのほぼ方形のプランをもつ。掘りすぎのため東南のコーナーは確認できなかった。また、遺構確認面が黒土であることと、長雨後の出水のため、遺構の検出は困難であった。壁の高さは、北壁で約14cm、南壁で約10cmある。床面は黒褐色土で炭化物、ローム粒、焼土を混えたやや堅い面で、比較的保存が良かったが、出水のため柱穴の検出は困難で、1個もみつからなかった。

北壁の東よりにカマドの基部と思われる黄色粘土が、多量の焼土とともに残存していた。この基部は巾110cm、長さ60cmある。焼土付近には甕の破片が多い。カマド内部の焼土をとりのぞくと、径3.8cm、深さ12cmの浅いくぼみ（ピット2）があり、その底面は堅くやけ

ていた。カマドのすぐ右脇、竪穴の北東隅には、貯蔵穴と思われるほりこみ（ピット1）があり、内部から若干の土器片が検出された。埋土、床面からの出土遺物は、土器のみであるが多量にあった。土師器（坏、甕）、須恵器（坏、甕、壺）である。土師器坏には、墨書「大里」もみとめられた。



第32図　第21号竪穴住居跡

出土遺物

大部分は竪穴住居跡から出土したものである。復原、実測などの整理が遅れているため住居跡毎の遺物の組合せを示すことができない。従って、遺物の種類と特徴を概述するにとどめる。

(1) 土師器

坏〔第33・34図〕

すべて平底であり、ロクロによって成形されている。器形は個体によって差があるが、全体としては類似している。外面にはロクロ痕があり、体部下端にはヘラケズリをもつものもある。底部の切り離しは、回転糸切りとヘラキリによるが、前者が多く、後者は少ない。切り離しののち、さらにヘラケズリをうけ、切り離しの方法が不明になったものもある。内面はヘラミガキされ、黒色処理される。内部底面のヘラミガキの方向は個体によって差があるが、放射状のものが圧倒的に多い。また内外面ともにヘラミガキされ、黒色化されているものもある。（第34図39）

底部の切り離し方やヘラミガキの有無など、調整方法にちがいがみられても同一住居の床面で共伴する場合も観察された。

蓋（第34図40）

一点ある。つまみは退化した低い宝珠形である。口縁端部は下方へ短く屈曲する。天井部のつまみの周辺は、回転ヘラケズリされたのちヘラミガキされるが、口縁部はロクロ調整のままである。口縁端部はヘラミガキされている。内面はヘラミガキされ黒色処理されている。口縁部内面にかえりをもたない。天井部に「工」の墨書がある。

甕（第36図1～4）

復原されたものが少ない。胴部がふくらむ小型のものと、長胴形のものとに大別される。口縁部は大きくひらくものが多い。口縁端の断面が丸みをおびるものと、三角形に近いものとがあり、後者の方が数多いようである。数は少ないが内面がヘラミガキされ黒色処理されているものが若干ある。一般に胎土に砂粒を多くふくむのが特徴である。

胴部にふくらみをもつ小型品にはロクロの成形のものと粘土紐まきあげののちロクロ調整されたものとがある。長胴形のものは、一般に粘土紐巻き上げによって成形されたと推定され、内外面に刷毛目をもつものが多い。また、外面に叩き目を残すものや成形後、ロクロ調整やヘラケズリされるものもある。

その他、数は少ないが、壺の破片もみられる。

⑵ 須恵器

坏（第35図1～9）

すべて平底で、ロクロによって成形されたと思われる。体部のたちあがりの状況は、個体によって差がある。下半部はゆるやかに内彎し、口縁がやや外反するものが多い。ロクロからの切り離しは、回転糸切りによるものとヘラキリによるものとがある。前者の方が多い。体部下端や底面をヘラケズリするものは少ない。

壺（第35図10～12）

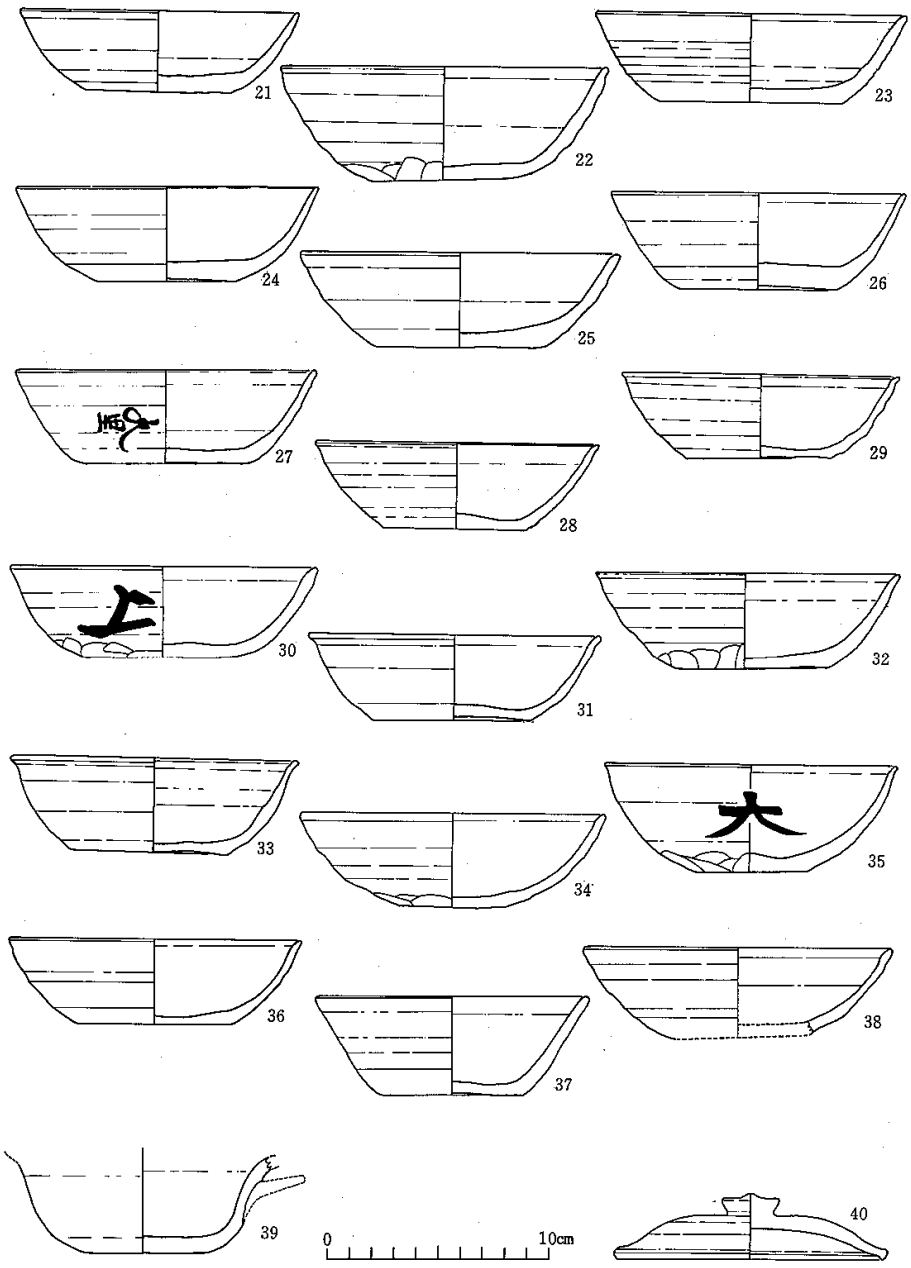
完形品はない。口縁部は外反する口縁端部を折りまげ、断面三角形になる。肩部はまるみをおびる。多くはロクロ調整のままであるが、体部下半に縦位のヘラケズリをもつのもある。底部は高台をもち、ナデ調整のため切り離しは不明である。

甕（第36図5）

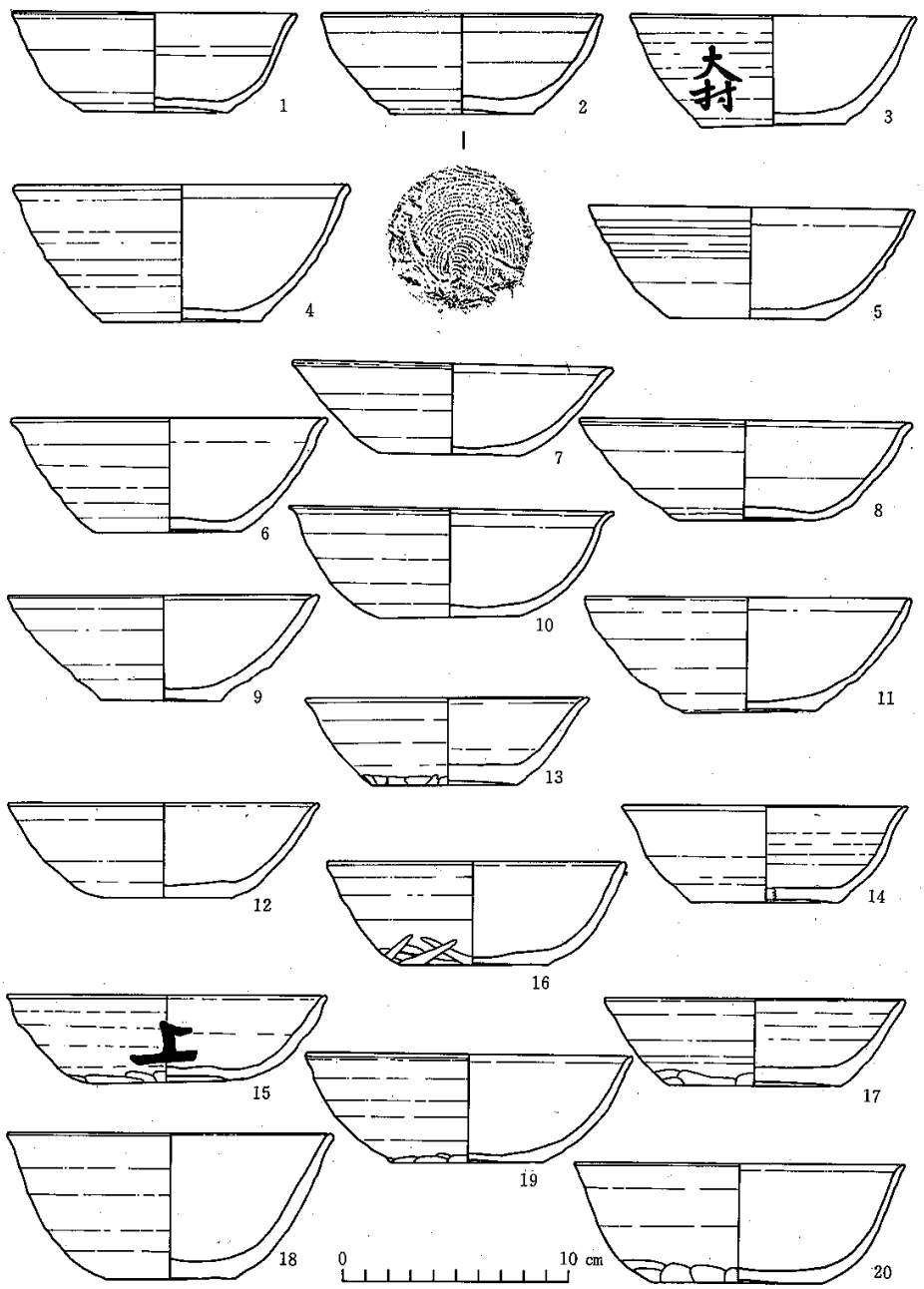
短い口頸部をもち、外反し、口縁端は断面三角形にちかい。肩部はまるみをもち、底部は平底か丸底になると思われる。頸部及び口縁部はロクロ調整されるが、体部外面には平行線状のタタキ目を残すものが多い。体部内面は青海波をもつものは少なく、凹凸がみられる程度である。

⑶ 灰釉陶器

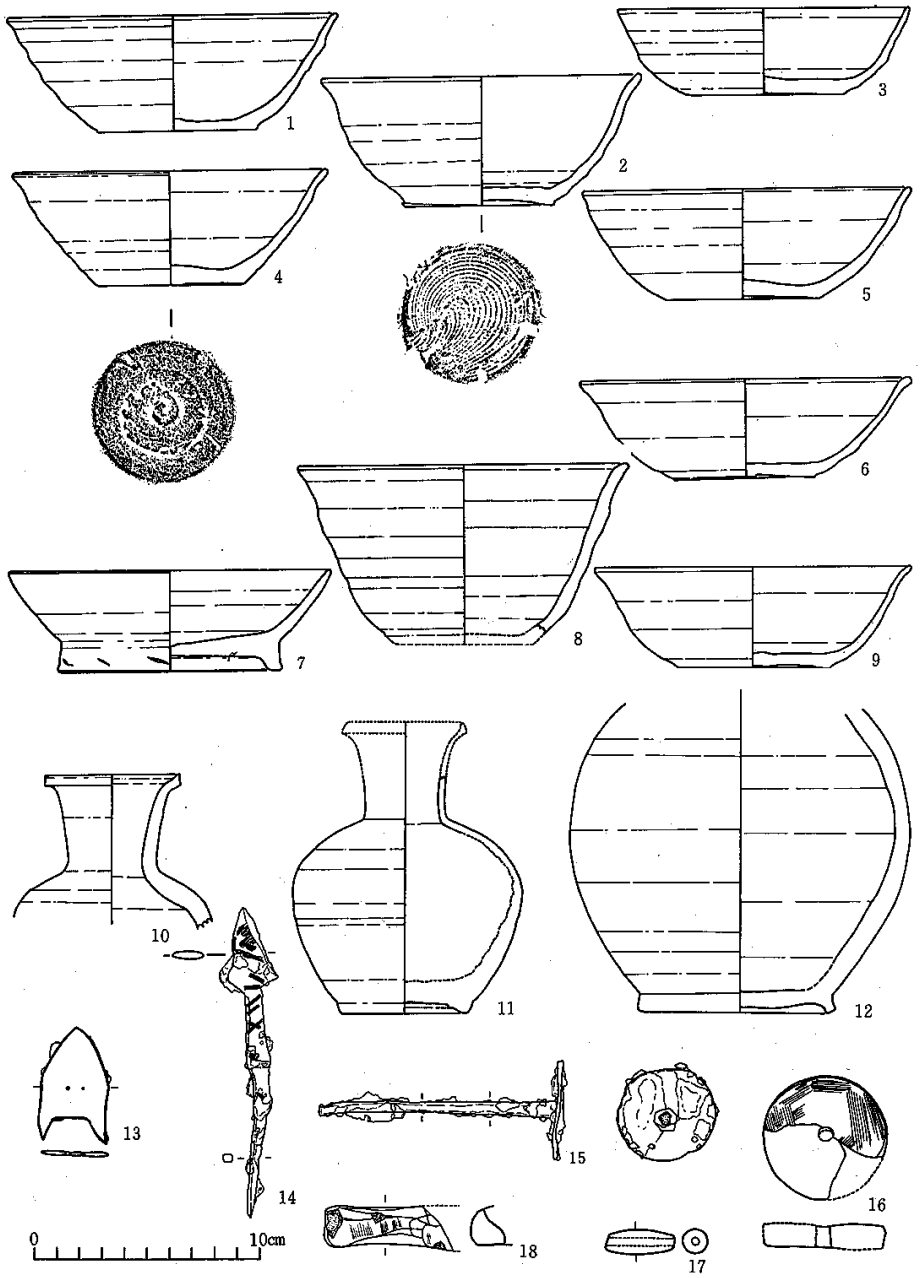
坏の口縁部の破片で、口縁部がやや外反する。内外面にうすい黄緑色をした灰釉がかけ



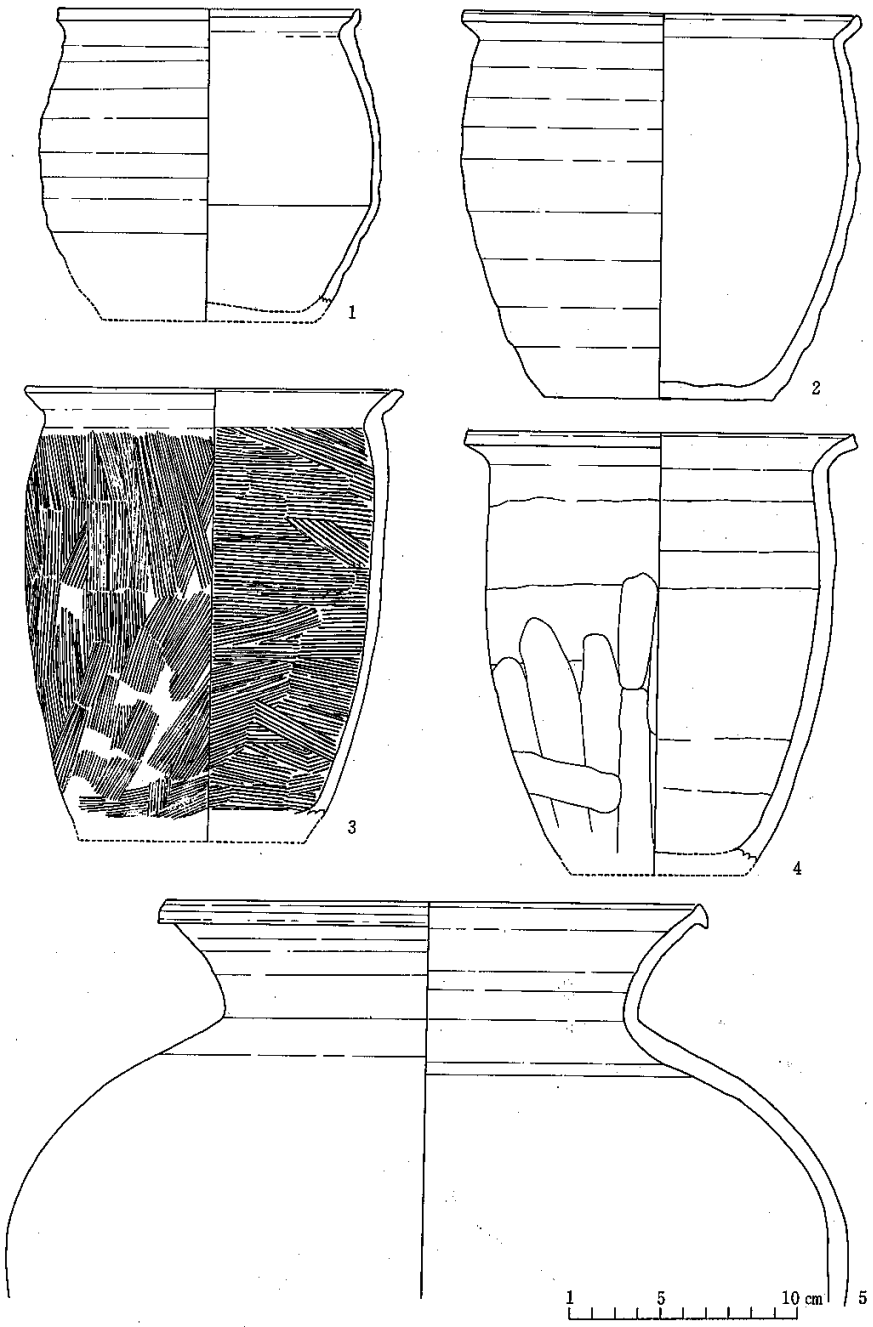
第33図　出土遺物・土師器



第34図　土師器坏（1～39）蓋（40）



第35図　出土遺物・須恵器（1～12）鉄器（13～15）土製紡錘車（16）砥石（15）土錘（17）



第36図　土師器甕（1～4）、須恵器甕（5）

られている。胎土は灰白色で緻密である。第13号住居址の埋め土上部から出土したものである。

⑷ 鉄器（第35図13～15）

形態のわかるものは、鉄鏃2点と紡錘車1点である。

鉄鏃は有茎と無茎のものがある。有茎のものは長い茎をもち、尖端は三角形となり、逆刺はない。茎の断面は4角となる。長さ13.7㎝、巾1.9㎝ある。無茎のものは三角形を呈し、逆刺をもつ。扁平で中央に2個の小孔をもち、これによって矢柄に結びつけられたと思われる。

紡錘車は、直径4.3㎝、厚さ0.1㎝で、非常に薄い円盤である。糸巻棒も鉄製であり、断面は四角形で、現存長10.6㎝ある。

⑸ 土製品（第35図16・17）

紡錘車は径5.4㎝、厚さ1.1㎝の扁平な形態を示す。中央に径0.6㎝の貫通孔がある。焼成よく緻密で堅い。

土錘はやや紡錘形をしたもので、長軸にそって、紐を通すための貫通孔がある。長さ3.0㎝、径1.1㎝の小型品である。漁網用と思われる。

⑹ 木製品

炭化した竪杵が1本出土した。長さ90㎝、径7㎝ある。中央部に段がつき、手で握りやすいように細く（径3.3㎝）なる。ＰＥＧで固めたまま未処置なので、材質など詳しいことは不明である。

⑺ 砥石（第35図18）

青味をおびた泥岩質の砥石で半分欠けている。巾2.0㎝、現存長5.5㎝あり、表面に擦痕が認められる。

ま と め

本遺跡は、白石川によって、形成された河岸段丘上の平坦面に営まれた平安時代の集落跡である。発見された竪穴住居跡の数は合計21軒に達する。しかし道路敷内に限定された調査のため、これらの住居跡群が集落全体の中で、どのような位置を占めていたのかは明らかでない。

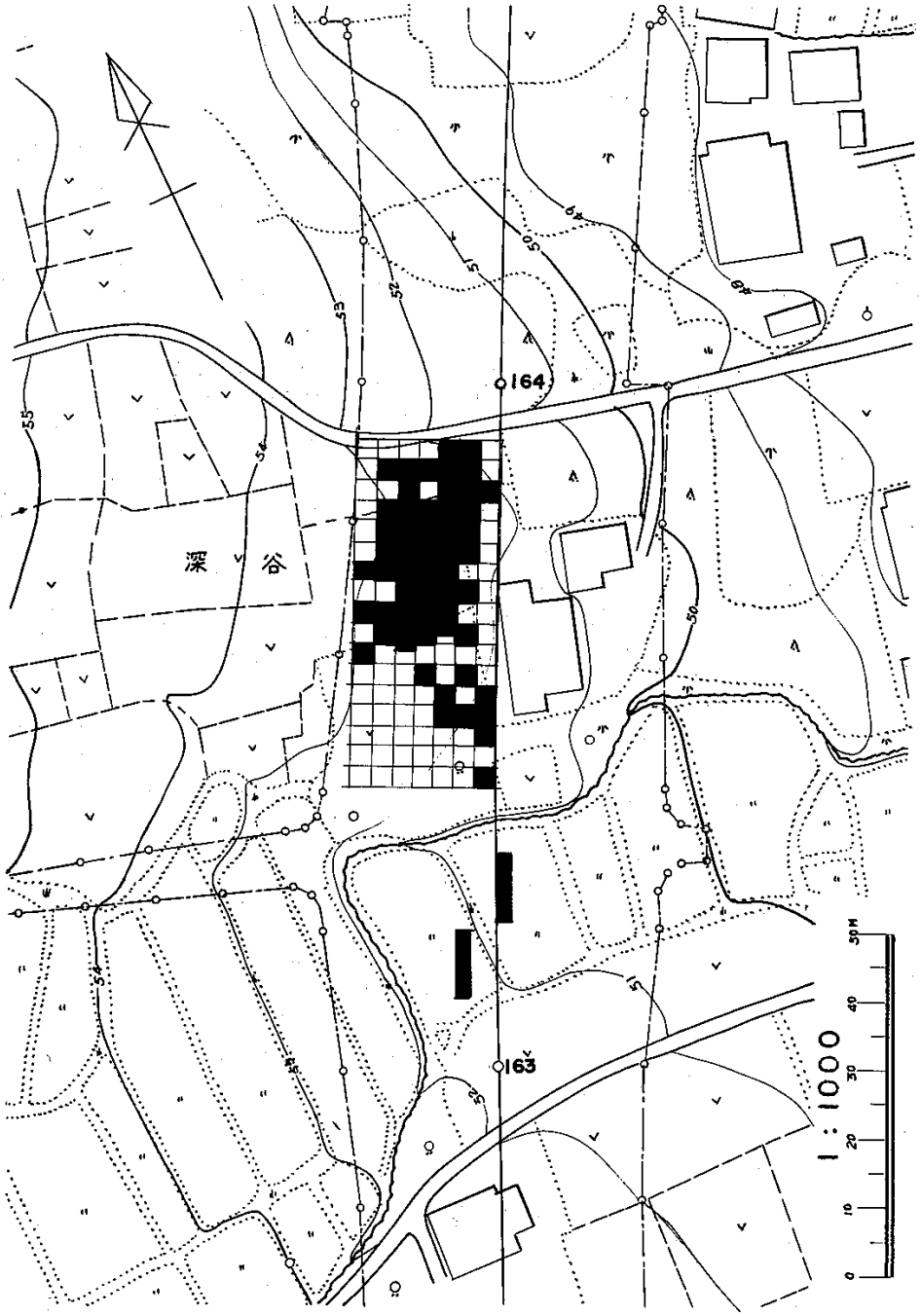
住居跡の構造も不明な点を残しながらもかなり明確になってきた。全体的にみれば平面形は方形を基本として、カマド・貯蔵穴をもつのが一般的な特徴といえる。また柱穴は掘り方と本来の柱穴と区別しにくく、カマドは煙道をもたず東壁にとりつくものが多い。しかし、個々の住居跡を比較すれば、規模の大小・柱穴・カマド・貯蔵穴の有無や状態のちがいなどに、相違点がみられる。とくにカマド・柱穴を一切もたない第16号住居跡、長方形プランを

もつ第13号住居跡が集落の中でどのような役割を果したのか興味がもたれる。また昨年度調査した蔵王町二屋敷遺跡・東山遺跡・赤鬼上遺跡などともカマドの構造で著しい差があり、せまい範囲内での地域差や時期差を問題にする必要がある。また切り合い関係にある住居跡を除けば、新旧関係や同一存在を証明することは困難である。

出土遺物の大部分は土器である。住居跡内での基本的な器形の組合せは甕と坏であり、それに壺と大甕が若干加わる。前者には土師器が多く、後者は須恵器が殆んどである。従って土器全体からみれば大部分が土師器であり、須恵器は少ない。これらは集落における一般的な土器のあり方と考えてよい。製作技法に関しても詳細な観察がいきとどいていないが、同一住居跡の床面で、ヘラキリによる須恵器坏と糸切りによる内黒土師器坏と切りはなし不明（底面の完全なケズリのため）の内黒土師器坏の3者が共伴した例もあるので、消費の場（集落）では、細かな技法の差をただちに年代差として把えることができないと思われる。このように住居跡毎に製作技法にちがいをみられる土器の組合せを明らかにすることは、生産の場と消費の場との関係を考察する上で重要であろう。

（藤沼邦彦）

(四) 御所内遺跡



第37図　地形図・グリット配置図

御 所 内 遺 跡

1 遺跡所在地

宮城県白石市福岡深谷字御所内

2 調査期日

昭和46年4月20日～5月22日

3 調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

4 調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

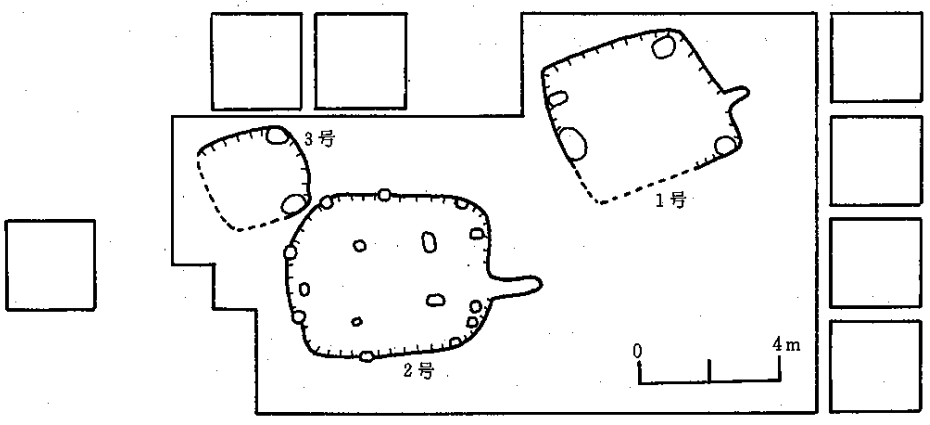
調査係長　志間泰治
技術主査　氏家和典
技　　師　藤沼邦彦　白鳥良一
嘱　　託　小井川和夫　丹羽茂
補 助 員　七戸貞子

5 調査の概要

(1) 遺跡の立地（第37図）

深谷台地の南部、白石川へ向いゆるやかに傾斜した台地の凸端部、標高約50m前後のところに存在する。南北を小さな沢で区画されており、あまり大きな遺跡とは思われないが、西側の台地上へ、さらに広がっている可能性が強い。立地および距離的には南の青木遺跡、北の松田遺跡とともに、大きな遺跡群の一部と考えられる。現状は畑地である。

(2) 調査経過（第38図）

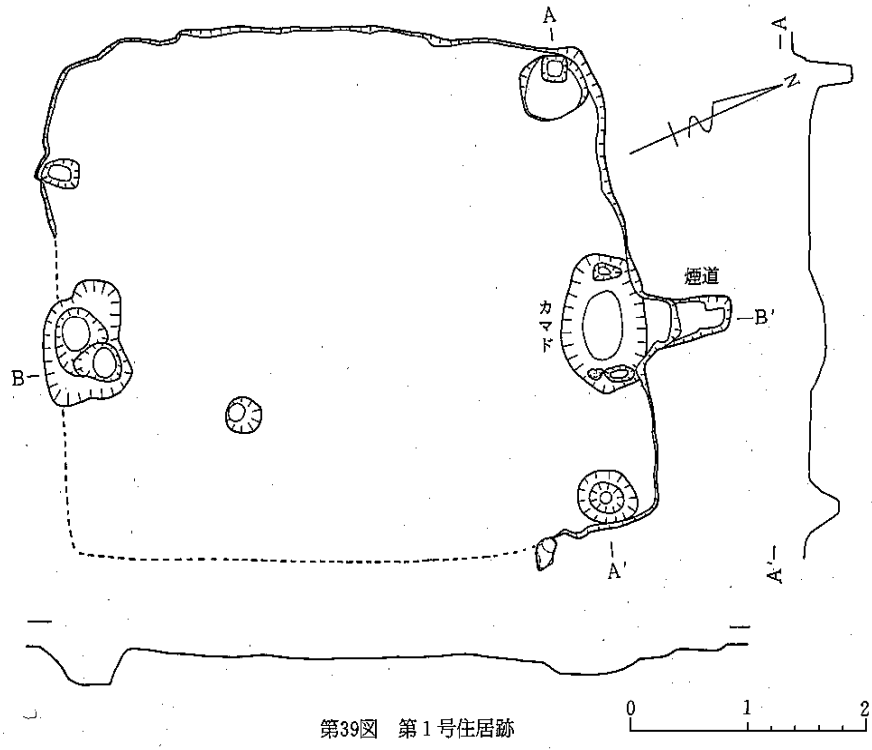


第38図　遺構配置図

道路敷にかかる部分は遺跡の東端部である。東側は宅地により破壊され、北は杉林のため調査不可能であったが、南側水田部分も含めて約520㎡を調査した結果、地表下20～30㎝に平安時代の竪穴住居跡三軒、それに伴う遺物、また水田下約1mより若干の遺物の出土をみた。住居跡は斜面につくられていたため、東側が削られてその輪郭を明確にし得ないものもある。層位は表土下すぐローム層であるが、住居跡内には焼土まじりの暗褐色土が堆積していた。住居跡は検出順に各々1号、2号、3号住居跡とした。また水田中に設定したトレンチは南からA、Bトレンチとした。

(3) 発見遺構遺物

第1号住居跡（第39図）

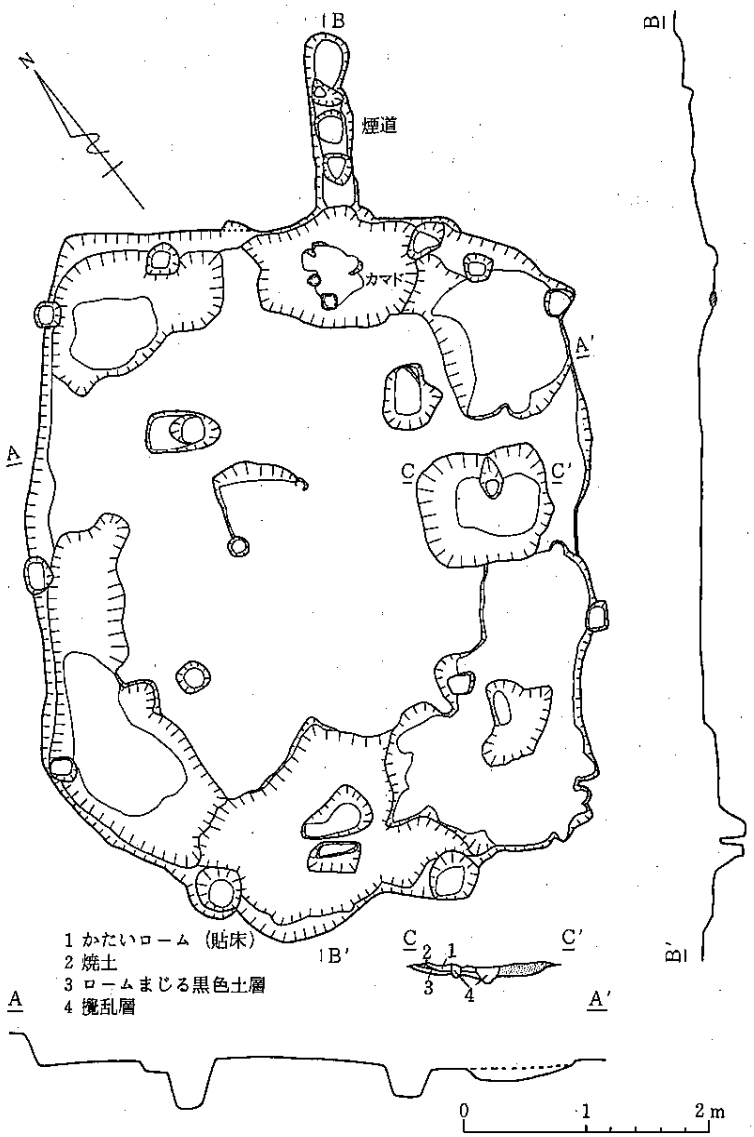


第39図　第１号住居跡

南北約3.7m、東西約4.4mのややゆがんだ隅丸方形のプランを有すると思われる住居跡である。ローム層まで掘り込まれた住居跡で検出は容易であったが傾斜地につくられ、また覆土が薄かったため、壁は西側に約10㎝ほど残っていただけで、東側はすでに削られてしまっている。床面は非常に固いがやはり東側は削られている。周溝はない。ピットは北西隅、南壁中央部、南東部に発見されており、南壁中央部のピットには切り合い関係があるが、これらは一応柱穴と考えられる。北壁中央部にカマドがつくられているが、削平に

よりほとんど原形をとどめていない。焼土を除くと、床面から約10cmほど掘りくぼめられた焚口部分があり、浮いた状態で焼けた川原石が残っていた。焚口部分はゆるくたちあがり約70cm残った煙道に続く。また北東隅にピットが検出され、なかから土師坏など若干の遺物が出土し、貯蔵穴とも考えられたが、それは形状および北西隅のピットと対応する位置であり、柱穴の可能性もある。遺物はカマド部分、北東隅から若干出土しただけで少ない。

第2号住居跡（第40図）

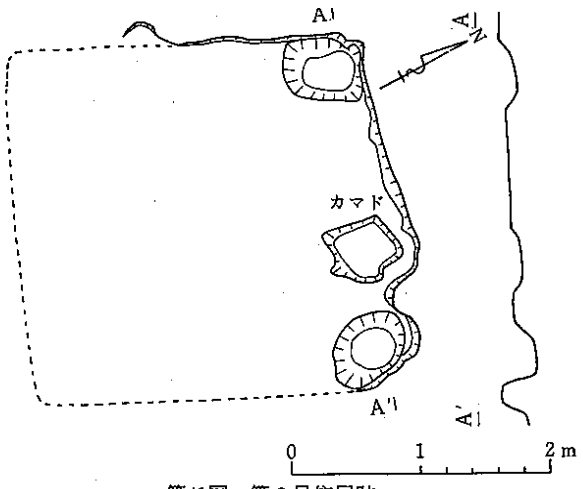


第40図　第２号住居跡

第1号住居跡同様ローム層まで掘りこんでつくられた住居跡である。低位につくられているためか比較的保存のよい住居跡で遺物も多い。東西約4.5m、南北約5.5mの隅丸長方形のプランを有し、現存する壁高は西壁で約20cm、南北部は削られているが東壁ではわずかに残存していた。南壁は木根によると思われる撹乱のため多少の乱れがある。床面は中央部で非常にかたく、埋土との区別は容易であったが周縁部は木根によりかなり広い範囲で撹乱をうけている。周溝の存否は撹乱によって不明であるが、一部残っている床面には検出されず、存在しなかったものと思われる。柱穴は中央部に径20cm前後、床面からの深さ20～40cmほどのものが1.8×2.4mの方形に4個発見された（但し南西ピットは撹乱部分にあたり詳細は不明である）。さらに壁沿いに西壁3、南壁2、東壁2、北壁3の計10個が発見された。深さは前者に比してやや浅く、なかには壁に対して斜めに掘りこまれているものもある。この柱穴はほぼ対応する位置に発見されているが、撹乱をうけた西壁南部には検出されていない。なお、南壁内側に発見された2個のピットについての性格は不明である。また住居跡中央部にややくぼんで床面まで焼けた焼土があり、周囲に2個、石の抜き取り穴と思われる小さなくぼみがあり、炉跡の可能性がある。カマドは北壁中央部に構築され、1.4mの煙道が伴う。床面から7～8cmほど掘りくぼめられた焚口底部には焼けた川原石、および抜き取り穴と思われるくぼみがみられ、石組のカマドが考えられる。焼土は焚口部分に約8cmの厚さで堆積していた。さらに東壁中央部にも多量のかたくしまった焼土の堆積があり、下部より90×100cm、深さ17.8cmほどのくぼみが検出された。また浮いた状態ではあるが焼石があり、カマドの可能性がある。両者の時代関係については、東壁のカマドのくぼみの一部に住居跡の床面と連なるかたいロームが貼ったような状態で検出され、東壁のカマドは北壁のカマドより古いと思われる。しかしこの貼り床状ロームは焼土全面を覆ってはおらず、なお疑問が残る。

第3号住居跡（第41図）

第2号住居跡に近接して発見された住居跡で、木根による撹乱が激しくほとんど輪郭は確認できなかった。北壁と西壁の一部が2～5cmの高さで残存しており、それによって一辺2.5mほどの方形プランが推定される。床面は非常にかたく検出は容易であったが東側においては削平をうけている。北壁中

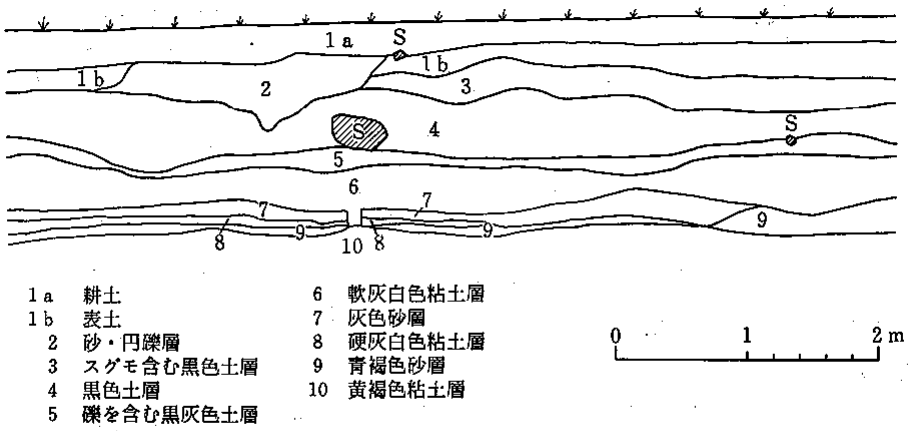


第41図　第３号住居跡

央部に深さ8㎝、径50㎝ほどの浅いくぼみがあり厚さ5㎝ほどの焼土がみられた。カマドと考えられる。煙道は検出されなかった。北壁の東西にピットが発見されたが性格は不明である。北東ピットは深さ20㎝ほどあり、上部から破片であるが坏の出土がみられた。なお第3号住居跡は第2号住居跡とは約15㎝しか離れておらず、上部においては切り合い関係があったことは明らかであるが、先後関係は不明である。

A、Bトレンチ（第42図）

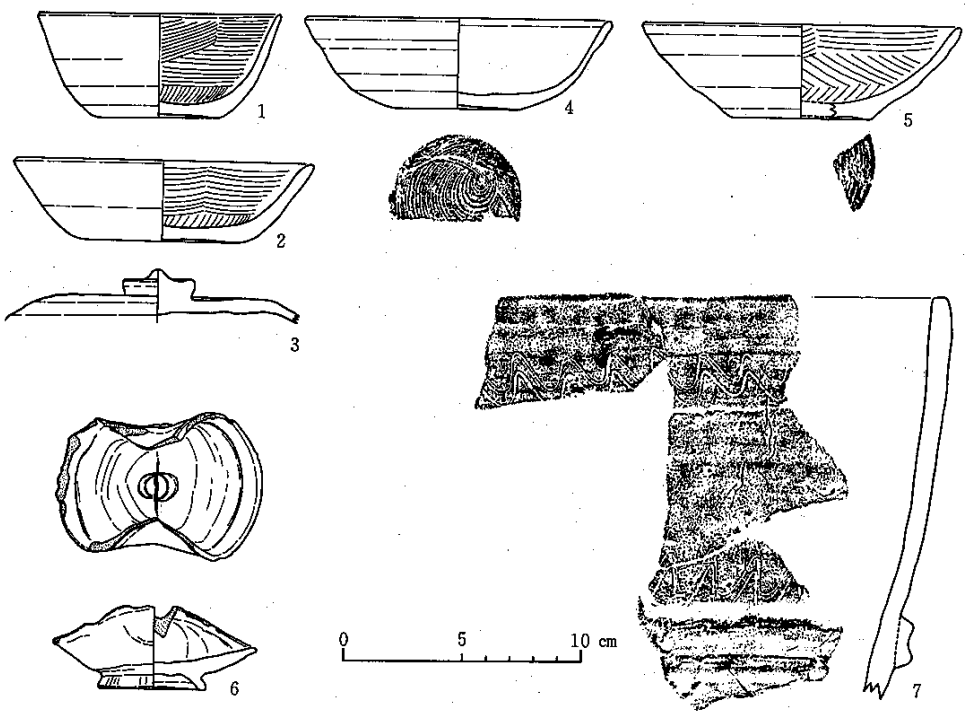
現在水田として利用されているところが遺跡の南側部分にあたるため、旧地形を把握する意図をもって、2×10mのトレンチを2本設定し、南側からA、Bトレンチとした。水田下のため湧水が激しく調査は困難をきわめた。さらにAトレンチでは表土下1mほどのところに大きな川原石が多数発見されたので、以下の掘り下げを断念し、Bトレンチにおいて層位の観察を行った。その結果、地表下約1m第4層下面に遺物包含層がみられた。第2、第3層からも遺物は出土したが、層自体が再堆積であった。また第4層以下には、粘土と砂の互層が続き、かつては浅い谷間であったことが推定される。



第42図　Bトレンチ西壁断面図

(4)　出土遺物（第43図1～7）

全体的に遺物は少い。ほとんどが土師器、須恵器である。が、まだ整理が完了しておらず、主に土師器坏についてその概略を述べる。第1号、第2号住居跡より出土した復元可能の坏は、わづか2点しかないが、内面を黒色化し、底面および胴下部を回転ヘラケズリによって再調整を施すという特徴がある（1、2）。これに対し第3号住居跡出土の土師器は底面に糸切り手法を残している（5）。なお、図4は内面もロクロ調整、糸切手法のものである。色調は赤褐色を呈し、土師器、須恵器の区別はつけにくい。その他に、第2号住居跡表土より須恵蓋（3）、第3号住居跡表土より耳皿（6）が出土している。耳皿は赤褐



第43図　出土遺物

色を呈しているが、内・外的にヘラミガキを施し、又外面に黒色部分もある。Bトレンチの遺物も第1号、第2号住居跡のものと同じ特徴を持つ。また「大里」の墨書のある須恵坏底部破片、外に凸帯を巡らした円筒状を呈する土器の破片（7）が出土している。

6 まとめ

(1) 御所内遺跡は平安時代の集落跡であり、今回の調査では住居跡三軒が発見されたが、これらは全て同時期のものではないと考えられる。

(2) 一軒のみではあるが、住居跡の柱穴の配置が明らかになったことは構造を考えるにあたって良い資料となり得る。（小井川和夫）

参考文献

氏家和典（1968）：「御所内遺跡」『宮城県文化財調査報告書17集』

（五）松田（まつだ）遺跡

第44図　地形図・グリット配置図

松　田　遺　跡

1　遺跡所在地

宮城県白石市福岡深谷字松田

2　調査期日

昭和46年4月25日～6月6日、7月7日～7月24日

3　調査主体者

宮城県教育委員会、日本道路公団

4　調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

技術主査　氏家和典

嘱託　小井川和夫、丹羽茂

5　調査の概要

(1)、遺跡の立地（第44図）

白石市の北方には、白石川に沿って、海抜約40mの低地（沖積低地）が広がり、その西方に、深谷地区を中心として海抜高度50～60m程度の一段高い台地（洪積台地）がある。さらにその後方には一連の丘陵が続いている。

松田遺跡はこの深谷台地東縁部付近に位置している。遺跡の海抜高度は約50mである。なお、この台地上には御所内、青木等の遺跡も存在する。

(2)　調査の経過

松田遺跡は昭和43年の試掘調査で土師器片が1点出土したのみであったが、トレンチ1本(1×10m）という狭い範囲の調査であったため、松田遺跡全体を理解する上で十分でなかった。しかも表面採取では広汎な土師器や須恵器片の散布が認められたため、松田遺跡については遺物の散布する範囲を全面調査することにした。

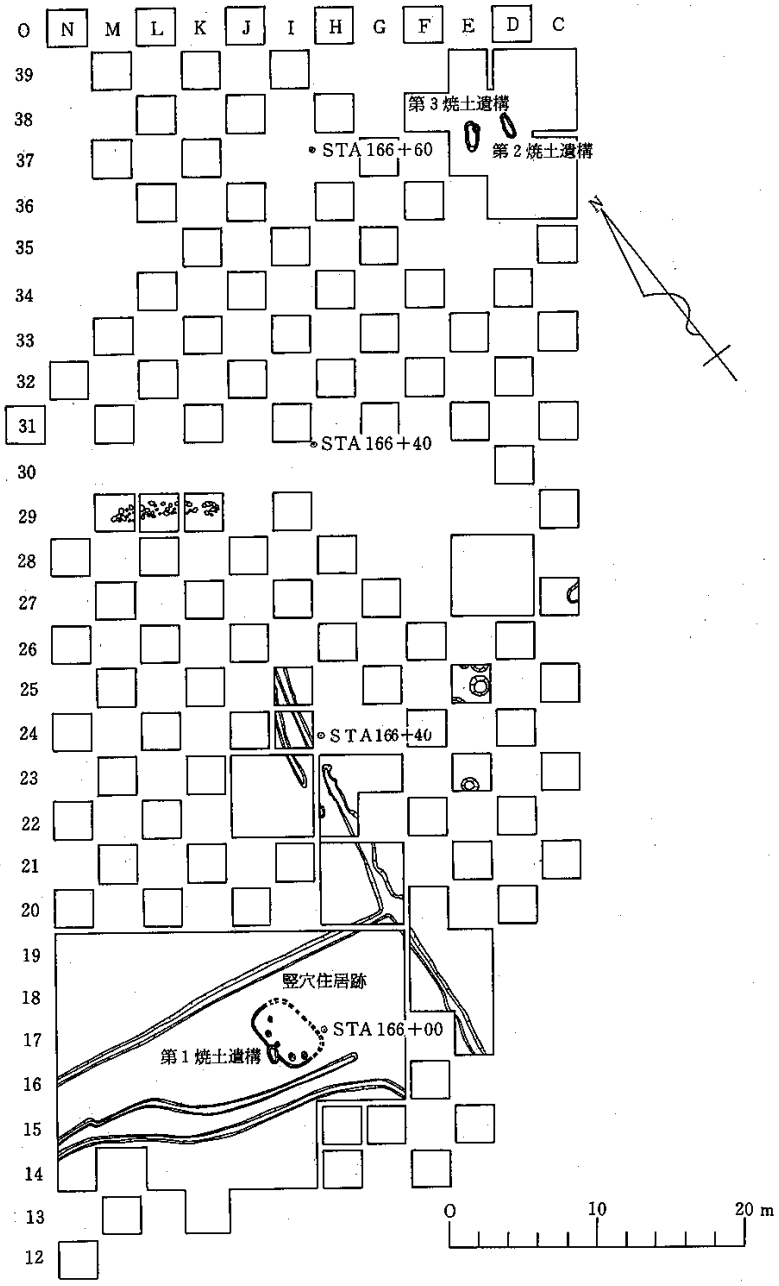
基本的には3mグリッドによる調査を実施したが北側の一部はトレンチ調査を行なった。発掘面積は約7600㎡である。その結果、縄文時代早期の竪穴住居跡1軒、平安時代の焼土遺構3ヶ所を発見した。その他、数本の溝状の遺構も発見されたが、内部の埋土の状況からごく最近のものと判断された（第45図）

(3)　遺構とその出土遺物

Ⅰ、縄文時代の遺構――竪穴住居跡――

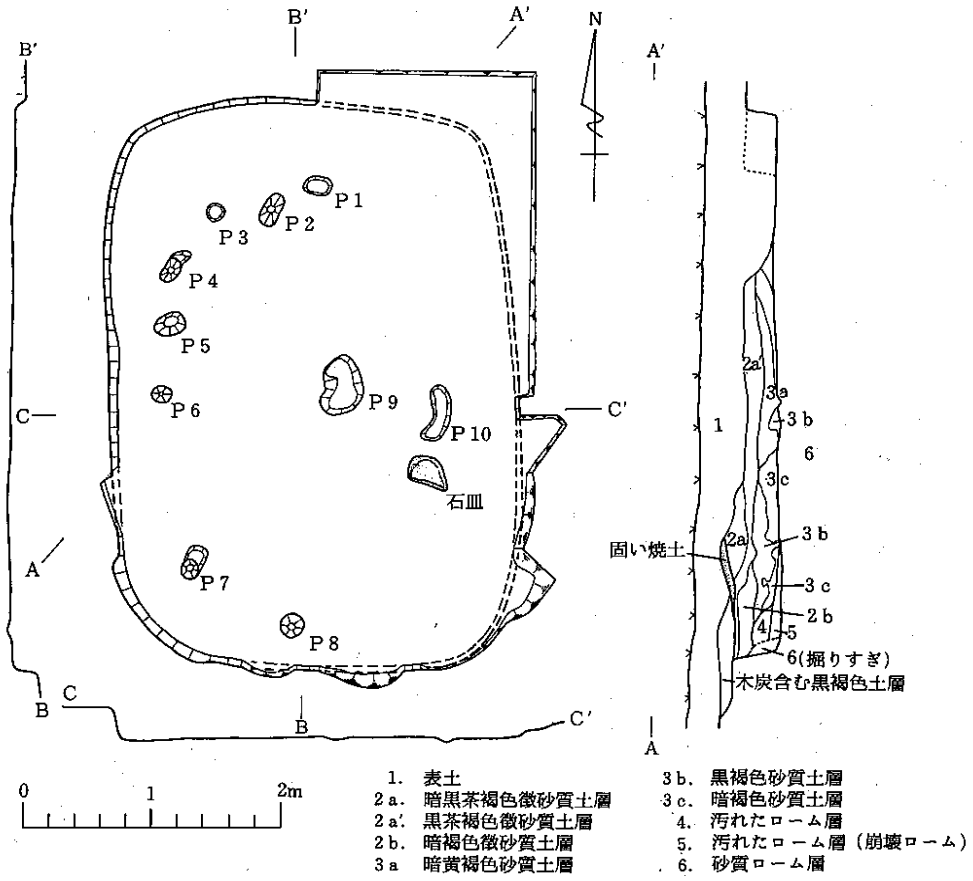
竪穴住居跡（第46図）

表土（1層）を20～30㎝程掘り下げると、部分的に攪乱された汚れたローム層に達する。


O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
第3焼土遺構
第2焼土遺構
STA 166＋60
STA 166＋40
STA 166＋40
竪穴住居跡
STA 166＋00
第1焼土遺構
N
0
10
20 m

第45図　遺構配置図

この汚れたローム層の上面にⅠ－17区を中心として楕円形を呈する黒褐色の落ち込みが検出された。この黒褐色土およびその下層の堆積土を徐々に掘り下げていくと、非常に固い砂質の黄褐色土（砂質ローム）層につきあたる。これが竪穴住居跡の床面と考えられた。床面までの堆積土のあり方は第46図のようになる。



第46図　竪穴住居跡

第　1　表

Pit NO	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
長　径	22.0	28.0	14.0	30.0 (20.0)	24.0	16.0	28.0 (16.0)	20.0	20.0	46.0
短　径	16.0	14.0	14.0	12.0	18.0	14.0	14.0	18.0	18.0	14.0
床面からの深さ	2.7	18.5	2.8	2.5 (20.0)	13.4	29.0	12.7	16.5	3.4	3.0

2層と3層の基本的な相違は、前者が粒径の小さい微砂質土であるのに対し、後者が相対的に粒径の大きい砂質土である点にある。

遺構が確認されたのは部分的に撹乱された汚れたローム層であるため、竪穴住居跡の壁面および床面を全面にわたって検出することはできなかった。しかし、西側の大部分、さらに東側の一部を確認しえたので、その概略を知ることができる。

長軸4.75m、短軸3.20mの大きさで、角がゆるやかにカーブする隅丸長方形のプランをもち長軸は南北方向にほぼ一致する。

床面は北側が黄褐色のロームで、南側になるにしたがって砂粒が多くなり、砂質となる。

壁は保存のよい北西部から南西部で13～40㎝の高さがあり、床面からゆるやかに立ちあがり、次第に垂直に近い状態になっている。

床面には幾つかのピットがある（第1表）。ピットには大まかにみて二つの種類がある。一つは深さ2～3㎝程度で統一性がないもの（P_1、P_3、P_9、P_{10}）である。もう一つは深さが12.7～29㎝（20㎝内外が多い）で、長径が10～30㎝程度にまとまるもの（P_2、P_4、P_5、P_6、P_7、P_8）である。後者は壁面にそってほぼ平行な状態でならんでおり、柱穴としての可能性が強い。炉跡などの施設と考えられるものは発見できなかった。その他、住居跡床面から石皿が1点発見された。床面上にあることから、住居が使用されていた時期のものと考えられる。

出土遺物（第47～49図）

この竪穴住居跡からは床面に石皿が1点、さらに竪穴内の堆積土から土器片39点、石鏃1点、掻器4点、剥片および砕片（チップ）88点、合計133点の遺物が発見された。これを第2層出土のもの、第3層出土のもの、床面上出土のものにわけて記述したい。ただ、その前に土器については分類の基準について説明する。

土器分類の基準

出土土器に関して次のような観察を行なった。その結果を簡単に説明しておきたい。ただし、土器片の数が直接個体数に結びつくものではない。

A：胎土、胎土は繊維を含むものとそうでないものの二種に大別される他、ほとんどのものは器面調整粘土が認められる。

(1)砂粒を含む粘土質のもの。

(2)細砂を含む微砂質で繊維を少量含むもの。

(3)細砂を含む微砂質で繊維を多量含むもの。

(4)砂粒を含む微砂質で繊維を少量含むもの。

(5)砂粒を含む微砂質で繊維を多量含むもの。

Ｂ：器形、全体的な器形が判明する資料はないが、底部片から、尖底土器と考えられる。

Ｃ：色調、器外表面の色調には次のようなものがある。(1)黒褐色、(2)黒茶褐色、(3)黄茶褐色、(4)黄褐色、(5)赤褐色、(6)橙色。この中には色調がくすんだものや赤みのあるもの等がある。

Ｄ：器内面再調整、ヘラ状工具による縦方向と横方向のミガキがある他、指頭状の押圧によるものもある。

Ｅ：施文技法、技法には大別して三種ある。

(1)縄文原体の回転

ａ：Ｒ 原体横回転、ａ’：Ｒ 原体縦回転、ｂ：Ｌ 原体横回転、ｂ’：Ｌ 原体縦回転、ｂ”：Ｌ 原体斜回転

(2)横位沈線

(3)山形押型横位回転

Ｆ：施文工程、器外面における施文工程にはＥで述べた技法の組合わせによって次のようなものがある。

(1)縄文のあるもの

ａ：縄文原体回転のみのもの。ｂ：縄文原体回転後横位沈線を加えるもの。

(2)山形押型文のあるもの

ａ：山形押型横位回転のみのもの。

ｂ：山形押型横位回転後横位沈線を加えるもの。

(3)無文のもの

以上、略記した観察事項に従って分類したい。その場合、もっともよく土器の特徴があらわれるのはＦ（施文工程）であるからＦを第一の基準とし、その他の観察事項はそれを補足するものとする。したがって、ここでは器外面における文様施文工程のちがいに基づいて、それぞれの土器を、第1類（1a類、1b類）、第2類（2a類、2b類）、第3類として分類する。

第2層の遺物

土器片7点、石鏃1点

土器：第1a類2点（第47図①－ａ技法、他の一点はａ’＋ｂ’技法）、第1b類3点（第47図②③④－ａ技法）、第2b類2点（第47図⑤⑥）である。これらの土器片はすべて胴部破片である。第1a類2点のうち1点は他の第1b類、第2類と同様に胎土に繊維を含み、器内面に縦方向のミガキがあること、さらにこれが小破片であることなどから第1b類の一部分である可能性が強い。ところが、第48図1の土器片は胎土が粘土質で、

繊維も含まない。さらに器内面再調整においても横方向のミガキが認められるなど種々の点で異なる。従って、便宜的ではあるがこの土器片を第1a’類として区別しておきたい。

石器（第48図9）：石鏃が1点ある。一次的に剥離された剥片に、交互に荒い剥離を加えたもので、裏面にはかなり一次的な剥離面が残っているが、形態的には多少歪んだ五角形を呈している。材質は頁岩である。

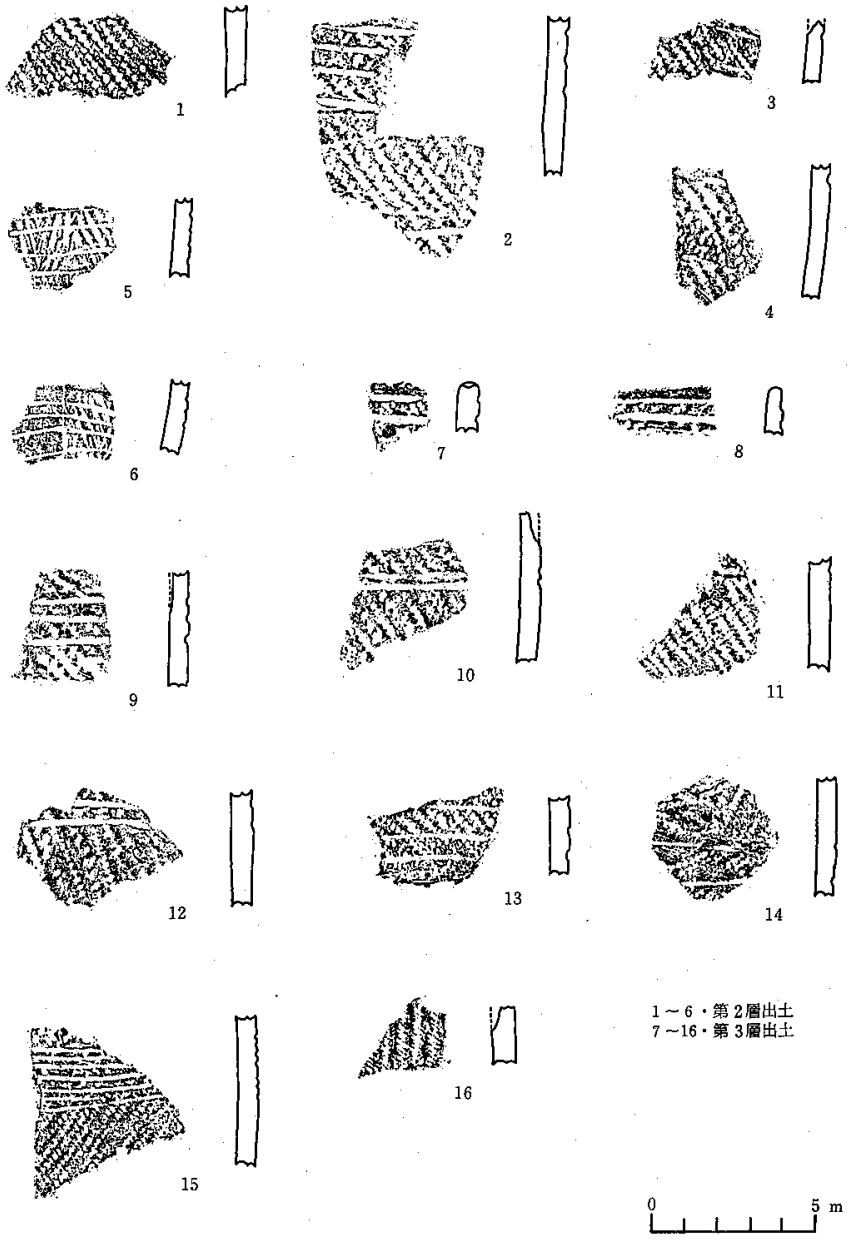
第3層の遺物

土器片32点、掻器4点

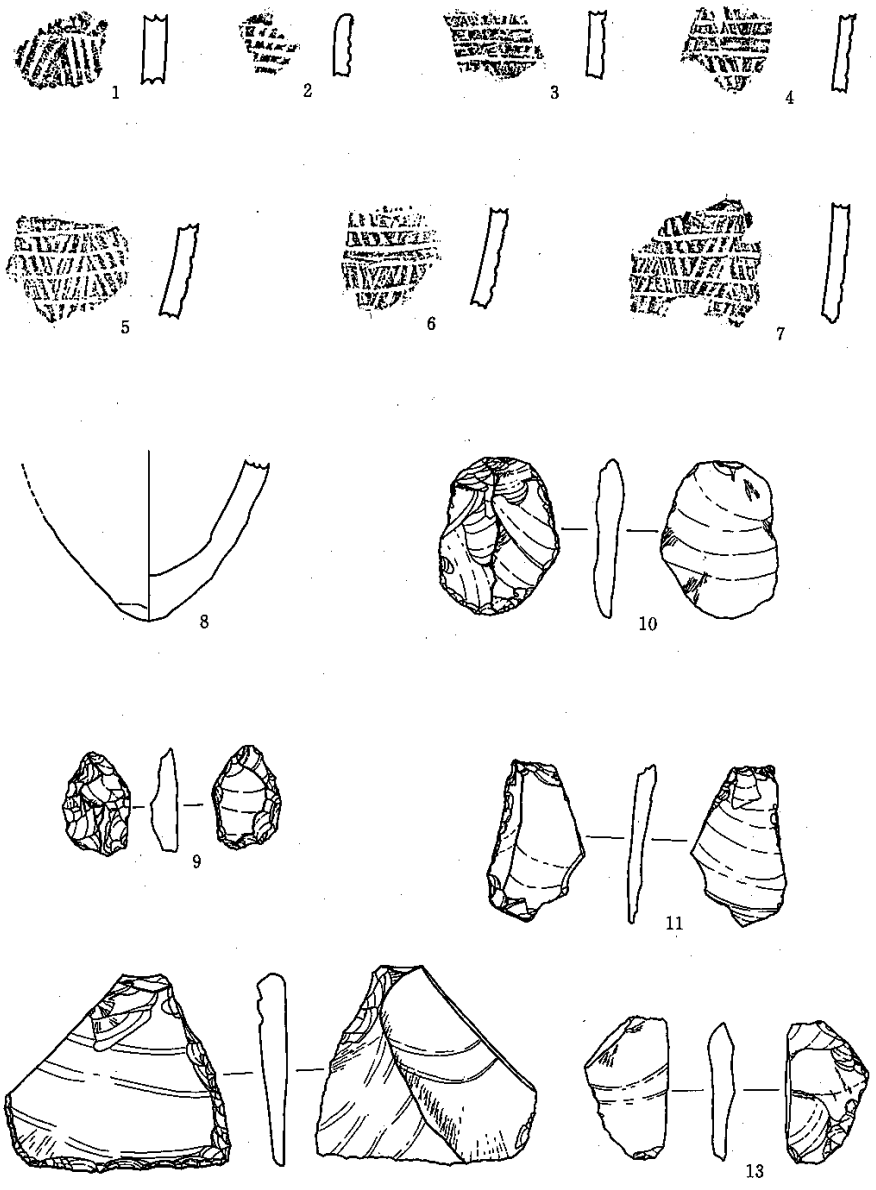
土器片：土器片32点のうち口縁部が4点、底部が1点で、他の27点は胴部である。胎土はすべて微砂質土であり、量的な差はあるが繊維を含む。器内外面には原則として調整粘土が認められる。つぎに器外面における施文工程を観察すると、第1a類4点、第1b類9点、第2a類1点、第2b類12点、第3類1点となる。第1a類の4点はいずれも細片であり、第1b類の一部分である可能性が強い。第1b類は施文技法を縄文原体とその回転方向という点から吟味するとつぎのようになる。ａ技法：6点（第47図9～13）、ｂ技法：2点（第47図15）、ｂ＋ｂ”技法：1点（第47図14）、第1b類の口縁部は2点ある。口唇部に右上方から押圧が加えられ、小波状を呈するもの（第47図7）と平坦なもの（第47図8）である。前者の器内面再調整としては横方向のヘラミガキか認められるが、後者の場合は口唇部のみ横方向で、それ以外は縦方向である。他の第1b類土器胴部破片はすべて縦方向のヘラミガキが認められる。第2a類は1点（第48図1）のみである。第2b類は12点（第48図2～7）ある。このうち口縁部破片は2点である。両者とも調整粘土の折返し口縁であり、さらに口唇部は右上方より押圧が加えられ小波状をなしている。器内面のヘラミガキは口唇部付近のみ横方向であるが、他は縦方向である。胴部破片はすべて縦方向である。第3類は底部1点のみ（第48図8）である。胎土は繊維を含む微砂質土で、器内外面とも指頭状の押圧がみられる。

石器：おや指状および不定形の掻器が4点ある。材質はすべて頁岩である。12はかなり大形で厚手の剥片の周縁に背面から急角度で連続的な剥離が加えられ、刃部をつくっている。基部は主要剥離面と背面から対称的に剥離が行なわれ調整されている。10は薄手の剥片の周縁に背面から細かな剥離が連続的に加えられ、刃部がつくられている。おや指状の形態となる。13は薄手で縦長剥片の一側面に、剥離が行なわれ、刃部がつくられている。11は薄手の不定形な剥片に対し、背面から細かな剥離が連続的に加えられ、刃部をつくっている。

床面上より発見された遺物（第49図）

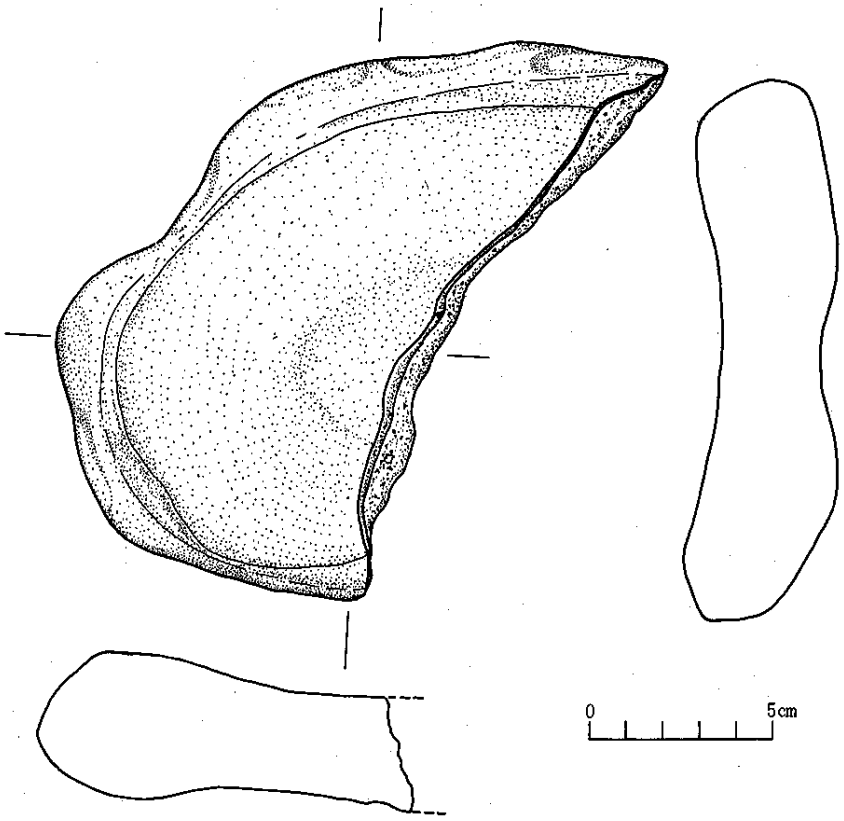


第47図　竪穴住居跡出土遺物



1～8．第3層出土土器
9．第2層出土石器
10～13．第3層出土石器

第48図　竪穴住居跡出土遺物



第49図　竪穴住居跡出土石皿

石皿が1点ある。材質は砂岩である。全体の3分の1が欠けている。現存の大きさは32.3×30.8㎝で厚さは最厚部で7.9㎝である。形態的には楕円形に近い。側面および下面はすべて自然面である。上面は最深部で1.6㎝程皿状に凹んでいる。また、凹部に沿った縁辺も摩滅を受け平らな面となっている。

竪穴住居跡その出土遺物の年代

年代決定の方法と資料

住居跡の廃絶される前の土器を原位置のまま発見することはできなかった。今回、住居跡内から発見された土器は住居の廃絶後に廃棄されたものである。ただ、第3層出土土器の中には床面に非常に近い部分から発見されたものも少なくないため、住居年代と土器の廃棄の年代がそれ程へだたるものとは考えられない。

竪穴住居跡から発見された土器は、第1b類と第2b類によって大部分が占められる。この他に第2層から出土した第1a’類、第3層から出土した第2a類、第3類が各々1点ずつある。

この中で第1a’類は胎土、器内面再調整、焼成等の点で他の土器群とは著しく異なり、出土層位も第2層で1点のみであることから、部分的な深耕によって入り込んだ可能性も否定できない。従ってこの土器を年代決定の資料から除外する。他の第2a類、第3類の土器に関しては問題がない。両者とも胎土は他のものと共通し、前者にあっては器内面の再調整器外面の施文技法（山形押型文）等において共通する。

このように見てくると第2層出土の土器と第3層出土の土器とでは何ら差は認められない。

出土土器の編年的位置と竪穴住居跡の年代

以上のような特徴を示す土器群の中で、第2b類（第2a類も包括される）とした山形押型を回転施文する押型文土器は青森県日計遺跡（笹津：1961）において注意され、各地の資料と比較することによって早期末葉に位置づけられていた。しかし、日計遺跡においては層位的な証明は何らなされていなかった。その後、岩手県蛇王洞遺跡の調査（芹沢・林：1965）によって同様な押型文土器が沈線文土器（関東地方の三戸式土器に先行）の下層から「縄文の施された土器」、「薄手無文土器」を伴って発見された。このような調査結果から、報告者はこの押型文土器の時期を「関東地方の花輪台式から平板式くらいの時期にあたるもの」と考えた。このように東北地方における山形押型文土器の時期を縄文時代早期前葉に位置づけるという見解は、さらにその後の岩手県大新遺跡の調査結果（武田・吉田：1970）、秋田県岩井堂岩陰第4洞穴第七次調査結果（山下：1971）からもほぼ支持されるものとなった。

このようなことから、松田遺跡の竪穴住居跡内より発見された第2a・b類は早期前葉に位置づけられるものであろう。同時に、松田遺跡において共伴した第1b類土器、第3類土器も同年代に比定してよいと思われる。

従って上記の土器と伴出した石器も早期前葉のものと考えられる。さらに、竪穴住居跡および床面上の石皿の年代もほぼ同じか、それよりも僅かに古い時期に位置づけられる。

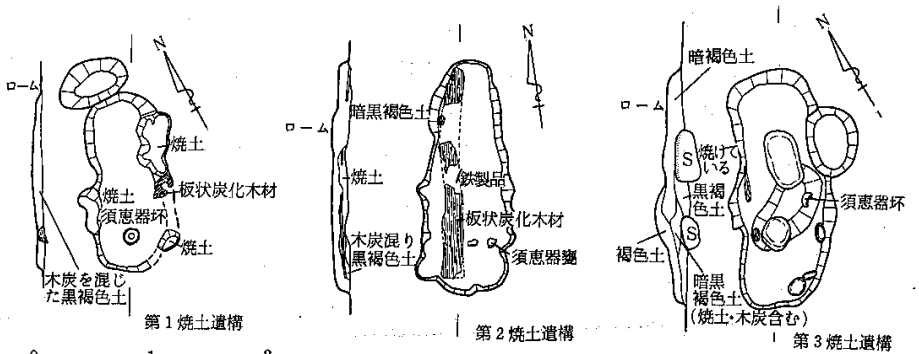
Ⅱ、平安時代の遺構――焼土遺構――

第1焼土遺構と出土遺物

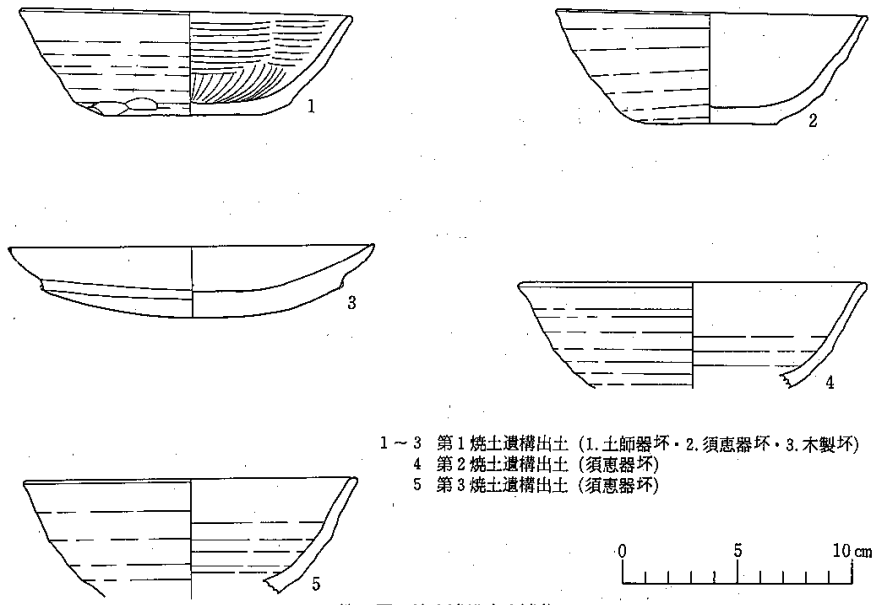
遺構（第50図）

第1焼土遺構は北北東から南南西に長軸をとって、I～J-16～17区に位置している。荒掘りの段階で木製坏・土師器坏が発見され、その存在を知ることができた。

長軸151㎝、短軸70㎝の大きさで、平面は長円形を呈する。遺構はローム層上面（部分的撹乱により幾分汚れている）で確認することができた。深さ10㎝程度の船底状をした掘り込みである。また、側壁は赤褐色に焼けている部分もあるが、底面には火熱を受けた痕



第50図　焼土遺構



1～3　第1焼土遺構出土（1.土師器坏・2.須恵器坏・3.木製坏）
4　第2焼土遺構出土（須恵器坏）
5　第3焼土遺構出土（須恵器坏）

第51図　焼土遺構出土遺物

跡は認められない。内部には木炭と焼土を混じた暗黒褐色土が埋っていた。

出土遺物(第51図)

遺構内に埋っている暗黒褐色土からは鉄製品の破片3点が検出された。また底面と同一レベルに近い部分から、木製坏、土師器と須恵器坏各1点と、板状炭化木材片が発見された。

土師器坏（第51図－1）：ロクロ成形で、切り離しは回転糸切りである。体部下端および底部は手持ちのヘラケズリがある。内面は黒色化され、ヘラミガキが行なわれている。

内面のヘラガミキは中心から周縁に放射状に広がる。胴部では口縁と平行する。

須恵器坏（第51図－2）：ロクロ成形であるが、器外面にはらせん状の稜線が認められる。底部の切り離しは回転糸切りで、ヘラケズリによる調整はない。

木製の坏（第51図－3）：保存状態は悪くないが、炭化のため製作技法の観察は容易でない。しかし、僅かながらその痕跡を残している部分もある。柾目材を利用した、体部に4～5㎜の段の認められる坏である。段を境として上部はロクロによって成形されている。その下部はケズリの痕跡が部分的に観察される。

第2焼土遺構と出土遺物

遺構（第50図）

長軸を南北にとりながら、D－37～38区に位置している。表土下30㎝で円礫を含んだ暗黄褐色のローム層に達する。このローム面上で、長楕円形状に焼土と木炭を含む暗黒褐色土の分布がみられ、遺構の存在が確認された。この第2焼土遺構は船底状を呈した掘りこみであり、長軸195㎝、短軸78㎝の大きさをもつ。壁面は平坦な底面からゆるやかに立ちあがる。また、底面および壁面とも火熱を受けた痕跡を残していない。

遺構の中に埋っている暗黒褐色土は中央南側の上層で焼土を多く含む。その下には幅14～16㎝、深さ180㎝、厚さ2～6㎝の板状炭化材が遺構の主軸にそって横たわっていた。

出土遺物（第51図）

炭化材の他に須恵器2個体分、鉄製品1点が出土している。

須恵器は暗黒褐色土上面より出土。

坏（第51図－4）：口縁部から体部に至る破片。

甕：体部破片。器内外面とも刷毛目がある。方向は一定しない。器外面はさらにヘラケズリが行なわれている。

鉄製品：板状炭化木材直上より発見。

第3焼土遺構とその出土遺物

遺構（第50図）

Ｅ－37～38区、第2焼土遺構の西側に僅かに距離をへだてて発見された。長軸は北東から南西方向である。遺構確認に至る経過は第2焼土遺構の場合と同じである。

焼土・木炭を含む黒褐色土に半分埋まりながらS_1～S_5の大小の円礫が認められる。S_1の場合はその下面が赤く、火熱を受けた痕跡がある。これらの石を排除し、黒褐色土をとり除くと中央部に凹みのある平坦な遺構底面に到達する。遺構の大きさは長軸20㎝、短軸90㎝である。遺構の底面および壁面は火熱を受けた痕跡は認められない。

出土遺物（第51図）

第1層中より、須恵器坏（第51図―5）が1点発見された。ロクロ成形である。底部を欠く。

焼土遺構の年代

出土した遺物についてみると木製の坏に関してはわからないが、いずれも平安時代の土師器、須恵器の特徴をもっている。従って、これらの遺物もその所属時期を平安時代に求めるのが妥当であろう。

III、遺構外の出土遺物

遺構以外からの出土遺物は表土および攪乱層から発見されたものである。分量は平箱1個程度あるが、十分整理が進んでいないためその概略を述べるにとどめたい。

縄文時代の遺物

早期の押型文土器、縄文施文土器・沈線文土器・前期初頭の羽状縄文土器・中期の大木8a式土器・大木9式土器などがそれぞれ数点づつある。その他、石器として石鏃、掻器などがある。

弥生時代の遺物

後期の天王山式土器と思われるものが数点ある。

古墳時代の遺物

南小泉式土器の高坏脚部が1点ある。

平安時代の遺物

土師器や須恵器の破片が大量に発見された。中には「千」の字を書いた墨書土師器も1点ある。

以上の他に近世のものと思われる瓦の破片もある。

6 ま と め

(1) 縄文時代早期前葉押型文土器を出土する竪穴住居跡が発見された。宮城県はもとより、全国的にもこの時期の住居跡の発見例は少なく今後貴重な資料となろう。

(2) 住居跡とあわせて、押型文土器およびそれに伴なう縄文施文土器が発見されて、この時期における土器の組合わせを知る資料となりえた。

(3) さらに石器のあり方についても一定の資料を提供することとなった。

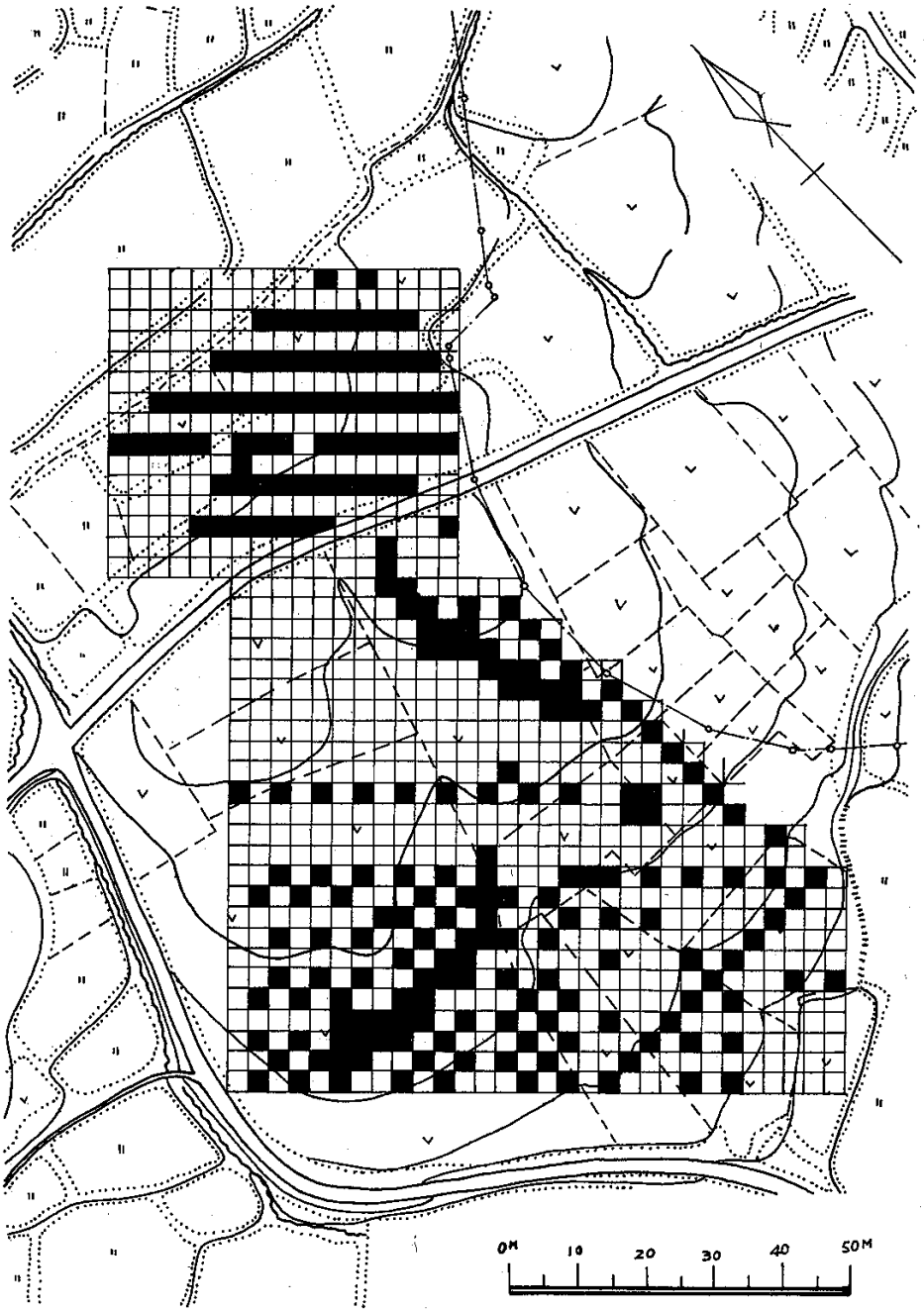
(4) 平安時代の遺構として3例の焼土遺構が発見された。また第1焼土遺構からは残りにくい木製の坏が発見された。

以上のような遺構と遺物の他に、縄文時代早期の沈線文土器や前期・中期の土器・石器も発見されているので調査範囲外に、それぞれの時期の遺構が存在する可能性がある。また、この点に関しては弥生時代、古墳時代についても同様である。（丹羽茂）

参考・引用文献

笹津備洋（1961）：「青森県八戸市日計遺跡」史学第33巻1号
芹沢長介、林謙作（1965）：「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』第7号
武田良夫、吉田義明（1970）：「盛岡市大新遺跡」『奥羽史談』第54号
山下孫継（1971）：「岩手県岩井堂岩陰第4洞穴第七次調査報告書」
氏家和典（1968）：「松田遺跡」『宮城県文化財調査報告書第17集』

（六）植田前遺跡



第52図　地形図・グリット配置図

植 田 前 遺 跡

1 遺跡所在地

宮城県白石市深谷字植田前

2 調査期日

昭和46年5月17日～6月16日、7月10日～7月20日

3 調査主体者

宮城県教育委員会・日本道路公団

4 調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

調査係長　志間泰治
技術主査　氏家和典
技　　師　藤沼邦彦
嘱　　託　佐々木安彦、加藤道男
補 助 員　七戸貞子

5 調査の概要

(1) 遺跡の立地（第52図）

植田前遺跡は、白石インターチェンジの予定地にあたり、白石川の西側の河岸段丘上の平坦面から、ゆるやかな傾斜面上の東、ないし南部分にかけて立地し、道路敷外にもいくぶん広がっている。現在の白石川の西方約900m、平坦面での海抜約35m、遺跡の最も高い所で海抜約44mで、広さ約10000㎡の遺跡である。

(2) 調査経過（第53図）

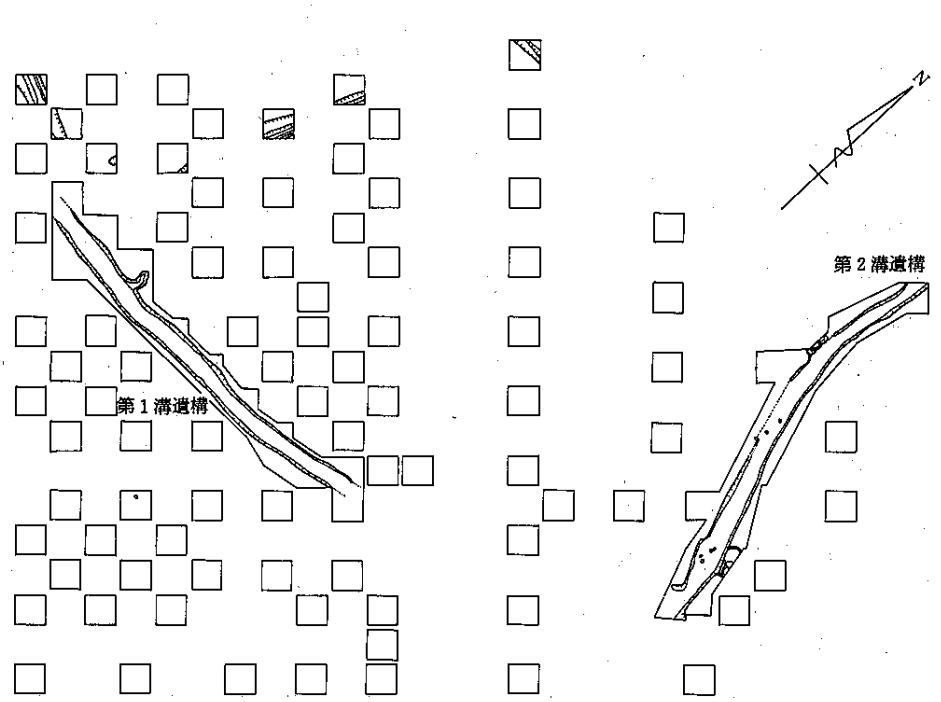
表面採集による遺物は、縄文土器、土師器などで、量は少ないが、広範囲に分布する。広い緩斜面のため、良好な集落の立地条件を備えていると考え、調査を実施した。

調査は遺跡の中央部を東西に通じる道路を境にして、2回に分けて行なわれた。道路より南側を第1区、北側を第2区とした。

〔第1区〕　東西約90m、南北約84mの範囲に3m方眼のグリッドを設定し、155グリッド、1315㎡を発掘した。

調査区域の北辺中央部から、南辺東隅にかけては、ローム面が浅く落ち込み、谷状を呈す。大部分の地域では表土下40㎝程で黄色ローム層になるが、この谷と、遺構の存在する部分にだけ、表土下に黒色土がある。

調査の結果、発見された遺構、東西・南北にそれぞれ走る2本の溝が主なものである。



第53図　遺構配置図

南側のものを第1溝遺構、北側のものを第2溝遺構とした。

また数ヶ所にピットがみられたが、何らまとまりを示さず、遺物も出土していない。

遺物は、縄文土器や石器および土師器、須恵器などで、第1・2溝遺構から集中的に出土している。

〔第2区〕　第2区は、第1区の第2溝遺構の続きを追うためと、遺物の出土状況や立地条件などから、近くに集落の存在を考え、追加調査した。

まず東西約51m、南北約45mの範囲に3m方眼のグリッドを設定し、トレンチ状に1列毎に72グリット、648㎡を発掘した。

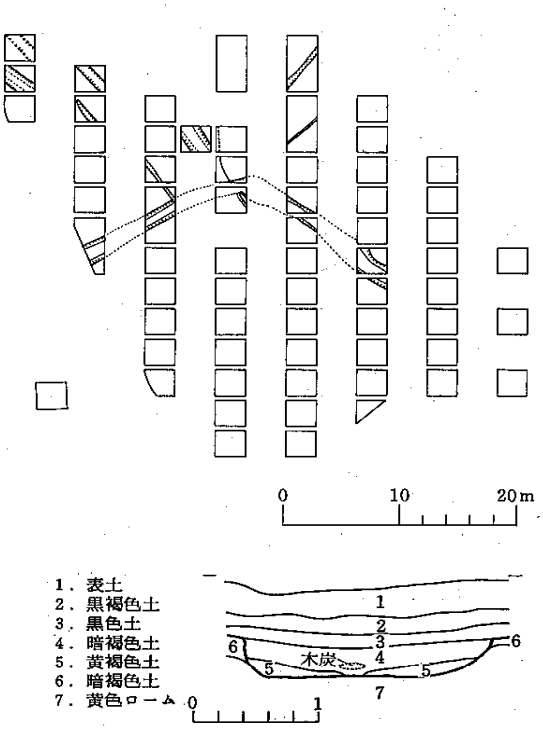
その結果、溝が数本検出された。1本は第1区の第2溝遺構の続きで、道路近くの部分では、1区同様の土師器が少量出土している。他の溝は遺物もごく少なく、表土下に元水田の暗茶褐色土があり、掘り下げるに従い湧水が多くなり、充分な精査ができなかった。

遺物は、縄文土器・石器および土師器などが少量出土した。

(3)　発見遺構（第53・54図）

第1溝遺構

東西に走り、長さ約42m、幅1.4～2.1m、底面幅1.1m～1.6m、深さ11～39㎝ある。



第54図　第２溝遺構断面図

全体的にほぼ直線的であるが、東西３分の１づつが多少北側による。東側に行くに従い多少細くなる傾向を示す。両端は次第に消滅する。

断面は第54図の如く、逆台形の上辺を欠いた形であり、底面は多少の凸凹はあるが、ほぼ平坦である。

溝の輪郭はローム面まで下げた段階で確認され、埋土は２層に分かれる。第１層が黒色土で、遺物を含む。第２層はローム粒が混じる黄褐色土で、遺物はほとんどない。第1、2層共に固く、さらに底面のローム上に張りつくように、酸化鉄が１㎝程の厚さに堆積している。このため、底面の検出は容易であった。溝の西側1/3ほどの埋土は撹乱されている。

北壁西よりの部分に張り出し状のものがあるが、これは溝の確認面より高いレベルですでに認められたピットで、溝より新しい時期のものと思われ、内部から摩滅した縄文土器片が数点発見された。

第２溝遺構

全長約75㎝、幅1.1m～2.4m、底面幅0.7～1.8m、深さ5～30㎝の溝である。北に行くに従い東に折れ、道路に至る。さらに第２区に続き、約17m北に伸び、東に曲がる。第１区南に行くに従い、前述の浅い谷にかかるため、遺構確認面のローム面まで表土より深い所で約70㎝程である。南端では次第に消滅する。

断面は第１溝遺構同様逆台形の上辺を欠いた形である（第54図）。

埋土は２層に分かれ、第１層は暗褐色土で粘性をおび軟かく、礫、木炭を含む。第２層は黄褐色土で、赤褐色の大きな粒が点在し、遺物はほとんど含まない。断面図（第54図）では明らかに、上の層から掘り込まれているが、土質、色調ともごく近似した土のため、層位の識別は難しく、遺構確認面もローム面であった。

遺物は土師器、須恵器が大部分である。これらは溝の埋土第１層から、ひとつのまとま

りをもって出土しており、なかには上向きに3個重なったままの状況で発見された坏もある。

(4) 出土遺物

縄文時代の土器、石器および平安時代後半以降のものと推定される土師器が出土した。前述の2本の溝遺構から出土したものがほとんどである。このうち、縄文時代の遺物は、溝の埋土が撹乱されている部分から主として出土している。

A 縄文時代の遺物（第56図）

土器・磨滅が著しく、小破片が多い。黄褐色または黒褐色を呈し、胎土には繊維を含み砂土は少ない。厚さは1㎝内外で、酸化鉄の付着するものもみられる。

無文が多いが、撚糸文施文のものもみられる。時期は、早期末から前期初頭に属すると思われる。

石器・すべて頁岩製である。無茎の石鏃9点、縦長の石匙3点、石篦2点、スクレーパー10数点、その他剥片が数10点である。

B 溝遺構に伴う遺物（第55図）

土師器・数量的に坏が大部分を占める。この中には内黒と非内黒とがあり、前者はごく少ない。

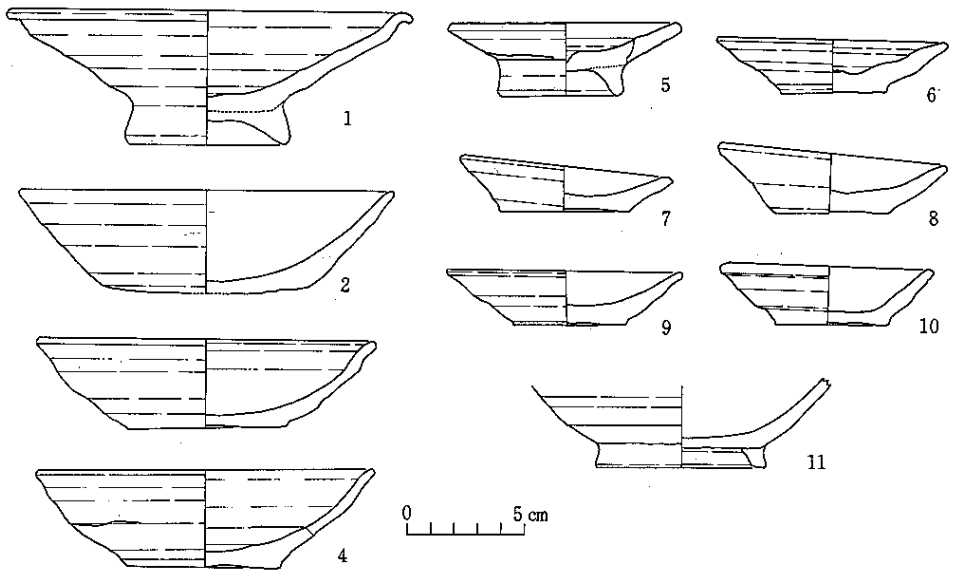
内黒の坏は体部が外反し、下半がいくぶんふくらむが、ほぼ直線的に口縁部まで立ち上がる。底部はヘラケズリした後に台がつけられている。内面の黒色化は表面のみで、内部におよんでいないのが多い。またヘラミガキされているが、その方向は放射状のものが1点あるのみで、他は不明である。外面は黒褐色と茶褐色のまだらの色調で、全体にロクロ成形の痕がみられる。

非内黒の坏をみると、色調は黄褐色のものが多く、たまに黒褐色、赤褐色を呈するものがみられる。器形でみれば平底と台付の別があり、その各々に口径約10㎝のものと約15㎝のものとがある。

全体に共通する特徴としては、体部は外反し、1ないし3ヶ所にふくらみを有すること。内外面にロクロ成形の痕がみられること。底部は回転糸切りであること。特に再調整の認められないことなどである。

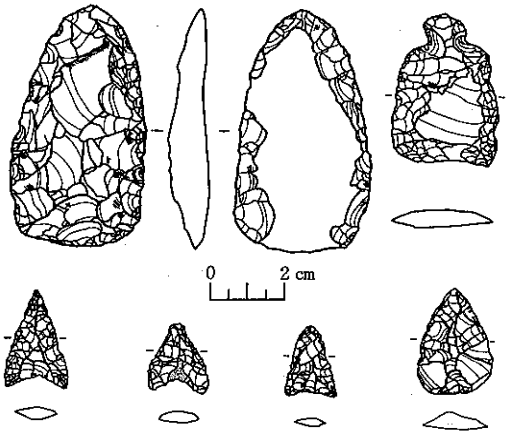
台付のものは、底部糸切りの後に取り付けられている。

須恵器・土師器にくらべてごく少ない。破片のみであるが、大甕と坏に大別される。大甕は口縁部内外面にロクロ調整痕がみられ、いくぶん外反する。体部は外面縄目状の叩き目、内面荒いヘラケズリが見られる。坏は口縁部が外反し、口縁部はふくらみ、丸い。他の部分は不明である。他に溝に伴う遺物としては、フイゴの羽口がある。



第55図　出土遺物実測図

溝遺構に伴うこれらの遺物は、今のところ類例が少ない。年代に関しても不明な点が多いが、非内黒の坏が多く、また内黒の坏でも台付がほとんどであるなどの特徴により、平安時代後半以降のものと予想される。



第56図　出土遺物実測図

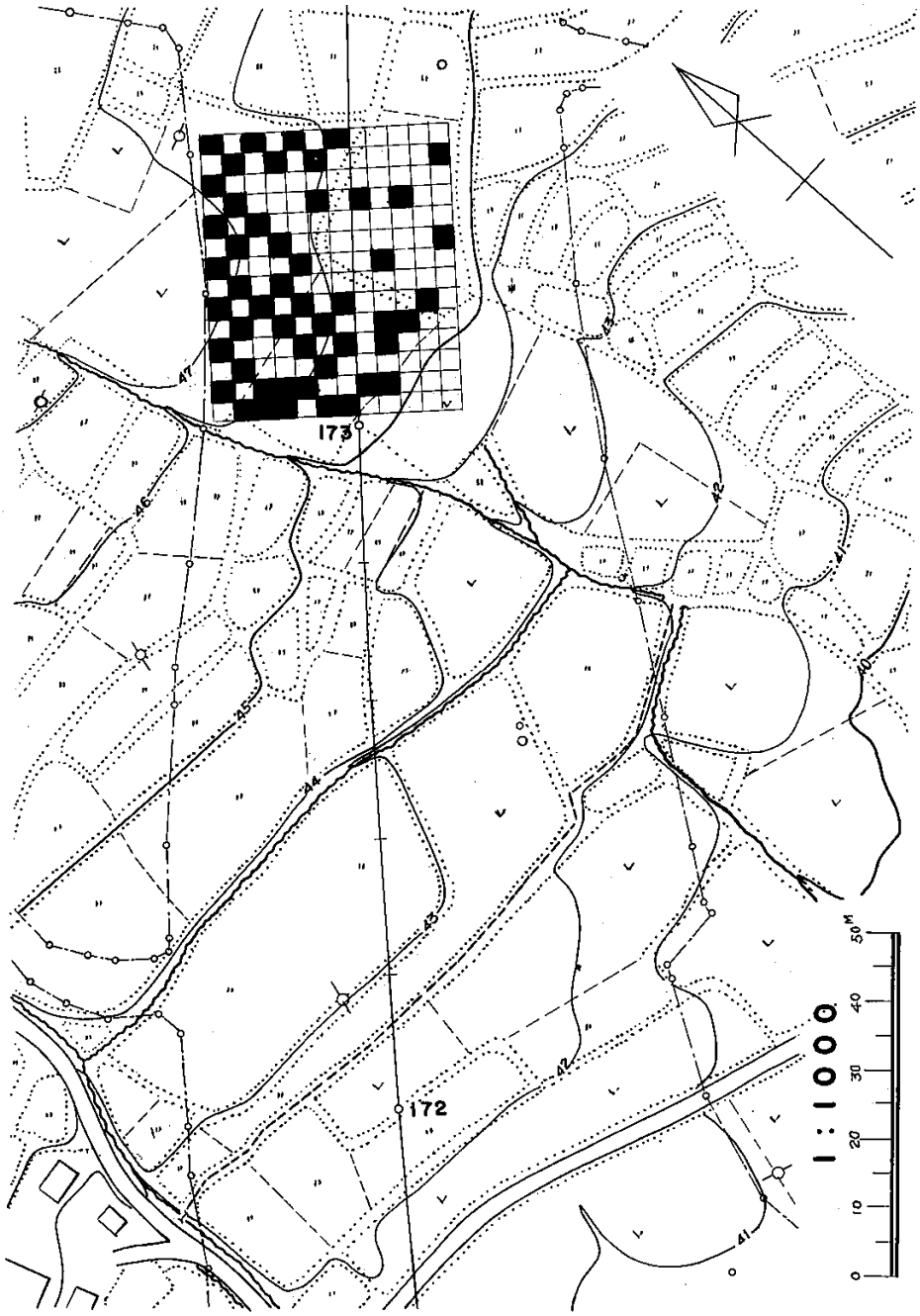
6　まとめ

(1)　主な発見遺構は、2本の溝であるが、性格は不明である。

(2)　縄文時代早期末から前期初頭に属すると思われる土器、石器が出土した。

(3)　2本の溝に伴って出土した遺物は、土師器の特徴により、平安時代後半以降のものと予想される。　(加藤道男)

（七）引桜遺跡



第57図　地形図・グリット配置図

引　桜　遺　跡

1　遺跡所在地

白石市福岡深谷字引桜

2　調査期日

昭和46年6月21日～7月10日

3　調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

4　調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

調査係長　志間泰治
技　　師　白鳥良一
嘱　　託　岩淵康治　佐藤庄一

5　調査の概要

引桜遺跡は明神脇遺跡の南西約500mに位置し、白石川によって形成された深谷河岸段丘上に立地している。遺跡のすぐ南西には植田前遺跡が所在する。両遺跡は水田によって画されているが、ほぼ一連の遺跡と考えられる。遺跡付近は標高約45mで南にゆるやかに傾斜しており、現在、大部分が畑地、一部が墓地と果樹園になっている。

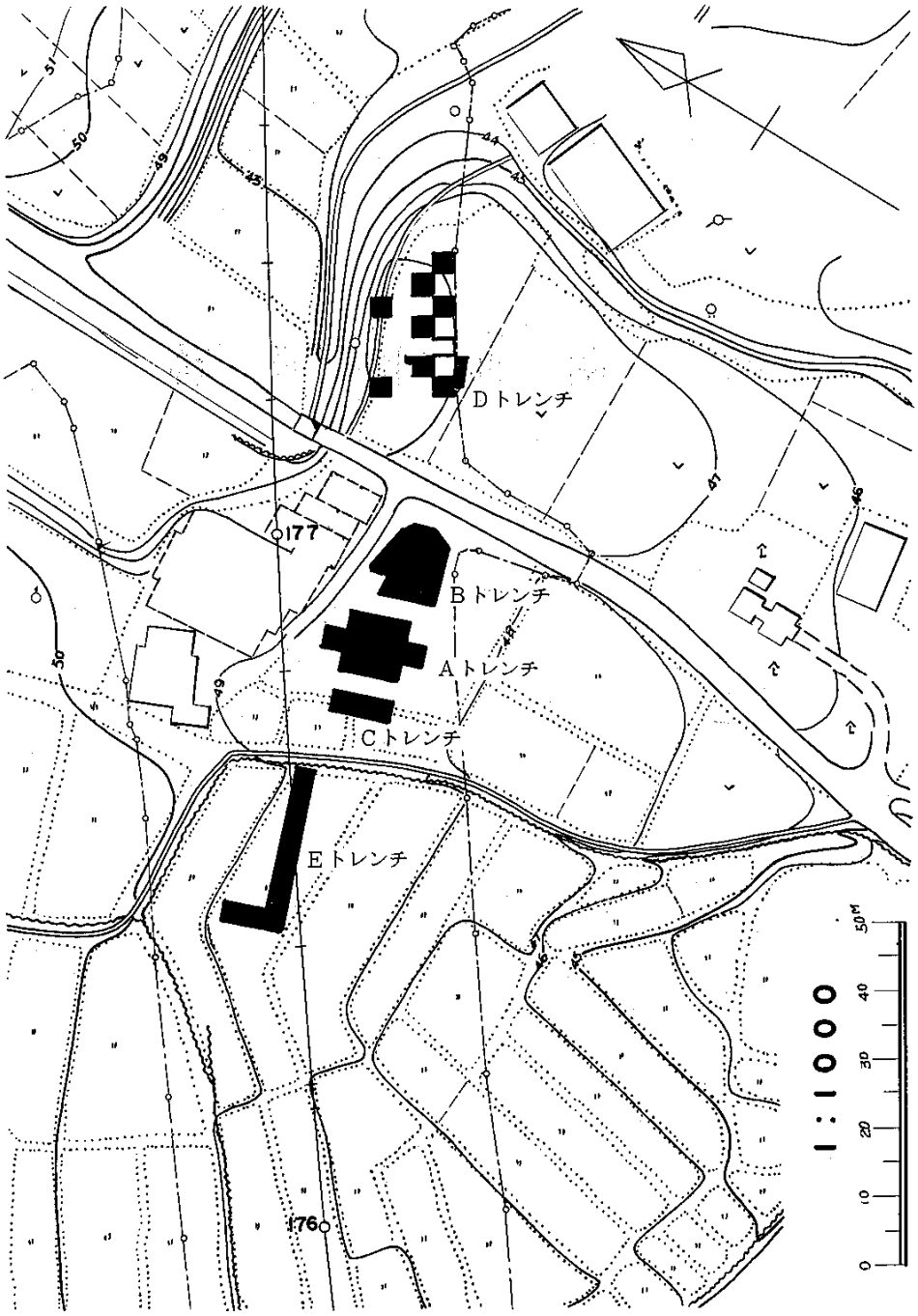
調査は畑地の部分に東西36m、南北48mの範囲でグリットを設定して行ない計450㎡を発掘した。その結果、約30㎝の厚さを持つ耕土の下にすぐ地山のロームがみられ、遺跡は耕作等によりすでに大部分が撹乱をうけている。出土した遺物も少く、若干の縄文土器片や石鏃、平安時代のものとみられる土師器、須恵器の破片などが発見されたにすぎず、まとまりのある遺構や遺物は発見されなかった。

また、果樹園や付近の水田にもトレンチを設定して調査したが、遺物、遺構の発見はなかった。　（白鳥良一）

参考文献

後藤勝彦（1968）「白石市家老内・引桜遺跡」『宮城県文化財調査報告書第17集』

（八）　明神脇遺跡（みょうじんわき）



第58図　地形図・トレンチ配置図

明 神 脇 遺 跡

1 遺跡所在地

白石市福岡深谷字明神脇

2 調査期日

昭和46年6月7日～9月10日

3 調査主体者

宮城県教育委員会・日本道路公団

4 調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

調査係長　志間泰治
技術主査　氏家和典
技　　師　藤沼邦彦　白鳥良一
嘱　　託　岩渕康治　佐藤庄一
補 助 員　斉藤吉弘　七戸貞子

5 調査の概要

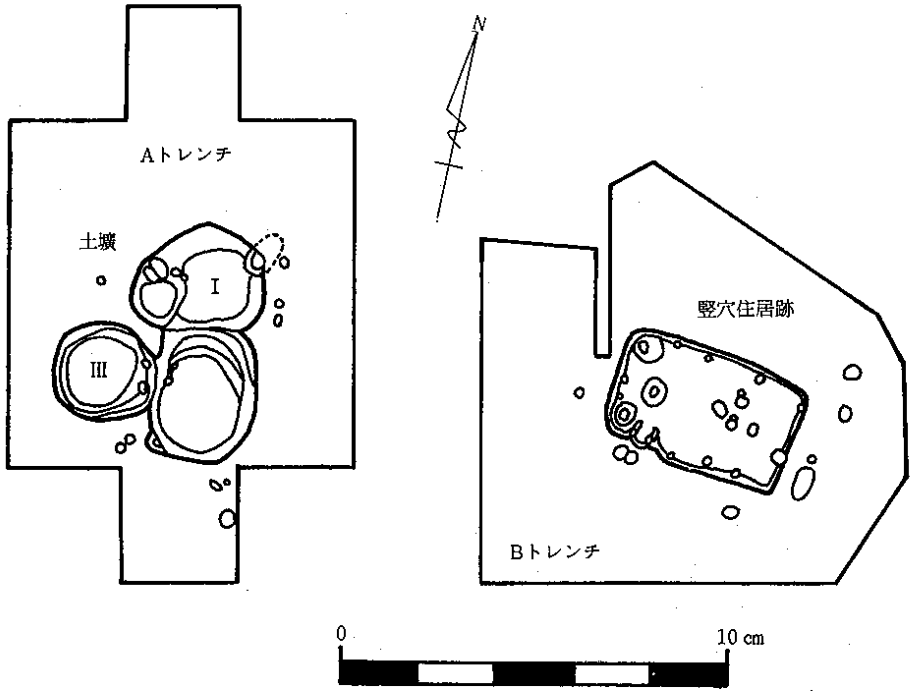
(1) 遺跡の立地（第58図）

明神脇遺跡は深谷地区の東部に位置し、現在、遺跡の南方を東に流れている白石川によって形成された河岸段丘上に立地している。遺跡付近は全体に南に緩く傾斜しており、遺跡の約150m南に一段低い段丘へ続く比高約10mの段丘崖がみられる。また遺跡のすぐ東にある家老内遺跡も同じ段丘上に立地し、源氏川が両遺跡の間を流れている。遺跡付近の標高は約48mである。

遺跡は現在水田と宅地になっていて遺物の散布はまったく認められないが、以前は畑地で土師器や須恵器の破片が散布していた。周囲の地形からみて遺跡はほぼ東西50m南北40mの範囲にわたるものと考えられ、その大部分が縦貫道路敷にかかっている。

(2) 調査の経過

宅地部分はすでに遺跡が破壊されているものと考えられたので、宅地南側の水田に南北に長いAトレンチを設定して調査した。その結果、耕作土の下に開田の際敷かれたと思われる約10㎝の厚さをもつ灰白色の粘土層がみられ、その下に黒土層があらわれた。Aトレンチではこの黒土層の上面に土師器、須恵器の破片が多量に出土する部分があり、何んらかの、遺構の存在が予想された。そこで、数センチ掘り下げ、ローム面で互に切り合った3個の大きな土壙を確認できた。



第59図　遺構配置図

さらにAトレンチの両側にBトレンチ、Cトレンチを設定し、周囲の遺構検出に努めたところ、Bトレンチの薄い黒土層下のローム面で竪穴住居跡を1軒検出した。Cトレンチでは遺構は検出されなかった。各トレンチとも遺構以外の場所では遺物の出土は、ごく微量であった。

また遺跡の西端および東端における遺構の有無を調べるため、西側の一段高い水田にDトレンチ、東側の畑にEトレンチを設定して調査したが遺構、遺物の発見はなかった。

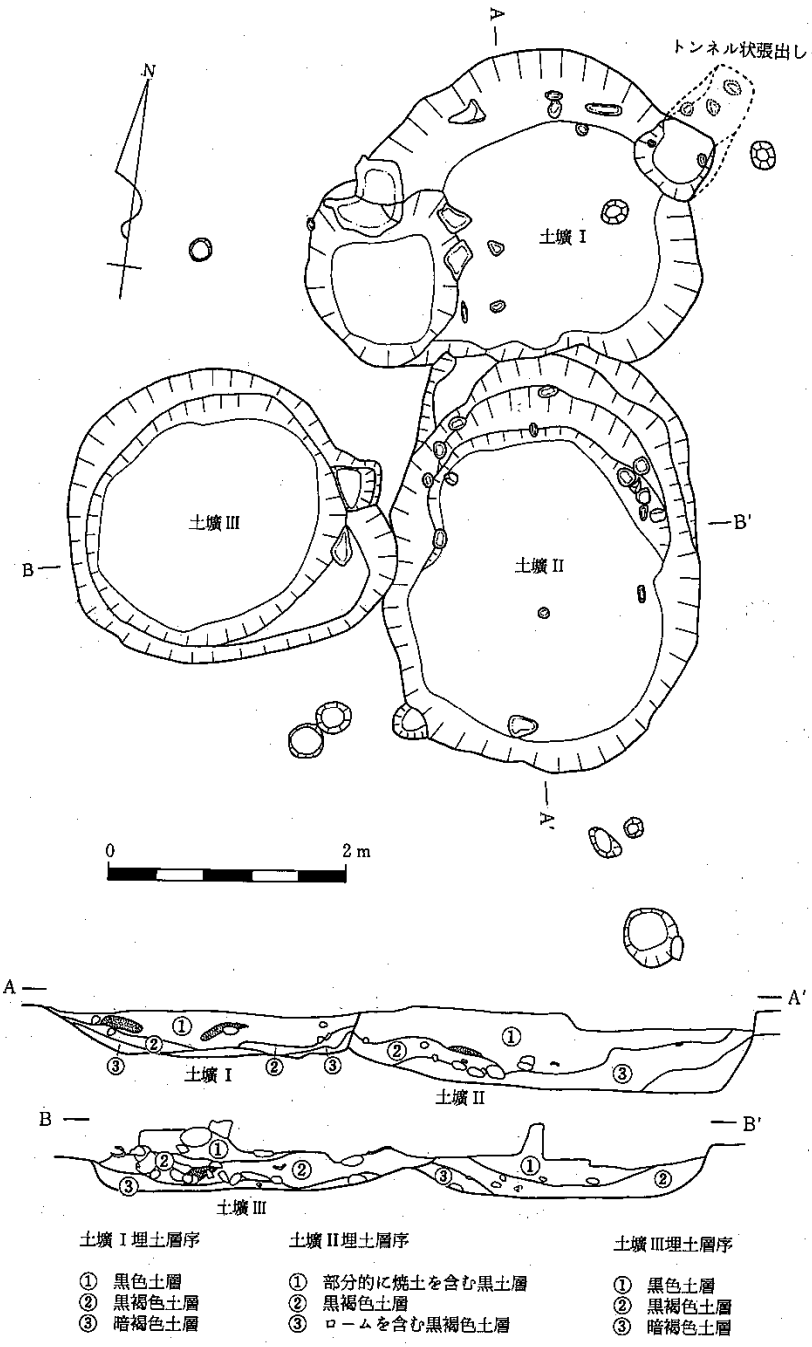
今回の発掘面積は各トレンチ合せて405㎡である。

(3)　発見遺構（第59図）

発見された遺構は土壙3個、竪穴住居跡1軒である。両遺構間の距離は約9mである。各遺構は遺物の出土状況などからローム面よりも上層から掘り込まれていたものと見られるが、遺構が確認できたのはローム面であるので以下の各遺構の説明で、遺構の規模および深さなどはローム面を規準とした数値であることをあらかじめことわっておく。

(ⅰ)土　壙（第60図）

Aトレンチの耕土下約20㎝のローム面で確認されたもので3個の土壙（土壙Ⅰ～Ⅲ）は互に切合っている。その新旧関係は平面プランおよび断面の観察により、土壙Ⅱがふるく


A
トンネル状張出し
N
土壙 I
土壙 III
B
B'
土壙 II
A'
0
2 m
A
A'
①
②
③
土壙 I
土壙 II
B
B'
土壙 III
土壙 I 埋土層序
① 黒色土層
② 黒褐色土層
③ 暗褐色土層
土壙 II 埋土層序
① 部分的に焼土を含む黒土層
② 黒褐色土層
③ ロームを含む黒褐色土層
土壙 III 埋土層序
① 黒色土層
② 黒褐色土層
③ 暗褐色土層

第60図　土壙実測図

土壙Ⅰ、土壙Ⅲがそれよりも新しいことが確認できた。土壙Ⅰと土壙Ⅲの新旧関係は不明である。以下各土壙について略述する。

土　壙Ⅰ

長径約3.3m、短径約2.5mの卵形のプランを呈し、深さは最深部で50cmある。底面西側にやや深いクボミがみられ、また北東部には底面を約10cm程掘り下げ、さらに北東方向に奥行き60cm程掘り込んだトンネル状の張り出しがある。この張り出しの前面には径約23cm、深さ10cmの円形ピットが掘り込まれている。壁面および底面にはローム層からつき出ている大小の礫が数個みられる。壁面の立ちあがりは、北側が比較的ゆるやかである。

埋土は3層にわけられ、いずれも中央部に向かって傾斜している。とくに第1層、第2層中には灰や木炭の混じった焼土がブロック状に各所にみられ、土師器、須恵器などの遺物も多量に包含されていた。第3層には焼土や遺物はほとんど含まれていなかった。張り出し部の埋土内からも土師器が数点出土した。

土　壙Ⅱ

長径約3.6m、短径約2.7mの長楕円形のプランを呈し、北側は比較的ゆるやかに底面に落ち込んでいる。深さは最深部で約60cmある。壁面および底面には土壙Ⅰと同様、礫がローム層からつき出ている。

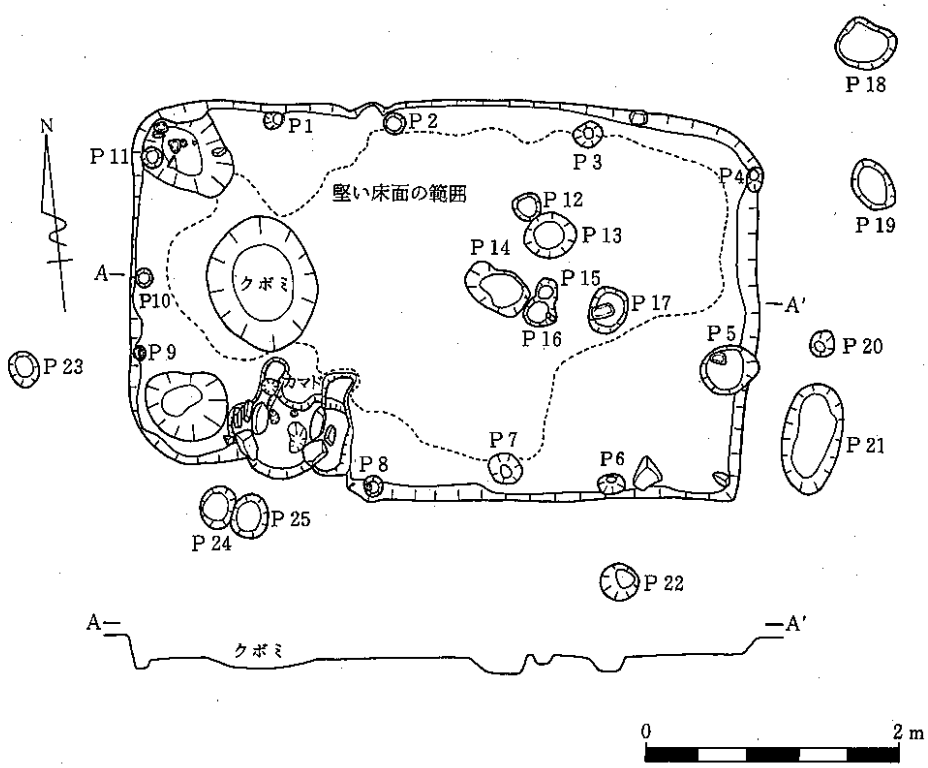
埋土はブロック状に入る層が多く、場所によって異なるが、ほぼ3層に大別できる。第1層から第2層にかけては焼土や木炭がブロック状に入っているが、とくに第2層中には焼土が多量に含まれていた。出土遺物も極めて多く、第2層の焼土部分を中心に第1層から第2層にかけて多量の土師器、須恵器が出土した。ほかに第2層から、棒状の鉄製品が1点発見された。また各層には大小の河原石や切石が多数含まれていた。第3層は粒状のロームを多量に含み、遺物はほとんど包含されていなかった。

土　壙Ⅲ

径約2.4～2.6mのほぼ円形プランを呈しているが南東部の壁が舌状に張り出しているため壁上端でのプランは卵形に近い。深さは最深部で64cmある。東壁の上部に三角形の浅いピットがみられる。

埋土は3層に大別される。第2層中に焼土や木炭のブロックがみられる。
この土壙では第1層から第2層にかけて非常に多量の礫が含まれており、ほぼ礫で埋まっているような状態であった。遺物は第2層から須恵器坏の完形品や鉄鏃などが出土したが全体としては他の土壙より少ない。

これからの土壙は後述するように出土遺物からみていずれも平安時代のものと考えられる。



第61図　竪穴住居跡

(ⅱ)竪穴住居跡（第61図）

Bトレンチにおいて、約30㎝の厚さをもつ耕土および整地層直下のローム面で確認された住居跡である。壁の上部はすでにかなり削平されているものと考えられる。規模は壁の上端で東西4.85m南北3.1mあり、長方形プランを呈している。現存する壁の高さは各壁とも10～15㎝である。遺構検出面から床面までの埋土は3層にわけられる。第1層、第2層ではともに層全体に土師器、須恵器などの遺物が含まれているが、第3層では床面との境付近以外には遺物はほとんどみられない。

壁近くではローム質の埋土のブロックがみられるが遺物は含まない。床面はローム層で、中央部では非常にかたくしまっているが壁周辺ではあまりかたくない。周溝は認められない。

カマドは南壁のやや西寄りで検出された。西側に粘土で被れた焼けた石が数個ずつ残っていることから、切り石で補強された粘土づくりのカマドであったとみられる。カマドの底面には約5㎝の厚さで焼土が残っている。また石のヌキトリ痕と思われるピットがカマド内部に2個、粘土上に1個認められた。カマドは焼土および焼土や木炭を含む暗褐色

土などの埋土によって厚く被われていた。埋土上部から内黒の土師器坏完形品が1個発見された。煙道は検出されなかった。

竪穴内には17個のピットが認められた。うち11個は壁に添って配置され、多くはほぼ対称の位置にある。他の6個は竪穴の中央部やや東寄りの床面に集中している。これらのピットの配置状況から柱の構成がほぼ推定できるものと考えられる。ピットの大きさは10～50㎝と大小さまざまであるが深さは10～15㎝でほぼ一定している。ピットの埋土はロームの粘土粒を含む黒褐色で、概して各ピットに共通している。また竪穴の南西隅と北西隅の床面に長径約70㎝、短径約50㎝、深さ10～20㎝の不整楕円形の掘り込みがみられ、中から土師器の破片が少数出土した。貯蔵穴かも知れない。さらにカマド北側の床面に長径約1m、短径75㎝、深さ7㎝の楕円形の浅いクボミがみられた。その他、カマド北側のかたくしまった床面下にロームのブロックを含む比較的しまりのある黒褐色土で埋まった長径110㎝、短径95㎝、深さ25㎝の掘り込みが認められたが、遺物は出土しなかった。

竪穴外でも東壁外に4個、南壁外に3個、西壁外に1個のピットが検出された。埋土はピット24、ピット25を除いては竪穴内のピットとほぼ同質である。ピット24、ピット25の埋土はやわらかい黒土で砂や木草根が入っており、後世に掘り込まれたピットとみられる。

床面からの出土遺物は少なく、土師器の坏、甕、須恵器坏の破片が床中央部や貯蔵穴とみられる掘り込み中から少数発見されたにすぎない。出土遺物からこの住居跡の使用年代は平安時代と考えられる。

(4) 出土遺物（第62図）

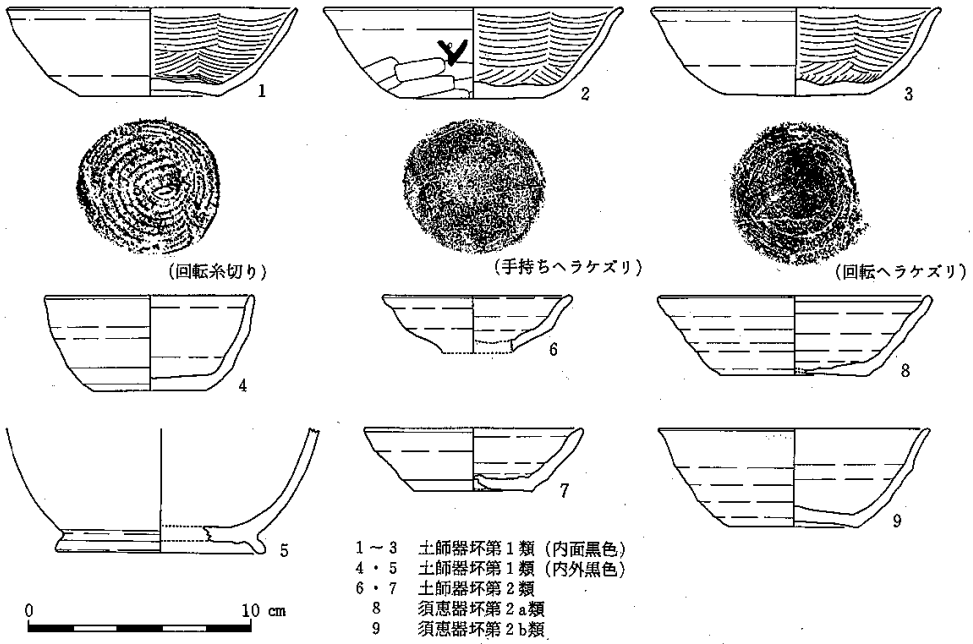
土壙内から多数の土師器（坏、甕）と須恵器（坏、甕）をはじめ少数の鉄製品が出土した。整理が進んでいないので各土壙の遺物を一括し、その概略をのべる。

（ｉ） 土師器

坏 すべてロクロによって成形されたものである。ロクロから切離された後の再調整痕の有無により2種類に分類できる。

第1類〔再調整痕がみられる坏〕

ロクロ成形後、ヘラケズリやヘラミガキ、内面黒色処理などの再調整をうけ、その痕跡が観察される坏である。ロクロからの切離し手法は回転糸切りのものが圧倒的に多いが、なかには回転ヘラ切りのものも少数みられる。ロクロからの切離し後、底部や体部下端にヘラケズリの再調整をうけているものが多い。ヘラケズリはロクロ上で行われる場合と、手持ちで行なわれる場合とがあるが、後者の技法によるものがやや多い。器内面は全遺物に共通して入念なヘラミガキと黒色処理が施されている。ただし中には黒色処理された後再酸化にあい黒色が消失して赤褐色化したとみられるものもある。器形は平らな底部から



第62図　土壙内出土坏実測図

直線的またはやや内彎気味に斜上方に立上がる単純なものが多い。また底部に粘土貼付による高台のつくのもある。焼成はあまり良好とは言えず器質はもろい。器外面の色調は、暗褐色を呈するものが多い。

この類には他に器内外全面にヘラミガキと黒色処理が施されているものも少数みられる。

4の坏は内黒坏とは器形が著しく異なる。5は高台付坏で口縁部を欠いている。

第2類〔再調整痕がみられない坏〕

ロクロからの切離し後の再調整痕がまったく認められない坏で数は少ない。器高は2～3cm程度で、小形の坏が多い。器形は底部から直線的に斜上方に立ちあがるものと、体部上半でややふくらみをもつものとがある。土質は概してもろく、器面の色調は赤褐色、暗褐色、黄褐色などを呈し、酸化炎で焼成された可能性が強い。底部は糸切底である。

■■　個体数は比較的多いが、完形に復原できるものは1点しかない。器形は大部分が長胴形を呈する。ロクロ成形痕の認められるものと認められないものとに大別できる。

第1類〔ロクロ成形の痕跡がみられるもの〕

器面にロクロ成形の痕跡が認められるものである。底部に糸切り痕がみられるものや糸切後ヘラケズリの再調整をうけているものがある。体部はロクロ調整だけのもの、体部下

半にヘラケズリの見られるもの、ハケ目調整が行なわれるものなどがある。口縁部は大きく外傾し口唇部外側に稜線をもつものが多い。口縁部内外面は入念にヨコナデ調整されている。内面はハケ目やナデによって調整される。

第2類〔ロクロ成形の痕跡がみられないもの〕

ロクロ成形痕の認められないものである。底部は席(むしろ)目状圧痕を有するものやヘラケズリ痕のあるものが見られる。体部には粗いケズリやハケ目による調整痕がある。また体部に輪積痕の認められるものもある。口縁部はややゆるやかに外反し、口縁内外はヨコナデ調整され、内面にはハケ目、ナデによる調整がみられる。

なおこれらの土師器坏、甕は東北地方土師器編年上、ほぼ表杉ノ入式に比定でき、平安時代のものと考えられる。

(ii) 須恵器

土師器に比べ数はあまり多くない。

坏　すべて糸切底で、底部から直線的に斜上方に立上がる単純な器形の坏である。ロクロからの切離し後、再調整されるものとされないものがある。

第1類〔再調整されるもの〕

ロクロからの切離し後、底部にヘラケズリの再調整痕がみられるものが数点ある。色調は灰色を呈し、還元炎で焼成されたものとみられる。

第2類〔再調整痕されないもの〕

再調整の痕跡が全く認められないもので色調により灰色を呈するもの（第2a類）と赤褐色を呈するもの（第2b類）に細分できる。第2a類は還元炎で焼成されたと考えられるが、第2b類は器内外面が赤褐色または明褐色を呈し、酸化炎で焼成された可能性がある。器質は堅緻である。ただし第2b類には、第2a類の坏が火熱をうけて酸化し赤褐色化したものも含まれるとみられるが区別できない。

甕　完形品や大形の破片がなく詳細は不明である。

(iii) 墨書土器

土壙内出土の土師器、須恵器の中に墨書のあるものが6点みられる。うち5点は土師器の坏第1類に属するものにみられ、なかには「上」、「＋」（「×」か）と読み取れるものがあるが他は一部が欠失していたり、墨書が不明瞭で判読できない。他の1点は須恵器坏第2b類に属する坏の底部に見られるが、欠失部分が多くて判読できない。

その他、住居跡内出土の第1類の土師器坏にも1点、体部に墨書がみられるものがあるが判読できない。

(iv) 鉄製品

土壙IIIの第2層中から平根の鉄鏃が1点、土壙IIから棒状の鉄製品が1点出土した。鉄鏃は中子の基部と両側のかえしの先端部が欠損している。中子の横断面は長方形を呈している。現長6.3㎝、現存最大巾2.7㎝、厚さは先端部で0.1㎝、中子で0.5㎝である。

6 ま と め

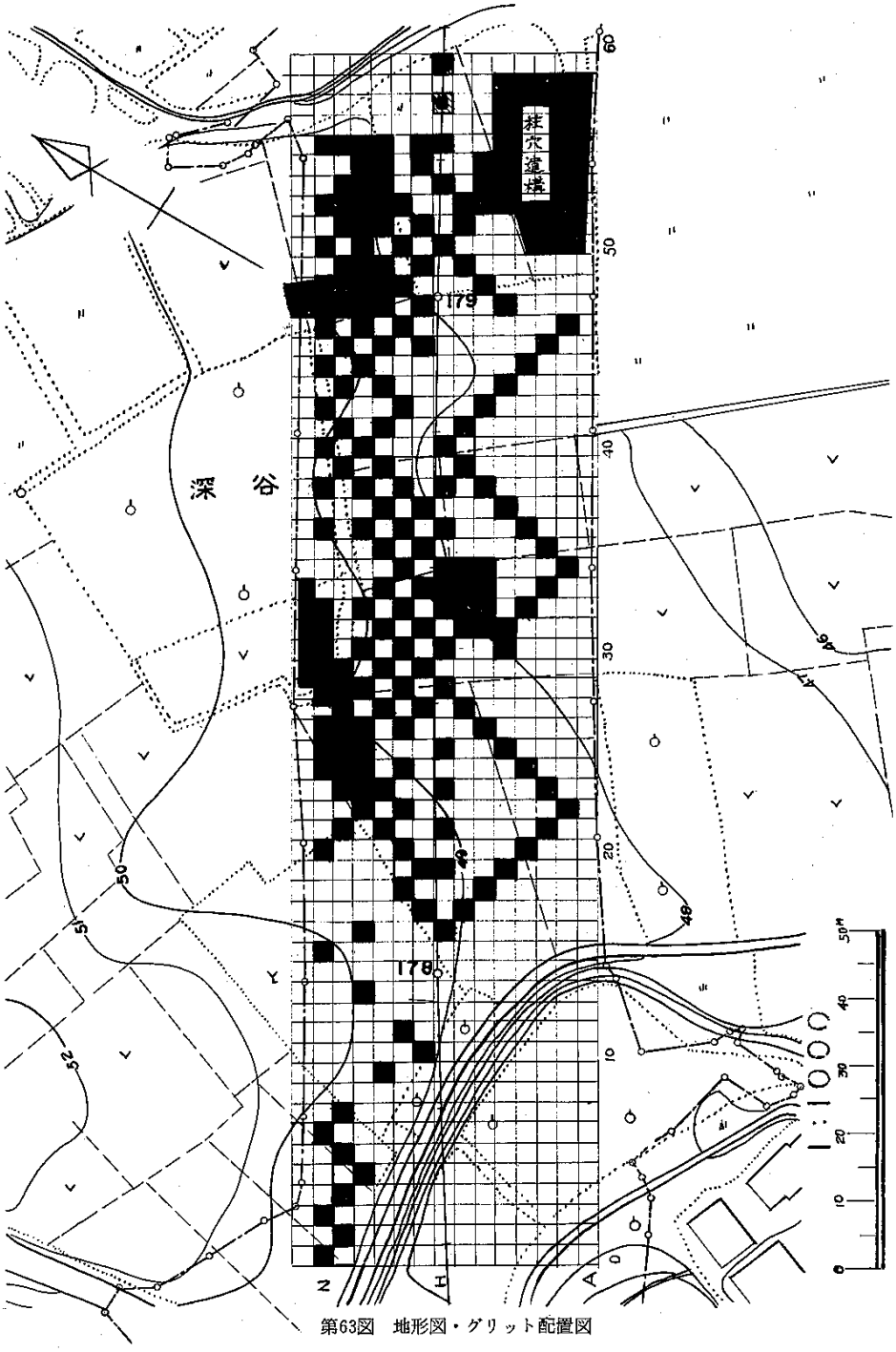
(1) 明神脇遺跡は深谷河岸段丘上の南緩斜面に立地しており、水田中に設定したトレンチで平安時代のものと考えられる竪穴住居跡1軒と土壙3個が発見された。

(2) 竪穴住居跡と土壙内から出土した土師器、須恵器には、成形、調整技法、器形、焼成などの点において同じ特徴がみられ、両遺構が密接な関連を持っていたものと考えられる。

(3) 各土壙は焼土や木炭が多量に混入した土、河原石などで埋積しており、中から多量の遺物が発見されたが、埋土や遺物の出土状況などからこれらの土壙は「塵捨穴」のような施設ではないかとも考えられる。類例をまちたい。

(白鳥良一)

（九）　家老内（かろうち）遺跡



第63図　地形図・グリット配置図

家 老 内 遺 跡

1 遺跡所在地

宮城県白石市福岡深谷字家老内前

2 調査期日

昭和46年5月14日～9月4日

3 調査主体者

宮城県教育委員会、日本道路公団

4 調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

調査係長　志間泰治
技術主査　氏家和典
技　　師　藤沼邦彦、白鳥良一
嘱　　託　岩渕康治、佐藤庄一
補 助 員　斎藤吉弘、七戸貞子

5 調査の概要

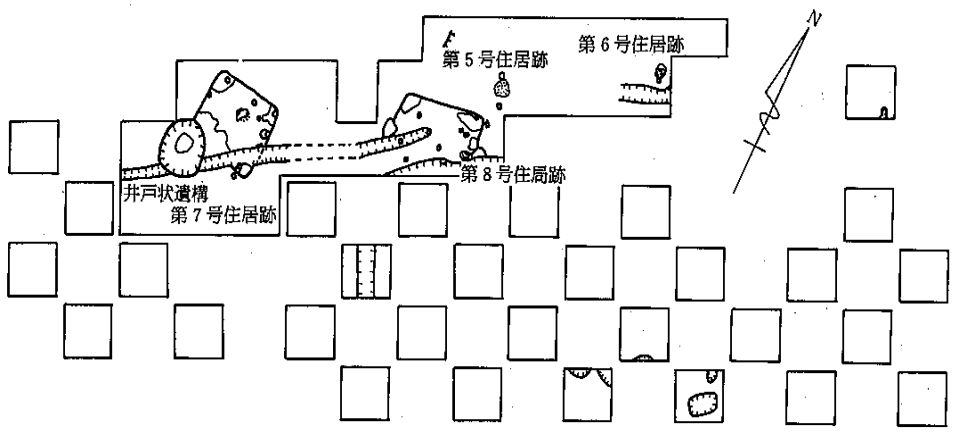
(1) 遺跡の立地（第63図）

家老内遺跡は、白石市街の北方4.9㎞、青麻山の東南麓にあり、白石川の形成した河岸段丘上に立地する（第63図）。遺跡のすぐ北側を白石川の支流である平家川が、南側を源氏川が流れている。標高は約49m、現在は果樹園や麦畑として利用されている。

(2) 調査経過

道路敷にかかる東側のゆるやかな斜面に、東西42m×南北180mの調査区域を設定し、2070㎡を発掘調査した（第63図）。さらに平家川をはさんだ北対岸にも、若干の遺物の散布が認められたので、この地域を東西36m×南北54mの範囲で162㎡発掘調査した。基本的層序は第1層表土、第2層黒褐色粘質土層、第3層黄褐色粘土層（ローム層）である。調査区南側および平家川の北対岸地区には、第3層の上に砂礫層の堆積がみられた。

調査の結果、調査区中央北で平安時代の遺物と竪穴住居跡および井戸と思われる遺構を、東端で中世後半から近世の建物跡に関係すると考えられる柱穴群を検出できた。遺構が確認できたのは、黄褐色粘土層面である。遺構以外の地点では遺物があまり出土しなかった。遺跡の中心は、地形からみて調査区の西側にあると推定される。



第64図　遺構配置図

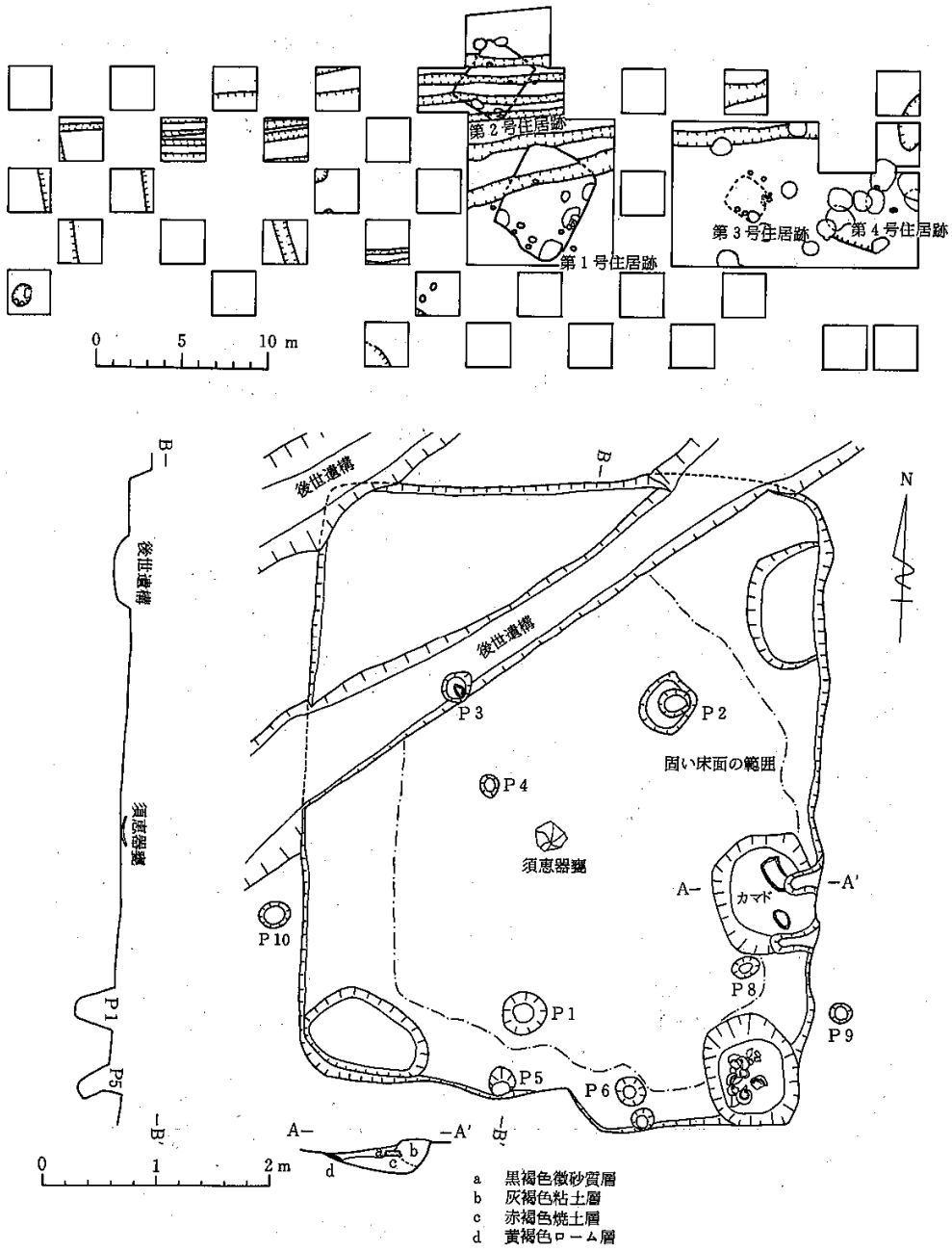
(3)　発見遺構（第64図）

住居跡は、調査区中央北端のゆるやかな傾斜面に平行して8軒検出できた。検出順に第1号から第8号住居跡とする（第64図）。また第7号住居跡の東西に井戸と思われる遺構が検出された。なおこの地区には、南北ないし東西方向に走る数条の溝がみられるが、埋土や形状からみて後世のものであると考えられる。さらに調査区北東隅に、東西約18m×南北約27mの範囲で中世の末から近世の建物跡に関係すると考えられる柱穴群を検出できた。

第1号住居跡（第65図）

東西4.5m×南北5.8m、床面積23.5㎡でやや不整の長方形を呈する住居跡である。住居跡北側が後世の溝2本によって部分的にこわされているのをのぞくと、ほぼ全体のプランを検出できた。周溝は認められない。住居の壁の高さは、遺構確認面から床面まで（以下、現存の壁の高さとする）で、北壁で20㎝、南壁で5㎝である。床面は、壁近くは軟かいが、壁面から40～80㎝離れた住居跡の中央部は突き固められたように堅くしまっている。床面の土は黄褐色粘土に黒褐色土が混ざったものである。柱穴は竪穴内外で10個（ピット1～10）ある。そのうちピット2では、掘り方と木来の柱穴との区別が確認できた。ピットの形状、位置などからピット1および2が主柱としての役割をもったと考えられる。

カマドは粘土構築で東壁南寄りにある。残存する基部は、幅35㎝、奥行き35㎝である。煙道は検出できなかった。基部の左裾と中央に河原石があり、カマドの内部に浅いくぼみがあり、内部に焼土が堆積していた。カマドの右脇一住居跡の東南隅には、径1×0.8m、深さ45㎝の、楕円形の穴があり、底面は平坦であった。木炭、焼土とともに最下層から8


第２号住居跡
第３号住居跡
第４号住居跡
第１号住居跡
0 5 10 m
後世遺構
後世遺構
後世遺構
須恵器甕
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P8
P9
P10
固い床面の範囲
カマド
A—
—A′
B—
—B′
N
0 1 2m
a 黒褐色微砂質層
b 灰褐色粘土層
c 赤褐色焼土層
d 黄褐色ローム層

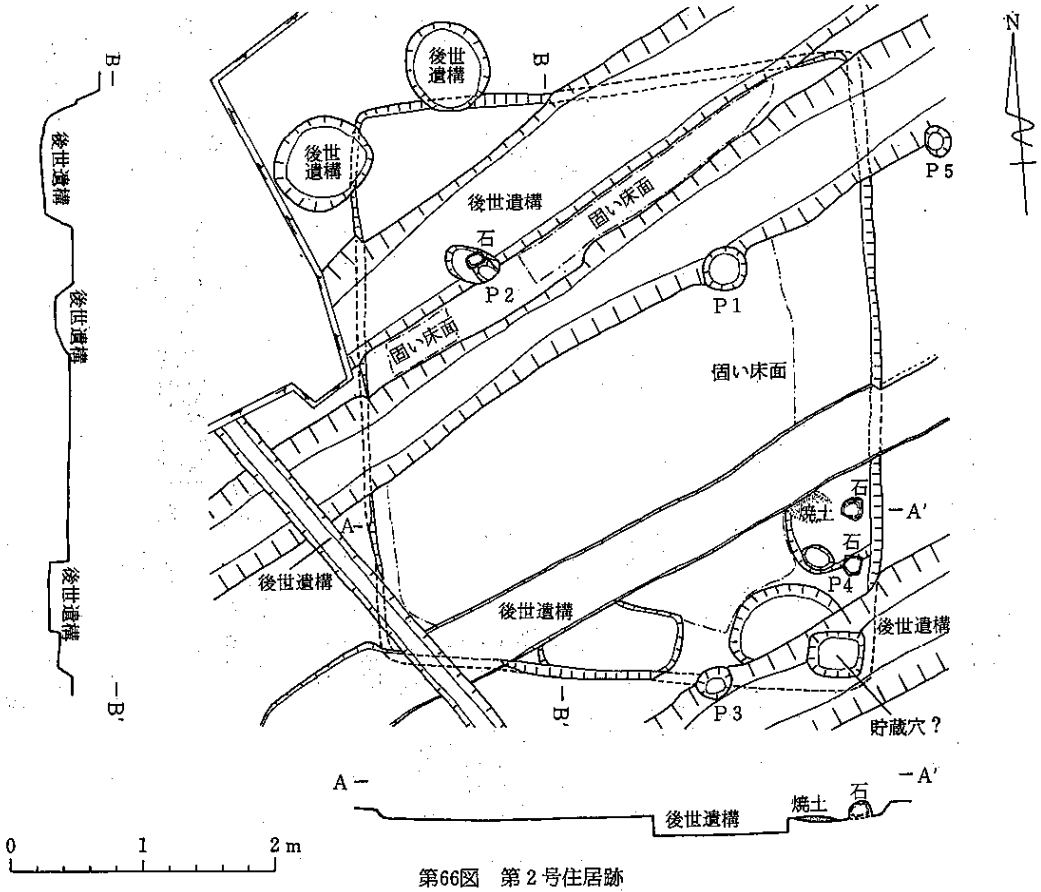
第65図　第１号住居跡

個体分の土師器（坏）及びカメ1点が出土した。このうち土師器坏5点に墨書があり、そのうち3点は「丈」「上」「三」の文字が読みとれた。これはいわゆる貯蔵穴と考えられる。また住居跡の南西隅と北東隅になだらかな勾配をもつ落ち込みがみられた。

遺物は、全体的に出土するが、とくにカマド周辺および貯蔵穴に多い。土師器（坏、高台付坏、甕）、須恵器（坏、甕）、鉄製刀子などがある。なお住居跡中央に須恵器甕が下半部まとまって出土した。

第2号住居跡（第66図）

住居跡は後世の溝によって東西に切られているが、ほぼ当初の形状を推定することができた。東西3.9m×南北4.5m、床面積16.6㎡でほぼ長方形の住居跡である。周溝はない。現存の壁の高さは、北壁で17㎝、南壁で5㎝である。床面は、壁近くは軟らかいが、壁から20～60㎝離れた住居跡の中央部は突き固めたように堅くしまっている。柱穴は5個検出された（ピット1～5）。30㎝前後の大きさで、深さは70㎝である。



第66図　第２号住居跡

東壁南寄りにカマドと思われる掘り込みがみられ、焼土が一面に分布していた。掘り込みの中央および南端に河原石が二個認められた。削平が著しく、また南側が後世の溝によって切られているので、カマドの基部および煙道は検出できなかった。カマドの右脇一住居跡の東南隅には、長径40㎝、短径35㎝、深さ50㎝の隅丸方形の穴があり、中から木炭とともに土師器（坏）片が数点出土した。いわゆる貯蔵穴と思われる。また住居の南壁中央にそって、長径105㎝、短径55㎝、深さ8～8㎝の楕円形のなだらかな落ち込みがみられた。

遺物は、全体的に出土するが、とくに住居跡東側に多い。土師器（坏、甕）、須恵器（甕）、鉄製紡錘車などがある。

第3号住居跡

第1号住居跡の北方約7mのところで検出された。後世の削平のため、壁がほとんどこわされ住居跡の埋土の厚さも1～3㎝と浅いため、床面を重視してプランの検出を行なった。残っている床面は突き固められたように堅くしまっていたため検出は容易であった。確認できた床面の範囲は、東西2.0m、南北2.2mでほぼ方形を示す。第1号、第2号住居跡にみる如く、壁近くの床面が軟かいことを考えれば、実際の住居跡の範囲はさらに広がると思われる。周溝は認められない。柱穴は、残っている床面の範囲に1個、その西側に3個の計4個が発見された。そのうち一つでは、掘り方と本来の柱穴との区別が確認できた。

東壁中央付近にカマドと思われる浅い掘り込みおよび焼土の分布がみられる。カマドの基部は削中のため検出できない。煙道の下面が僅かに残っている。煙道の幅は25㎝、長さは40㎝で、その先端に土師器（坏）片が3点みられた。カマドの右脇、住居跡の東南隅と思われる位置に、長径75㎝、短径60㎝、深さ20㎝の楕円形の穴があり、中から木炭、灰とともに土師器（坏）片が13点出土した。貯蔵穴と思われる。

遺物は非常に少なく、貯蔵穴とカマド付近から土師器（坏、甕）が出土したのが主である。

第4号住居跡

第1号住居跡の北方約13mのところにある。直径150㎝、深さ50㎝前後の円形のピット群や後世の削平によって住居跡はほとんどこわされ、床面が断片的に検出できただけである。残っている床面は、他の住居跡と同様に堅くしまっている。住居跡の形状は明らかでないが、南壁の一部が1.9mの長さで検出された。現存の壁の高さは5㎝で黄褐色粘土層を掘り込んでいる。周溝は認められない。柱穴と推定されるものが5個検出された。

住居跡の中央と見られる付近に径20㎝ほどの焼土が分布し、床面も焼けていた。炉の可

能性もある。また住居跡東壁南寄りと思われる位置に焼土がまとまってあり、カマドの可能性がある。ただし両方とも破壊が著しいため、炉ないしカマドと断定することはできない。なお貯蔵穴と思われる穴は認められなかった。

遺物は非常に少なく、断片的で床面から土師器（坏）片が7点出土したのみである。

第5号住居跡

第1号住居跡の南西方82m、第8号住居跡のすぐ南にある。耕作によって壁がほとんどこわされ、固くしまった床面が断片的に検出できただけである。住居跡の形状は明らかでないが、住居跡の南西側に、南北方向に長さ70㎝ほどの浅い落ち込みが認められ、あるいは壁の可能性をもつ。周溝は認められない。柱穴と推定されるピットが2個、残存の床面の範囲より検出された。そのうち一つは、掘り方と本来の柱穴との区別が確認できた。

床面の分布する範囲の東端中央において、長径90㎝、短径70㎝の楕円形の浅い落ち込みをもつ焼土が認められた。カマド跡かもしれない。貯蔵穴と思われるピットは認められなかった。

遺物は非常に少なく、焼土南側の床面直上から土師器甕片3点が出土したのみである。

第6号住居跡

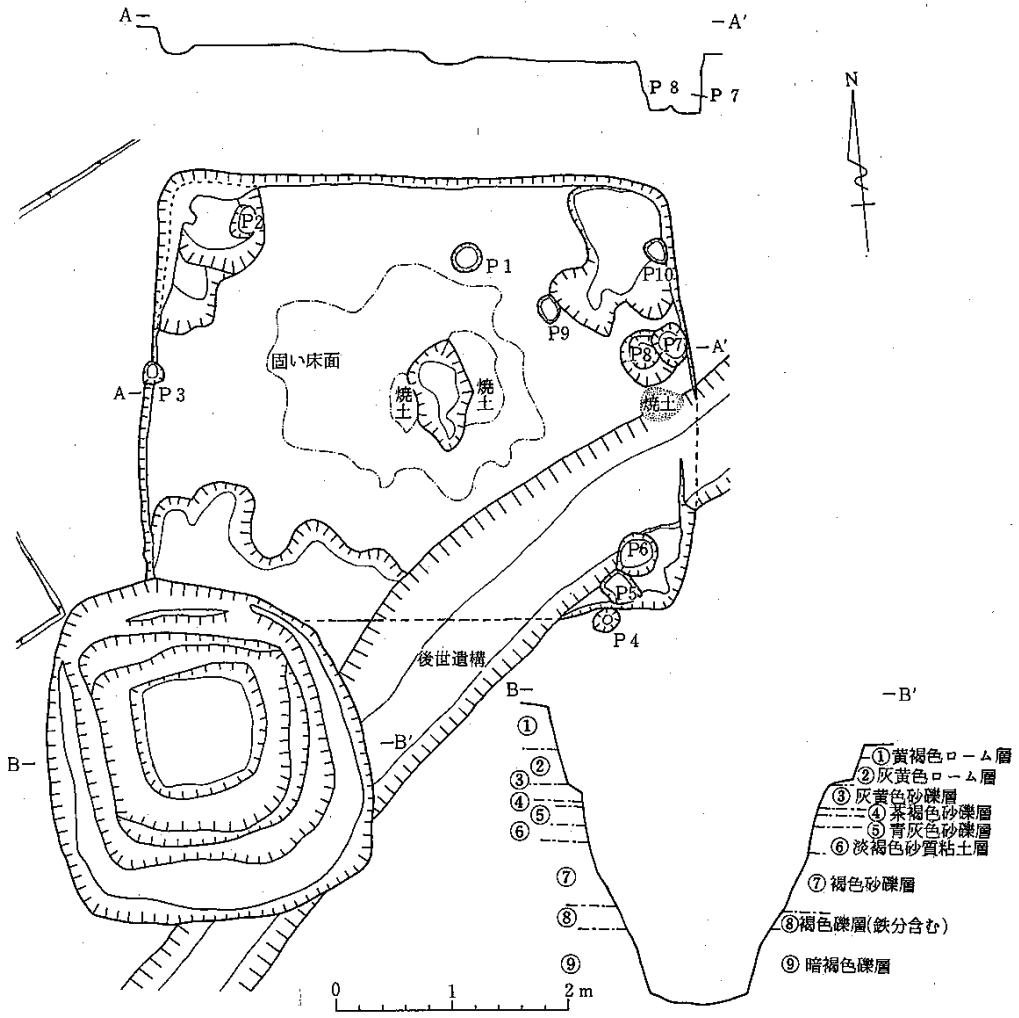
第1号住居跡の西方72m、第8号住居跡の東方12mの地点にある。耕作による削平および住居跡の中央南寄りを通る後世の溝によって、壁がほとんどこわされ、床面が断片的に検出できただけである。残っている床面は、突き固められた様に堅くしまっており、他の面との区別は容易である。周溝は認められない。住居跡の形状は不明である。

床面の分布する範囲の東端に、長径45㎝、短径42㎝、深さ5㎝の楕円形の浅い掘り込みがあり、その上が焼けていた。カマド跡かもしれない。柱穴は、焼土のすぐ南側に一個検出された。貯蔵穴は検出できなかった。

遺物が発見されたのは焼土付近からで、土師器（坏・甕）10片ほどである。

第7号住居跡

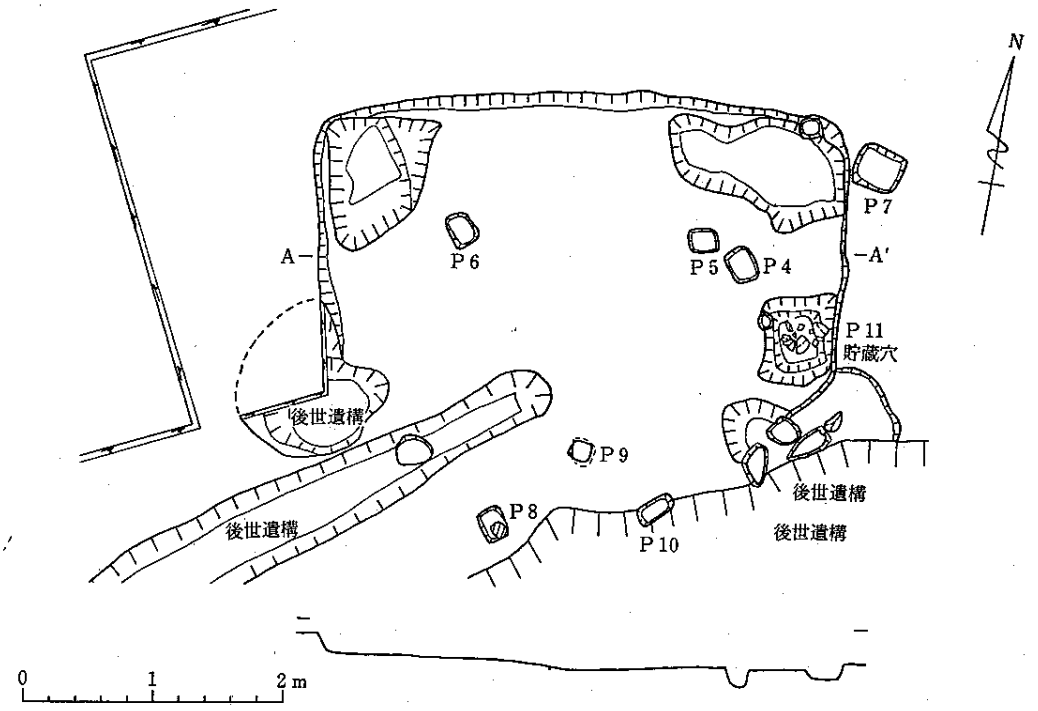
南側が一部新しい溝と後述する井戸によって切られているが、そのほかは良好に残っている。東西4.7m、南北3.8m、床面積約16.3㎡で、東西に長いほぼ長方形の住居跡である。周溝は認められない。現存の壁の高さは、北壁で31㎝、南壁で20㎝である。床面からの立ち上りは、ほぼ垂直に近い。住居跡中央に、径50×90㎝の楕円形の浅い掘り込みがあり、さらにその周囲の床面が赤く焼け、堅くなっていた。炉の可能性をもつ。床面は、中央部の約2m×1.8mの範囲がとくに突き固められたように堅くなっている。壁近くは軟かい。柱穴は10個検出された。



第67図　第７号住居跡・井戸状遺構

東壁東寄りに、長径40cmの楕円形に焼土が分布していた。南側は溝で切断されているため検出できなかった。カマドに関係するものかも知れない。さらにその南側一住居跡東南隅と思われる位置に、径70cm、深さ20cmの楕円形に近い掘り込みが検出された。中から少量の土師器片が出土した。貯蔵穴と思われる。また住居跡の各隅には、長径70～130cmのゆるやかな落ち込みが認められた。

遺物は、住居跡の南西および貯蔵穴と思われるピットの中より少量出土した。土師器坏、甕、須恵器甕、鉄製刀子などである。



第68図　第８号住居跡

第8号住居跡（第68図）

第7号住居の東北方12mのところにある。住居跡は、南側が新しい溝2本によって切られているため、全体の形状は確認できなかった。現存する大きさは、北壁4.1m、東壁2.0m、西壁1.8mで、方形ないし長方形に近い形を示すものと思われる。周溝は認められない。現存の壁の高さは、北壁で21㎝、東壁で7㎝、西壁で12㎝で、立ち上りはほぼ垂直に近い。床面は、壁近くが軟かく、カマド付近が突き固められたように堅くしまっている。柱穴は11個検出されており(ピット1～11)、そのうちピット8では掘り方と本来の柱穴との区別が確認できた。

東壁南寄りに、粘土構築によるカマドの基部が部分的に残り、その前面は床面より10㎝程低く掘りこまれていた。煙道は検出できなかった。カマドの北脇に東西54㎝、南北84㎝、深さ24㎝の長方形の掘り込みがあり、その中から土師器（坏）片が10点ほど発見された。貯蔵穴と思われる。住居跡の北東隅と北西隅には、長径100～140㎝、短径100㎝の浅い落ち込みが検出された。なお住居跡の東壁の外側に添って東西110㎝、南北140㎝程の範囲で、床面と同様に堅くしまっている土の面が認められた。その性格は不明である。

遺物は、住居跡の東側とくにカマド、貯蔵穴、北東隅の落ち込みに多く発見された。土

師器坏がほとんどで、そのほかに土師器甕、須恵器坏も、2、3点出土している。

井戸状遺構（第67図）

第7号住居跡の東西隅を切って検出された。南北3.0m×東西2.9mの隅丸方形の平面形をもつ。遺構確認面は、第7号住居跡と同じく黄褐色ローム層面で、深さが2.5mある。壁の傾斜は約70度で、上端から0.7mと1.9mのところに段がつく。内部は、黒褐色の砂質土と褐色の砂礫層がほぼ互層になってつまっており、土師器、須恵器の破片が80片ほど出土した。内部施設は検出できなかった。

本遺構は、形状から井戸の掘り方と考えられる。年代は不明である。須恵器、土師器の破片をふくむが、後世の造物の混入はないので、住居跡の年代に近いものではなかろうか。

柱穴群遺構

調査区北東隅に、東西18×南北27mの範囲で300個以上のピットが検出された。ピット内からは、「開元通宝」、「元豊通宝」、「洪武通宝」、「永楽通宝」の中国銭4枚、および鉄製刀子2点が発見された。中世末から近世の建物跡に関係する遺構と考えられる。現在、柱穴の配置関係を検討中のため、詳細は本報告にゆずる。

(4) 出土遺物（第69・70図）

家老内遺跡からは、土師器、須恵器、鉄製品、古銭など整理箱にして約14箱分の遺物が出土している。まだ整理が進んでいないので、ここでは第1号住居跡と第8号住居跡の遺物を中心に概略をのべる。

第1号住居跡の出土遺物（第69図）

各住居跡の中で遺物がもっとも多く、整備箱にして2箱ほど出土した。そのうち、カマドおよび貯蔵穴内からまとまって出土した土師器坏についてのべる。

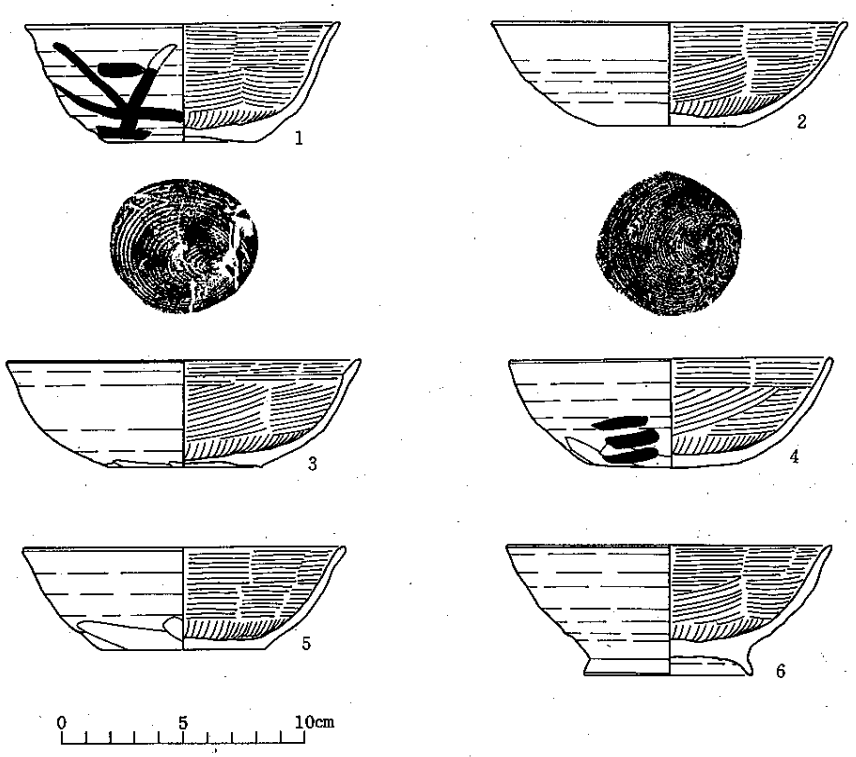
坏は、すべてロクロで成形され、内面はヘラミガキと黒色処理が行われている。器形から三種にわけられる。

ａ類（1、2）

口径に比して器高が比較的高いものである。体部はやや内彎気味で、口縁が外反する。底部には回転糸切り痕が残り、外面の再調整は行なわれない。なお1には体部に「天」の墨書が読みとれる。

ｂ類（3～5）

口径に比して器高が比較的低いものである。体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや内傾している。体部下半と底部は、ヘラケズリされている。4の体部に2個の文字があり、1個は「三」とよめるが、他は不明である。



第69図　第１号住居出土・土師器坏

ｃ類（6）

坏に高台が付いているものである。体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや内傾する。底面は回転糸切りで切りはなし、軽いヘラケズリを行ない高台をつけ、ロクロ調整している。

以上のべた土師器坏の各類は個体数が少ないので、時期的な差によるのかあるいは土器製作時における手順の相異によるのかは断定できない。

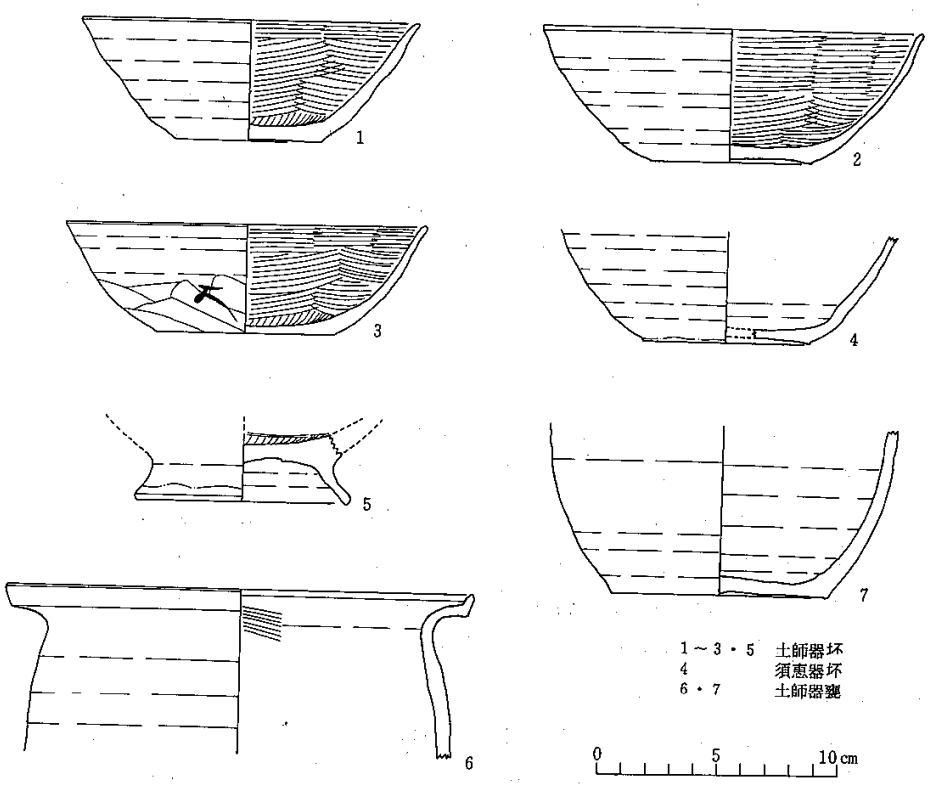
第8号住居跡の出土遺物（第70図）

第8号住居跡の埋土は、Ⅱａ～Ⅳ層の三層に分れるが、ここでは床面直上の層Ⅳ層とⅢ層（Ⅳ層は部分的に堆積）の遺物について概略をのべる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺など計125片で、うち確認できた土器の個体数は13点である。

(1)　土師器

坏　すべてロクロにより調整されたもので、6点ある。坏は第1号住居跡の場合と同じ



第70図　第８号住居・出土土器

く器形から三類に分けることができる。

ａ類（1、2）

2点ある。1は体部がやや直線的に立ち上る。

ｂ類（3）

2点ある。3は体部と底部に墨書文字がある。体部のものは「大」と読めるが、底部は損消のため不明である。

ｃ類（5）

1点のみ。底部と高台の一部が残っているだけである。高台部はやや高く、ロクロ調整がみられる。

甕（6、7）

カマド内から2点、貯蔵穴から1点の計3点出土している。6はややふくらむ体部と外反し上部に稜のある口縁をもつ。内外面共にロクロ調整である。7はやや胴張りの体部

をもつものである。器面の調整は不明である。

胎土は、いずれも石英・砂粒を多く含み、粗く暗褐色から赤褐色を呈する。

(2) 須恵器

坏（4）

2点ある。4は体部が直線的に立ち上り、内外面共にロクロ痕が明瞭である。底部は回転糸切り痕を残している。再調整はない。

壺

壺肩部の小破片が1点ある。

甕

体部破片が1点ある。外面に平行線状の叩き目がある。

以上、第1号住居跡と第8号住居跡の出土遺物の概略をのべた。これらの土器群のうち土師器坏・甕は、東北地方土師器編年上、ほぼ「表杉ノ入式」に比定でき、須恵器も共伴関係からみて土師器とほぼ並行する時期のものと考えられる。時期的には平安時代にあたるものであろう。第1号・8号住居跡以外の住居跡および井戸状遺構の出土遺物も、これと大差ない時期のものと思われる。

6 ま と め

(1) 家老内遺跡は平安時代、および中世末から近世の二時期に営まれた集落跡である。

(2) 平安時代の遺構として、住居跡が部分的なものも含めて8軒、井戸状遺構が1基発見された。なお遺跡の中心は調査区のさらに西側にあると推定される。

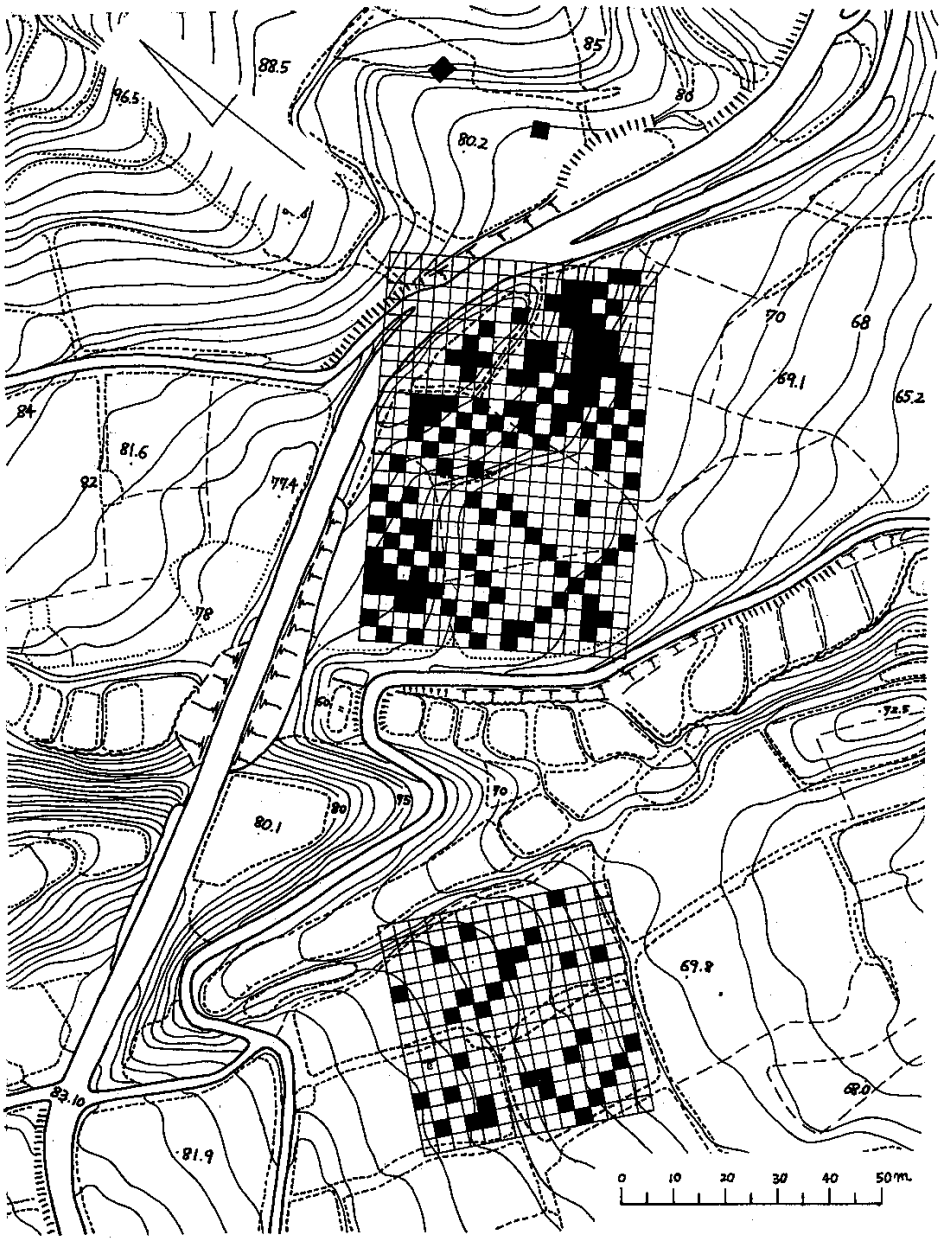
(3) 平安時代の住居跡、井戸状遺構からは、土師器・須恵器・鉄製刀子・鉄製紡錘車などが発見された。この時期の人々の生活を知る上で、重要な資料となろう。

(4) 中世末から近世にかけての建物跡に関係すると考えられる柱穴群遺構が発見された。

参考文献　（佐藤庄一）

後藤勝彦（1968）：「白石市家老内・引桜遺跡」『宮城県文化財調査報告書第17集』

（十）西原（にしはら）遺跡



第71図　地形図・グリット配置図

西　原　遺　跡

1　遺跡所在地

宮城県柴田郡村田町塩内字西原

2　調査期日

昭和46年4月6日～5月3日

3　調査主体者

宮城県教育委員会、日本道路公団

4　調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

調査係長　志間泰治
技術主査　氏家和典
技　　師　藤沼邦彦、白鳥良一
嘱　　託　岩渕康治、佐藤庄一、加藤道男、丹羽茂

5　調査の概要

(1)　遺跡の立地（第71図）

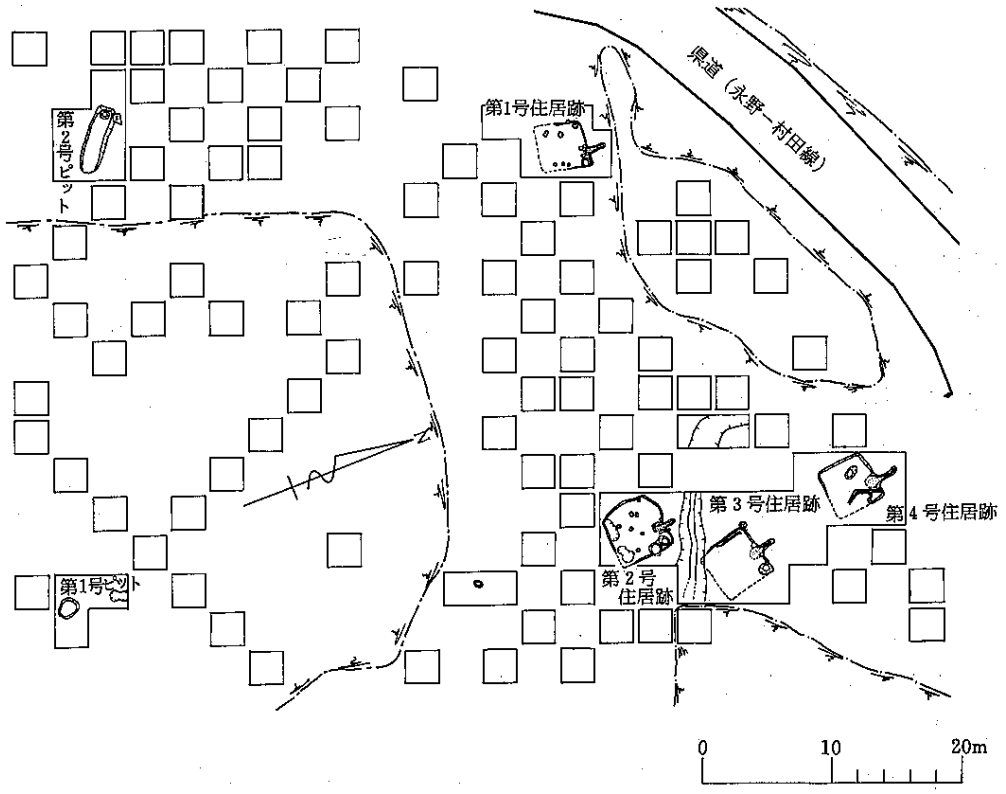
蔵王山麓に開けた宮・円田盆地の東側に南北に延びる愛宕山丘陵(仮称)は、柴田郡村田町と刈田郡蔵王町の境をなしている。

西原遺跡は、本丘陵の東側で、県道村田一永野線沿いにあり、東南方向へ傾く緩斜面上に形成されている。遺跡の標高は約80m、村田盆地との比高、約50mで、かなりの高所に位置する。遺跡は中央部を東西にはしる段によって、上下二段に分かれ、下段斜面には埋没谷が東西にのびている。遺跡は現在畑地になっており、縄文土器片や土師器片の散布がみられる。周辺の遺跡をあげると、愛宕山丘陵の東側では、縄文土器や弥生土器の散布地が知られており、また愛宕丘陵の西側には、昨年度の調査によって、その内容が明らかになった蔵王町大橋遺跡、赤鬼上遺跡などをはじめ、古墳時代、歴史時代の集落跡があり、愛宕山丘陵を中心とする地域の歴史的環境の重要性を示している。

(2)　調査経過

道路敷内の緩傾斜面に75×51mの範囲にわたりグリットを設定し、1,180㎡を発掘した。

調査区域は中央部を東西にはしる高さ約1mの段によって斜面が上段と下段に分けられている。調査の結果、上段の斜面からは、表土下約20㎝のローム面で平安時代の竪穴住居跡が4軒発見された。また下段斜面では、木炭や焼土を包含したピットが2個検出されたほか、表土とロームとの間にみられたうすい黒色土層から少量の縄文土器片が発見された。



第72図　遺構配置図

一方、この緩斜面の、沢をへだてた南側の平坦面からも、土師器片が表採されたので、この地点にも48×45mの範囲にわたりグリッドを設定し99㎡を発掘したが、少量の縄文土器片や土師器を採集しただけで遺構は検出されなかった。さらに、県道をはさんで北側の傾斜面にも3×3mと3×4mのトレンチを二本設定して調査したが、遺構や遺物はまったく検出されなかった。

(3)　発見遺構（第72図）

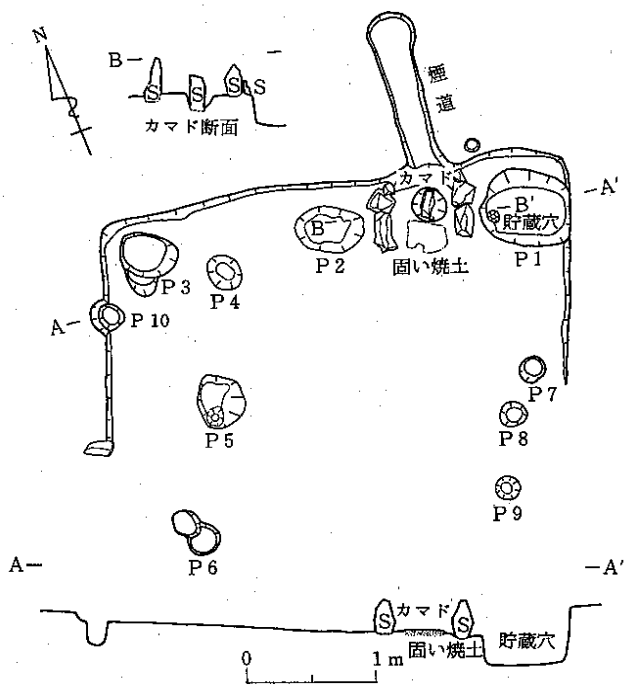
第1号住居跡（第73図）

緩斜面上に構築されており、表土が浅いため南半分が耕作で削平され、全容は明らかでない。

北壁3.7m、東壁、西壁の残存長は、各々2.9m、1.9mで隅丸方形の平面プランを呈するものとみられる。残存する壁の高さは、遺存状況が最も良い北壁で約30㎝ありやや外傾している。床は黄褐色ローム面で、埋土に比し若干固い程度である。住居跡中央部付近の床面直上に、2.2×0.8m程度の範囲にわたり、炭化物の多い層が見られ、多量の土器片が含

まれていた。

ピットは10個（P1～10）検出された。P1を除くピットの埋土は、いずれも木炭、焼土を少し含むサラッとした感じの黒色土である。このうち、ピットの形態、位置などから、柱穴と思われるものはP5～8、10で、そのうちP8、10は主柱穴と思われる。これらのピットはいずれも直径20cm前後、深さ30cm前後の円形で、ほぼ垂直に掘り込まれている。周溝はない。



第73図　第１号住居跡

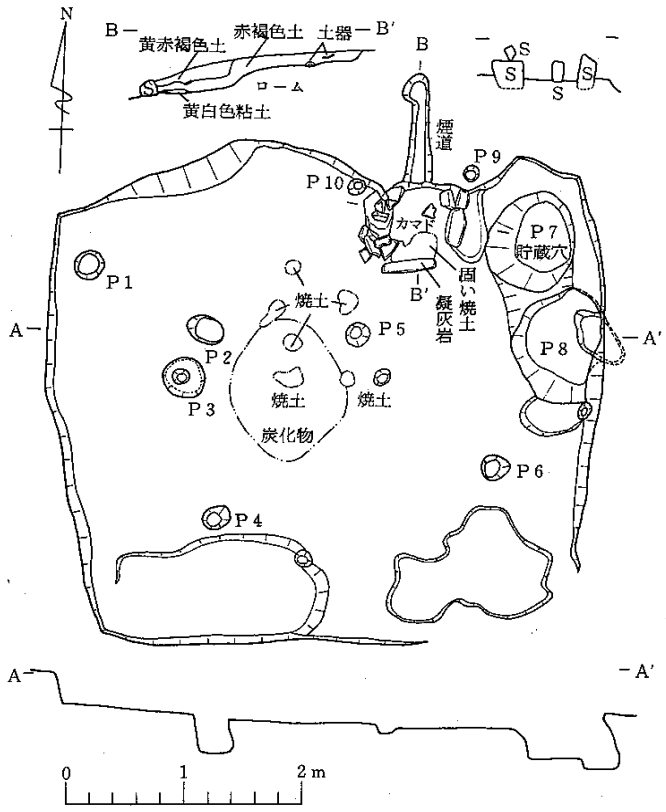
カマドは、北壁やや東寄りにある。基部の両裾に3個ずつ切石をならべてあった。カマド内部に直径30cm、深さ10cmの円い掘り込みがあり、扁平な石が立てられていた。支脚としての役割を果したものと考えられる。煙道は長さ1.3m、巾25cmで、地山を15cmほど丸底状に掘り込み、その上を粘土で丸く被覆していた。横断面はほぼ円形である。周壁は赤く焼けている。煙道の先端（煙出部）には、土師器坏が2個体分検出されたが、特に焼けた痕跡は見られなかった。カマドの周囲には、完形の甕を含む多くの土師器片が出土した。

貯蔵穴は、カマドの東側にあり、長径70cm、短径60cm、深さ20cm前後の楕円形を呈している。底面はほぼ平坦である。埋土は、上層は住居跡内の埋土と同じであるが、下層は粒子が比較的粗く、固くしまった暗黄褐色土である。内部から遺物は発見されなかった。

出土遺物は内黒の土師器坏が最も多い。その他、土師器甕が数個体分、須恵器甕が2個体分出土した。とくにカマド周辺を中心とした床面から多く出土した。

第2号住居跡（第74図）

住居跡東南隅が耕作により、一部削平されていたが、北壁4.5m、東壁4.2m、南壁4.0m、西壁3.9m程の不整方形で、主軸方向は、ほぼ磁北に一致する。壁の遺存状況は、東南隅を除き、全体的に良好である。現存の壁の高さは、北西隅で40cmで、壁はやや外傾する。床は黄褐色ローム面で、西から東へかけて微傾している。床面は特につき固められた



第47図　第２号住居跡

様な形跡は見られない。床面からの遺物の出土は少なく、床面より数cm高いうめ土中での出土量が最も多かった。

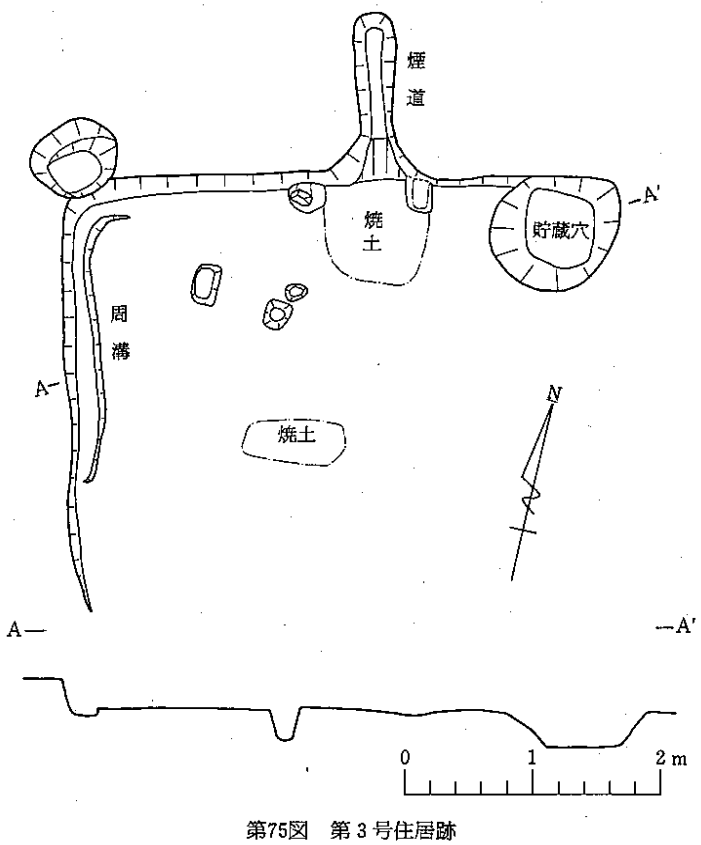
ピットは、住居跡内部で10個(P1～10)ある。この内、P7は位置、形態などから貯蔵穴と見られ、P8は袋状に掘り込まれ、底面付近から土師器が若干出土している。P2､3､4､6は埋土、形態、深さなどが類似し、柱穴と見られる。直径は、ほぼ25～40cmの円形ないし楕円形、深さ30cm前後で、いずれも、ほぼ垂直に掘り込まれているが、P3はやや外傾して掘り込まれている。掘り方と本来の柱穴とがP3において認められた。ピット内からの遺物の出土はほとんどない。周溝は検出されなかった。

カマドの遺存状況はきわめて良好で、30～40cmの大きな切石を壁に接して対置し、各々に径10cm前後の自然礫ないし切石を数個ずつ配している。内部に一辺10cm、高さ20cm程の切石が見られたが、これは支脚と思われる。東側の石の脇に、カマドを被覆していたと見られる粘土の残存が認められた。また焚口部において、カマドの方向に対し横方向に、長さ45cm、巾10cmの真赤に焼けた凝灰岩の切石が配置されている。

カマド内部には、径35cm位の方形の範囲に、焼けて固くなっている部分が見られた。煙道は長さ1m、巾15cmで北に延びている。掘り込みは10cm程度で底は丸い。周壁は赤く焼けて固くなっている。煙道のつけ根部分両脇に2個の小ピットが検出された。煙出し部分は、径20cm位の円形で、内部に2個体分の土師器坏破片が検出された。

貯蔵穴は、カマドの東側にあり、長径90cm、短径70cm、深さ25cm前後の楕円形で、底面はほぼ平坦である。埋土は3層に分れる。底面より、5～6個体分のまとまった土器片が出土している。

出土遺物は、内黒の土師器坏が最も多く、土師器甕、須恵器壺、須恵器甕が若干、刀子などの鉄製品2点および砥石が出土した。



第75図　第３号住居跡

第3号住居跡(第75図)

耕作によって東南部が大きく削平されているため、住居跡の正確な形状はわからないが、北壁は約4.4m、西壁は現存長約3.5mの隅丸方形である。壁の立ち上がりは、急傾斜をなし、現存している壁の高さは、最も高い西北隅で40cmである。

床はローム面で固くしまって平坦であった。また、カマド前面より住居跡中央部にかけ、床面直上に、1.4×1.6mの楕円形の範囲で木炭の散布が見られた。また、これと接して80×35cmの範囲に焼土が検出された。遺物の出土はカマド周辺に多くみられた。

ピットは、住居跡西北部で直径、深さとも20cm前後のピットが2個、その付近で20×30cmの楕円形で、深さ20cmのピットが1個検出された。しかし、これは、必ずしも埋土が住居跡内の埋土と合致せず、柱穴と見るのは難しい。また住居跡西北隅の輪郭に外接する様な形で、径70cm、深さ40cmの底面平坦なピットが検出されているが、これは住居跡に付属するピットではない。従って、ここでは、4号住居跡の場合と同じく柱穴はなかったと見られる。

周溝は、住居跡西辺壁際で、長さ2.3m、巾20cm前後、深さ5～6cmのものが検出されている。他の部分では検出されなかった。

カマドは、住居跡北辺中央部に沿って、80×80cmの範囲に焼土の散布が見られ、その両

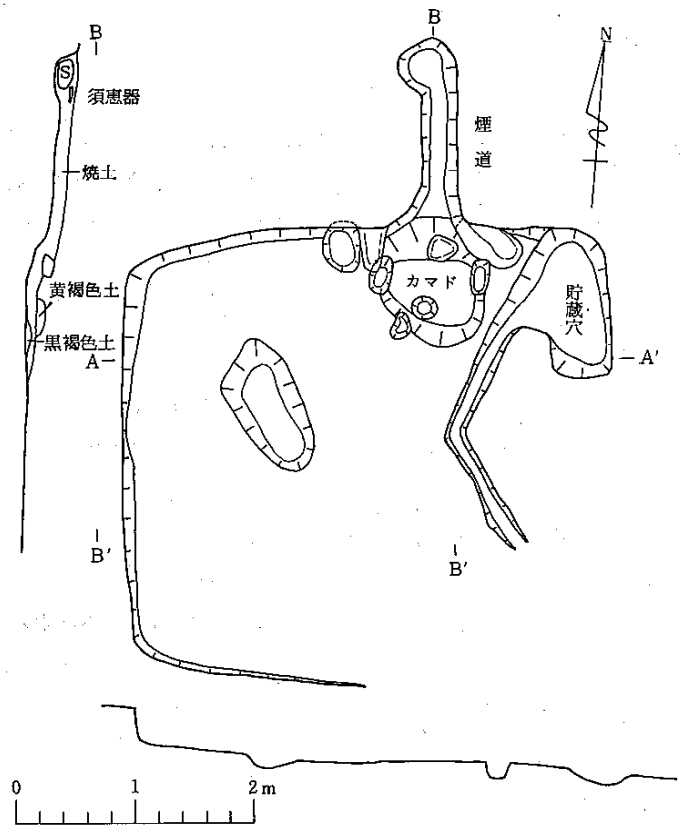
袖に粘土が検出され、その粘土の上に礫が検出された。煙道は、長さ1.3m、巾20～30cm、深さ15cm前後で、半円形にロームを掘り込んでおり、中に焼土が堆積していた。煙出し部分は他の例のようなふくらみがない。

貯蔵穴は住居跡北東隅で検出された。1.1×0.9mの楕円形で、深さ25cm前後で、底面平坦である。断面はスリバチ形を呈する。貯蔵穴上縁南側で、やや貯蔵穴におちこむ様な形で須恵器や土師器の比較的大きな破片が集中的に検出されたが、貯蔵穴底面付近では遺物の検出は見られなかった。

出土遺物は内黒土師器坏が主体で、土師器甕、須恵器が若干、鉄製品が1点出土した。カマドの周辺から、クルミの残欠が少量出土している。

第4号住居跡（第76図）

耕作のため、東南隅が削平されているが、南北4.0m、東西4.1mの隅丸方形で、住居跡軸方向は、ほぼ磁北に一致する。現存する壁面の高さは、住居跡西北部で40cmある。床面はしまったローム面である。



第76図　第４号住居跡

柱穴と見られるものは、住居跡内外共、検出しやすい状況にあったにも拘らず、全く検出されなかった。

周溝は検出されなかった。貯蔵穴の西側部分が開いて、「く」の字形に曲って、住居跡東南部方向にむいた、巾15～20cm、深さ10～15cmの溝が床面を切って掘りこまれているが、通水溝的な用途ではないかとも思われる。

カマドは住居跡北辺東寄りに構築されている。長さ1.7m、巾30cmのほぼ磁北に突き出た煙道をもつ。火床部両脇に粘土の残存が見ら

れるが、芯となる石は見当たらない。ただ粘土部分に接して、長径30㎝、短径20㎝、深さ10～15㎝のピットが対置する様に2個検出されたが、これは芯となった石の抜き取り穴と思われる。煙道は半円状にロームを掘り込んでいる。煙出し部には、長径30㎝、短径20㎝くらいの楕円形の石と須恵器破片が検出された。

貯蔵穴はカマド東隣りで検出された。長径1.3m、短径50㎝前後、深さは20㎝前後の楕円形で底面平坦である。貯蔵穴の西側上縁で、土師器、須恵器の大きな破片が検出されたが、貯蔵穴内部、特に、底面付近では全く遺物が検出されなかった。

出土遺物は内黒の土師器坏が主体で、須恵器甕が若干ある。内黒の土師器坏中に、墨書土器が1点発見された。二字あり、一字は「千」で、もう一字は読解できない。鉄製品も一点出土している。

第1号ピット－炉穴様ピット－（第77図）

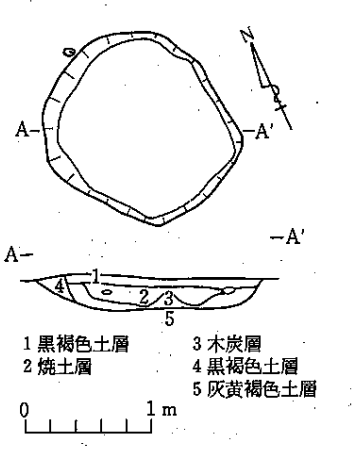
発掘区域の東南隅で表土下20～25㎝の暗褐色砂礫土層の面で検出された。径1.5mくらいの不整円形のピットで、深さ約25㎝、底面平坦なピットである。内部に焼土と炭が層をなして、濃密に堆積していた。内部からは、無文土器片1片、頁岩製フレイク2点が検出された。時期は不詳であるが、他のグリッドで、3層から、条痕土器などが出土しているので、この時期の、炉穴様のものかも知れない。なお、このピットの北側上縁で、凹石様の礫が検出されている。

第2号ピット－木炭堆積ピット－（第78図）

発掘地域の西南部で検出された。長辺5.2m、短辺1.5mの隅丸長方形で、長軸北西方向のピットである。深さは30㎝前後で、底面はほぼ平坦なピットである。内部には炭と焼土とが互層をなして堆積していた。遺物の出土はなく、時期も機能も不明である。

その他

2号住居跡と3号住居跡との間に、上面での巾1.5m、深さ50㎝で、断面V字形、底面にやや凹凸があり、北西方向から東南方向へ傾斜をもつ溝が検出された。内部からは、土師器、須恵器なども検出されたが、それと共にガラスなどの現代の遺物も検出されたので、この溝はごく新しいものと考えたい。

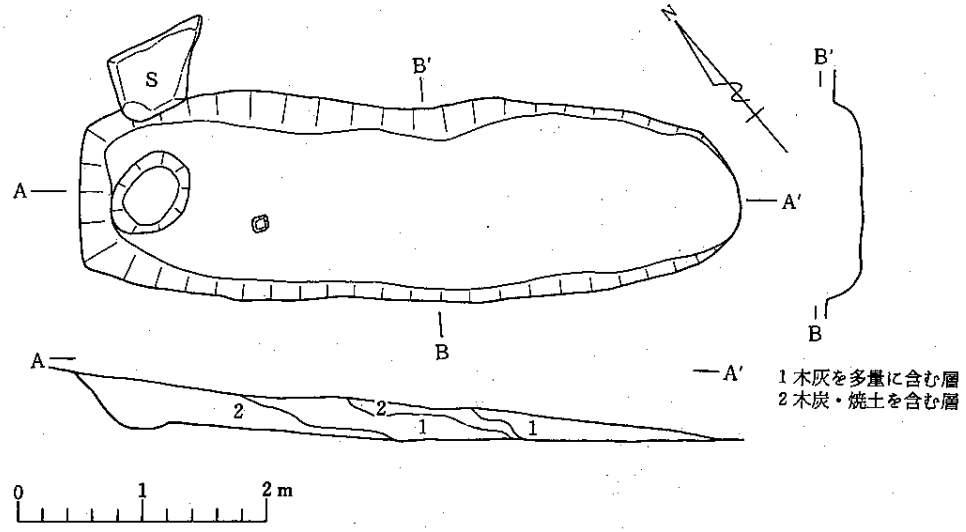


第77図　第１号ピット

(6) 出土遺物（第79図）

土師器

出土遺物の9割以上は土師器である。その中でも器形としては坏が最も多い。整理が進んでいないので、概述する。



第78図　第２号ピット

(a)坏：すべてロクロ使用によって製作され、内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。底部は平底、体部は若干内彎気味である。底部の切り離しは、回転糸切りと回転ヘラ切りのいずれかによる。その後、手持ちおよび回転ヘラケズリが施されるものがある。手持ちの場合の方が多い。体部外面は下半部において、回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリのいずれかが施されているが、上半部では、殆んど再調整はない。内面のミガキの状況はほぼ一様で、底面においては放射状に、上半部では口縁に平行のミガキが施されている。二字の墨書の坏が一点出土している。一字は逆位の「千」、もう一字は解読できない。

(b)甕：各住居跡のカマド付近から出土しているが、完形のものは少ない。⑦は外反する口縁をもち、体部上半から下半にかけ縦方向のヘラケズリがあり、口縁部はロクロによる成形である。

須恵器

各住居跡から少しづつ出土しているが、完形品はない。器形は甕が殆んどで、他には長頸壺が一点出土しているのみである。

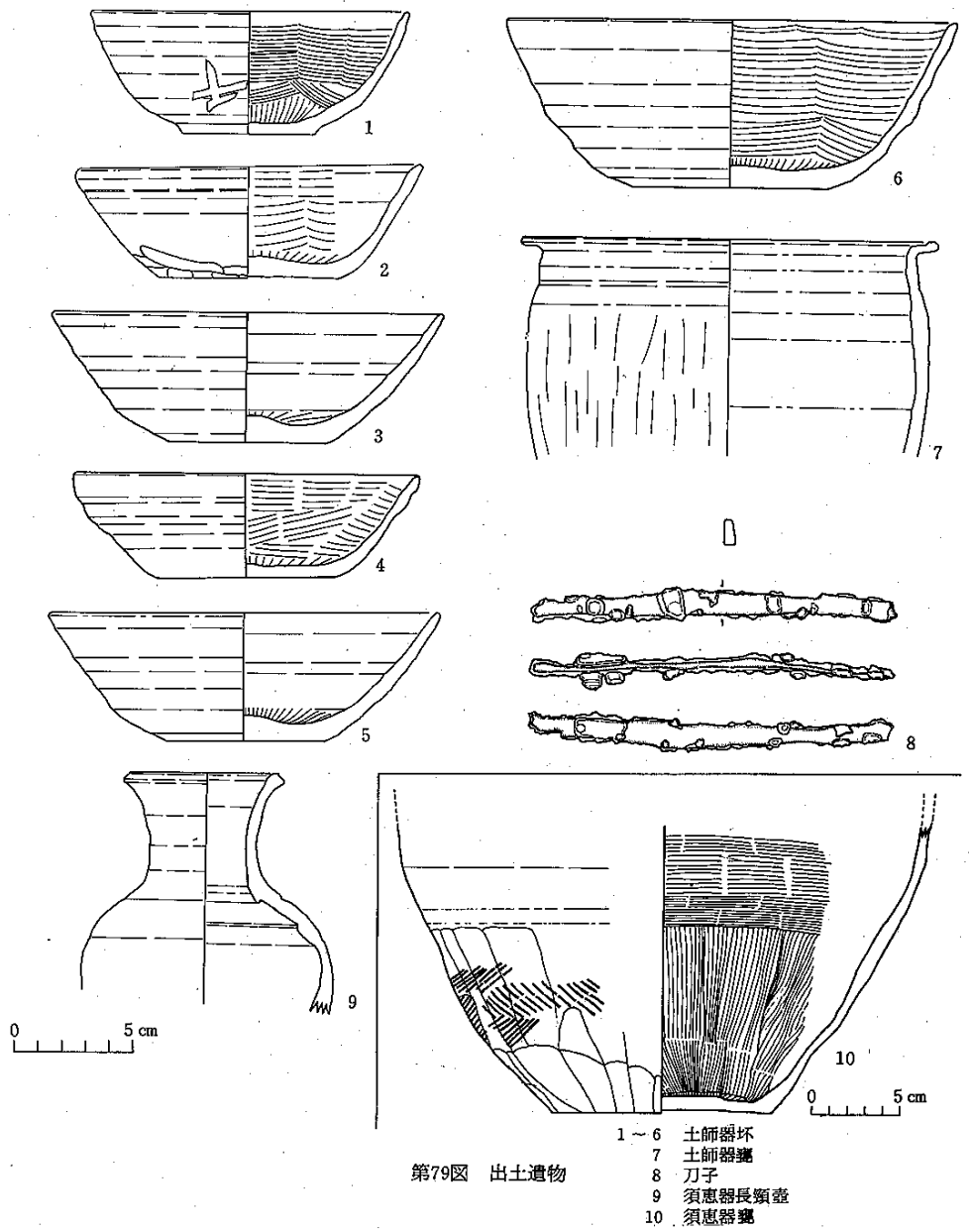
(a)甕：殆んどが体部ないし底部破片である。体部外面にはけ目のあるものが多い。

(b)長頸壺：体部下半および底部を欠く。体部と口頸部の間に、接合痕がある。

鉄器・砥石

鉄器は一号住居跡を除く各住居跡から1～2点ずつ出土している。うち刀子が2点で、あとは用途不明である。また、泥岩質の砥石が1点あり、擦痕がみとめられる。

その他に縄文時代の遺物も若干ある。土器は条痕文か縄文が施されている。石器はスク



第79図　出土遺物

1～6　土師器坏
7　土師器甕
8　刀子
9　須恵器長頸壺
10　須恵器甕

レーパー1点、フレーク若干が出土している。

7 ま と め

(1)　西原遺跡は、愛宕山丘陵の東側緩斜面上に形成された平安時代の集落跡であり、愛宕山

丘陵を中心とした周辺地帯に存在するこの時代の集落群の一つである。

(2)　各住居跡はいずれも隅丸方形で規模や構造が類似している。いずれも北壁に煙道を持つカマドを有し、北東隅にはいわゆる貯蔵穴をもつ。しかし、柱穴の有無、カマドの構造のちがいにより、第1、第2号住居跡と、第3、第4号住居跡2つのグループに分けることができる。

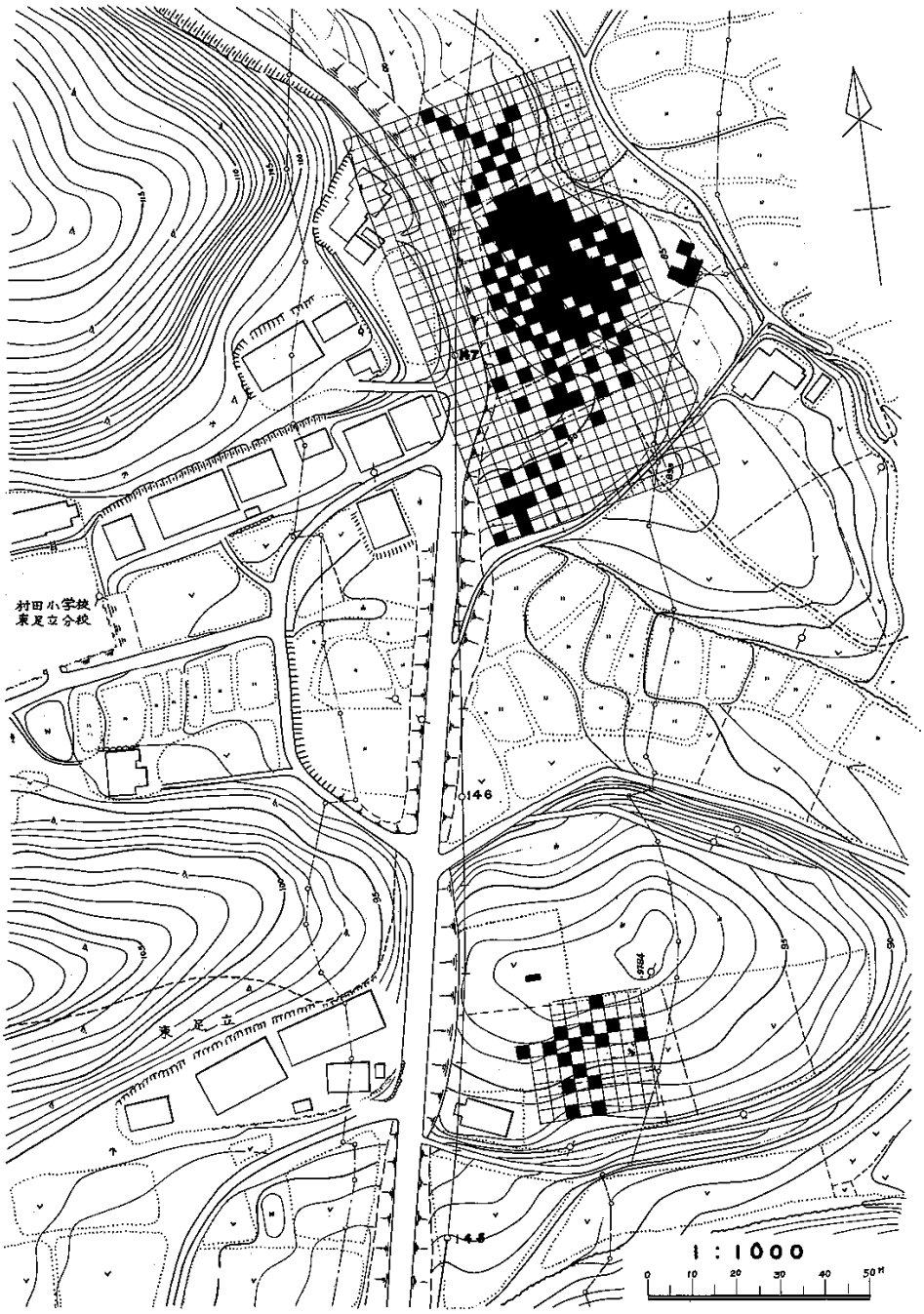
(3)　住居跡内の出土遺物は、9割以上がロクロで成形され、内面にヘラミガキと黒色処理が施された土師器坏である。この坏によって、各住居跡は平安時代と推定される。

（岩淵康治）

参考文献

加藤孝・高橋富雄（1968）：「西原遺跡」『宮城県文化財調査報告書第17集』

（十一）東足立遺跡（ひがしあしだて）



第80図　地形図・グリット配置図

東　足　立　遺　跡（別称乗越遺跡）

1　遺跡所在地

宮城県柴田郡村田町大字東足立字乗越

2　調査期日

昭和46年4月6日～5月15日

3　調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

4　調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

係　　長　志間泰治
技術主査　氏家和典
技　　師　藤沼邦彦　白鳥良一
嘱　　託　岩渕康治　佐々木安彦　小井川和夫　佐藤庄一　加藤道男
補助員　七戸貞子

5　調査の概要

(1)　遺跡の立地

東足立遺跡は、村田町と名取市が境を接する南北にのびた丘陵の西側にあり、標高200mの無刀関に源を発する一本松川へ沢合いのゆるやかな東南斜面に立地する。村田町の中心から北に約2㎞、東足立停留所のある地点である。

(2)　調査経過

昭和45年度の試掘調査の際に、道路敷外にあたる地点で、縄文時代と平安時代の遺構、遺物が検出された(県報告)。その成果をうけて、南北99m×東西60mの範囲に3mグリットを設定し、そのうち1147㎡を発掘した(第80図)。

基本的な層序は第1層表土、第2層暗褐色土層、第3層黒色土層、第4層ローム層である。遺物は主として第2、第3層に多くみられた。

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡3軒、炉跡7ヶ所、平安時代の竪穴住居跡2軒で、遺物も各々の時代のものが出土した(第81図)。

また本地点より南へ60mはなれた所にも、南北27m×東西30mの調査区域を設定し、そのうち132㎡を発掘したが、弥生式土器片が若干発見されたのみで、遺構は検出されなかった。

(3)　発見遺構及び遺物

A　縄文時代の遺構と遺物

第1号竪穴住居跡（第82図）

調査区域の東南部に発見された。遺構検出面は、暗褐色土層である。傾斜面にあるため、東半の壁は削平されており、また後世の落ちこみのため、東半の床は不明である。残存の周壁のカーブから考えて、径5.4mの円形のプランをもつと推定される。現存する壁の高さは西壁で約38cmある。床面は黒色土のまじった黄色ロームで、壁近くの床面より、中央部は約15cm低いので、床面全体は皿状を呈していたと思われる。

ピットは床面の西半に7個（ピット1～7）ある。深さは13cm～42cmあり、ピットによって差がある。周溝はない。

中央部に6個の板石と河原石が焼土をかこむようにあった。石は原位置を動いたものもあるが、径60～70cmの石組炉跡と考えてよい。炉のほり方は深さ19cmある。

また、住居跡から南に約0.8mはなれた所に、炭化物、焼土の堆積があり、これを除去すると、ピットが2個検出された。大きい方のピットには礫が数個おちこんでいた。住居跡の西壁の上にも焼土の堆積がみられた。これは本住居跡を構築する時に半分切られており、より古い時期のものと推定される。

出土遺物は、土器（宝ヶ峯式、金剛寺式）片のほか、石器（石鏃、石皿、石斧、石棒）がある。本住居跡の年代を示す遺物は少ないが、床面の炉跡附近から出土した土器により金剛寺式の時期に相当すると思われる。

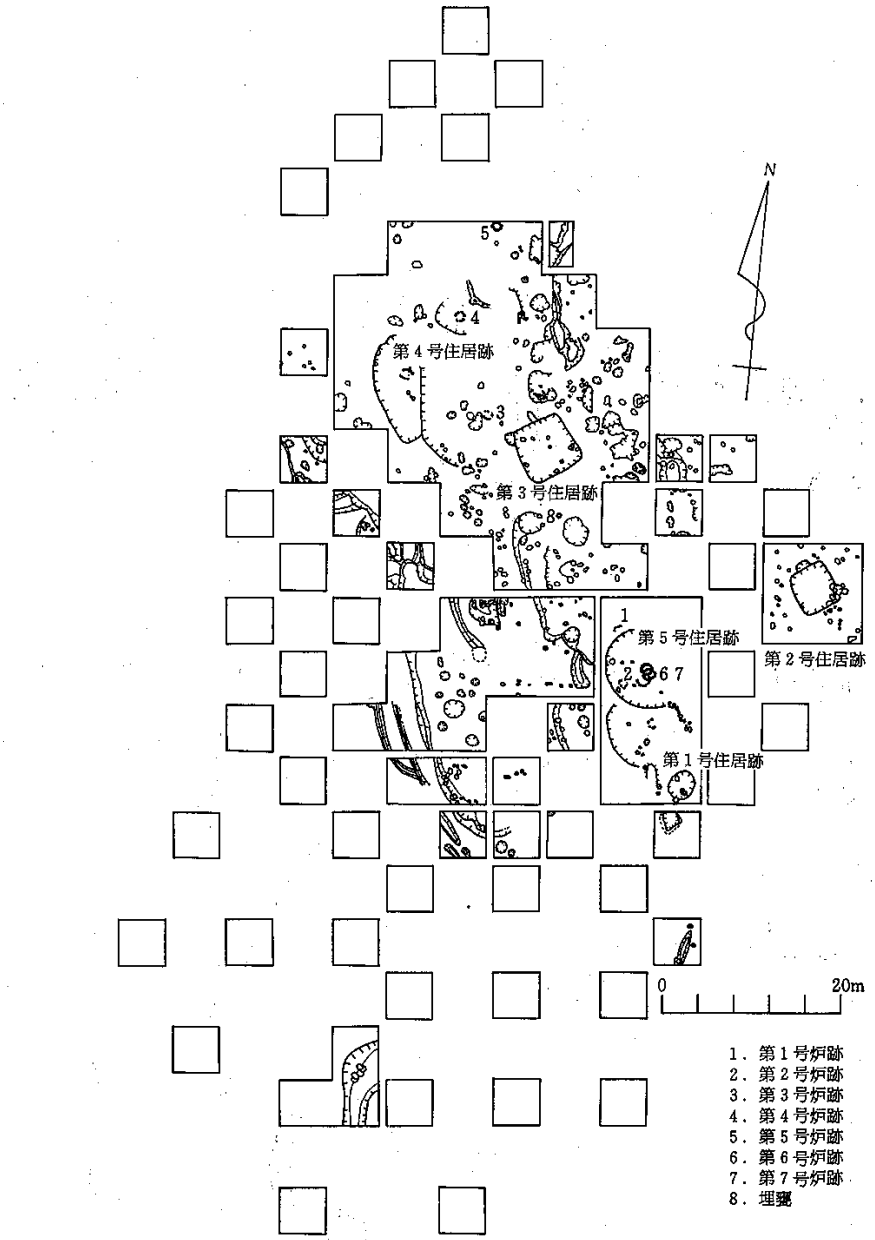
第4号竪穴住居跡（第83図）

第1号住居跡の北西18mの所にある。遺構確認面は暗褐色粘土層である。傾斜地にあるためと後世の溝状おちこみのために、東側の3分の1は壁、床とともに確認できなかった。西半に残存した周壁のカーブから、径9.5cmのほぼ円形のプランをもつと推定された。保存の良い所で、壁高は約23cmある。床面は黒色と黄色ロームの混入したもので、部分的に堅いが、周壁に近い部分ではやわらかい。柱穴と思われるピットは南半に3個（ピット1～3）と壁沿いに2個（ピット4～5）検出された。深さは16～37cmまであり、ピットによって差がある。周溝はない。

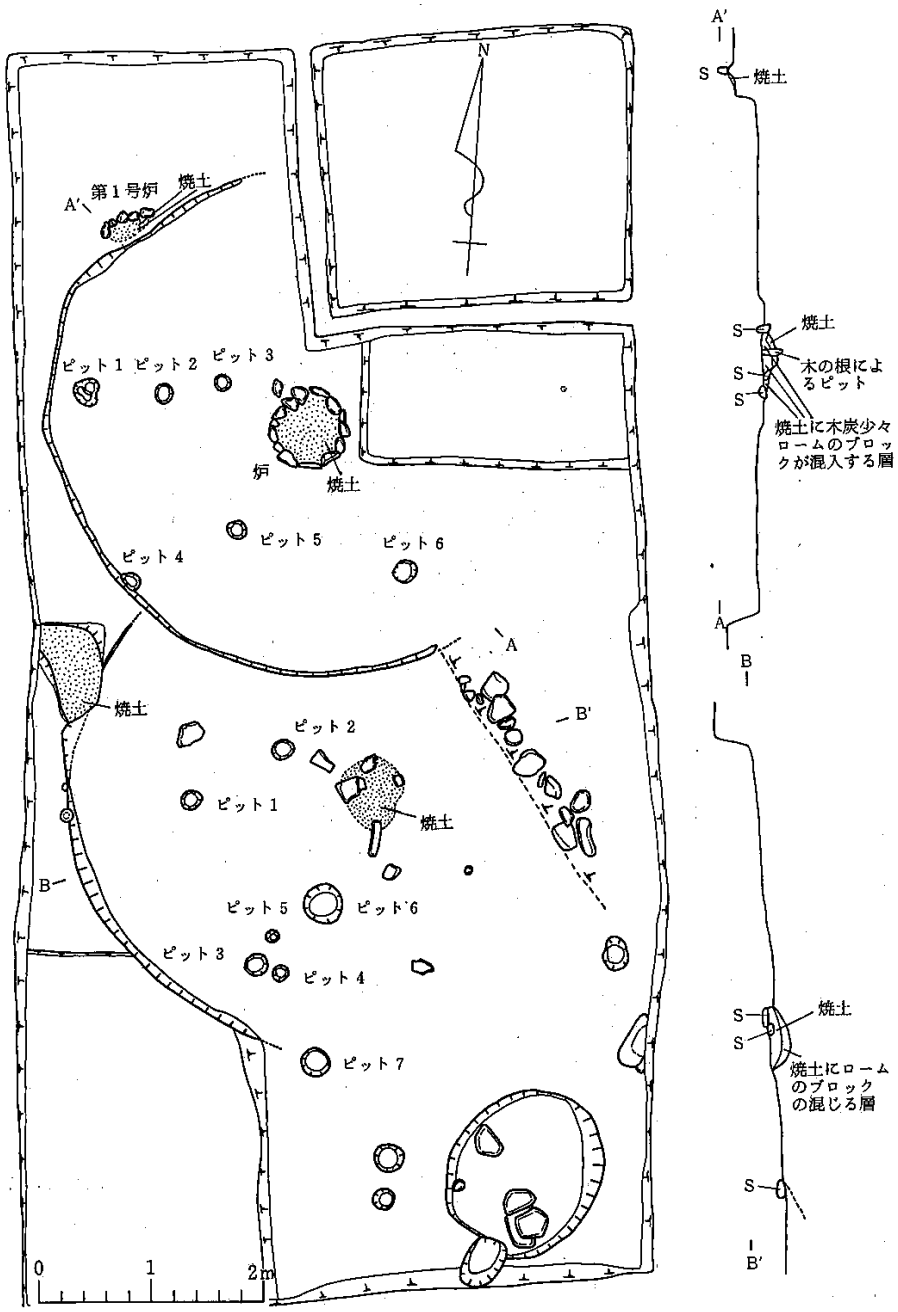
中央部に河原石で作られた石組炉がある。径70～76cmのほぼ円形のプランをもつ。内部に焼土、木炭粒が入っている。炉にはほり方があり深さ18cmある。

遺物は、床面上のものは少なく、大部分は埋土から出土した。土器片（金剛寺式）のほか、石器（石鏃、石匙、石槍、石錐）がある。住居の年代は、良好な資料がなく、埋土からの土器より金剛寺式と思われる。

また、住居跡の東部をきった後世のおちこみから、金剛寺式の一括土器が発見されたが、


N
第4号住居跡
第3号住居跡
第5号住居跡
第2号住居跡
第1号住居跡
0
20m
1．第1号炉跡
2．第2号炉跡
3．第3号炉跡
4．第4号炉跡
5．第5号炉跡
6．第6号炉跡
7．第7号炉跡
8．埋甕

第81図　遺構配置図



第82図　第1号・第5号住居跡

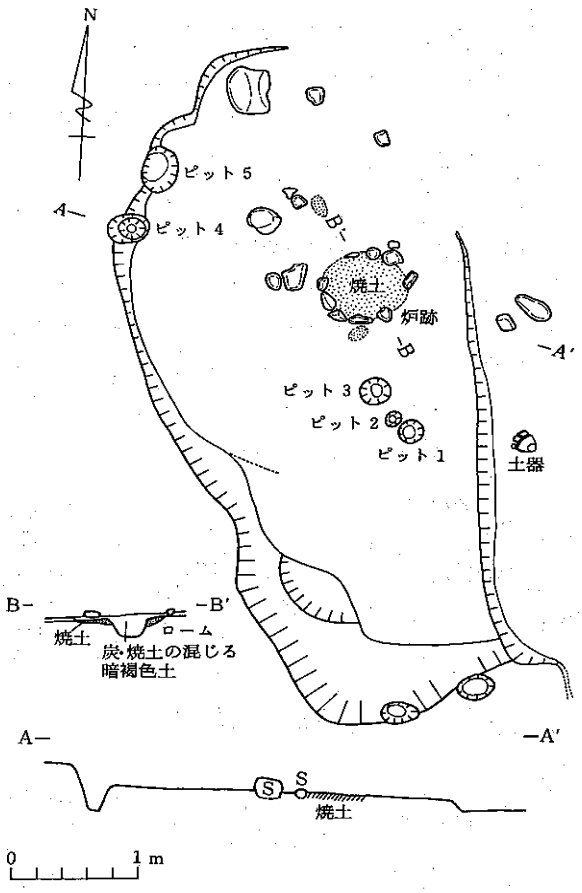
これは、本来埋土中にあったものが転落したものと推定される。

第5号竪穴住居跡（第82図）

第1号住居跡の北部を切って作られた住居跡である。遺構が確認されたのはローム面である。壁は西半の保存は良かったが、東半は後世の撹乱と掘りすぎのため確認できなかった。残存の周壁のカーブから、径4.4mの円形のプランをもっていたことが考えられる。現存の壁高は21cmである。床面はロームで、中央部では固く保存がよかったが、周辺ではやわらかくなる。床面は中央部で壁の周辺より約10cm低くなり、皿状を呈する。ピットは6個ある。（ピット1～6）深さは11cmから19cmである。後述するように、埋土中に炉が3個発見されているので、このピット群のうちに、本住居以外のものもふくまれているかもしれない。炉は中央部に15個の河原石を径70cmの円形にならべた石組炉が検出され、内部に炭化物・焼土・黄色ロームの塊が混入していた。炉の周辺の床は著しく固く、炉の方向に傾斜していた。

この炉の上に2個の炉が重なっていた。恐らく住居跡に伴うものであろうが、壁・床面は検出できなかった。この炉については後述する。

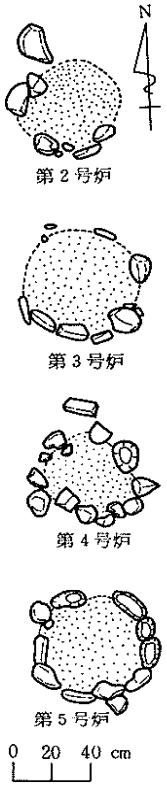
遺物は埋土中に多い。土器は金剛寺式、大洞B式の深鉢・浅鉢注口土器の破片がある。石器は石鏃・石斧があり、その他土偶軟玉製の勾玉がある。但し埋土中なので、6号・7号炉に伴うものもあるかも知れない。住居の年代は、床面の土器が金剛寺式であるので、その時期に比定されるであろう。



第83図　第4号住居跡

第1号炉跡（第82図）

第5号住居跡の北壁に接してある。石組が半弧状に残っているが、半分は第5号住居跡によ



第84図　炉跡

って破壊されたと推定される。中に焼土が少量検出された。

第2号炉跡（第84図）

第5号住居跡埋土上部に検出された。やや不ぞろいであるが、円形状に8個の河原石と板石が並んでいた。内部に焼土が少量検出された。径55㎝の円形の石組炉と推定される。炉のほり方は不明である。

第3号炉跡（第84図）

第3号住居跡カマドから西に5mはなれた所にある。河原石と板石とをローム直上の暗褐色土の上に径70㎝の円形に並べた石組炉で、内部および周辺に焼土が分布していた。また周辺に2個のピットがあるが、そのうち1個は後世のものと思われる。ピットと炉跡との関係は不明である。

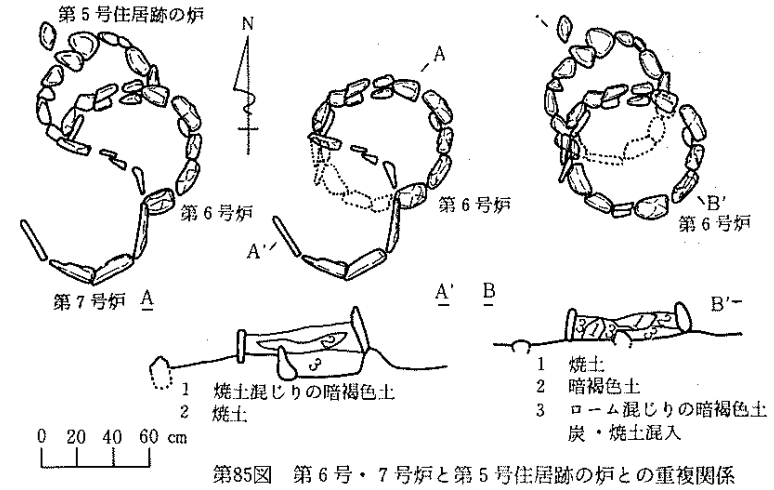
第4号住居跡（第84図）

第3号炉跡から北西へ6mはなれてある。河原石を堅い暗褐色土の上に円形（径55㎝）に並べた石組炉である。石の欠けている個所は抜取痕が明瞭である。内部には焼土が分布しており、炉全体の掘りこみは殆んどない。周辺が固いので床面かと考えられたが、明瞭でなかった。

第5号炉跡（第84図）

第4号炉跡の北、約5.5mの所にある。河原石で、ローム直上の堅い暗褐色土の上に配置した円形（径65㎝）の石組炉である。石の欠けて在る個所は抜取痕が明瞭である。内部に焼土、炭化物が検出された。炉全体の掘りこみは殆んどない

第6号炉跡（第85図）



第85図　第６号・７号炉と第５号住居跡の炉との重複関係

第5号住居跡の炉の直上に発見された炉である。板石と河原石で円形（径76㎝）に構築している。内部の焼土の厚さは9㎝あり、内部に金剛寺式の土器がおちこんでいた。第5号住居跡の壁の上端より16～23㎝（炉石の下端で23㎝）低いので、次のことが考えられる。

①単独の炉である。②第5号住居跡に入りこむ小さな住居跡である。③第5号住居跡の周壁を利用した。などが考えられそうである。そのうちどれかは判断できない。

第7号炉跡（第85図）

第6号炉跡のすぐ上に検出されたものである。8個の板石をたてて径約78㎝の石組炉を構成している。この炉に接して大洞Ｂ式の鉢が検出されたので、時期はこの土器の形式比定して良いと思われる。

以上の炉跡群および住居跡で新旧関係でわかるものを表で示すと下記のようになる。

第１号住居跡
第１号炉　跡
} → 第５号住居跡 → 第６号炉跡 → 第７号炉跡

埋甕

第3号住居跡の南側に、深鉢形土器が埋設されていた。内部に焼土と炭化物が混入した黒色土が入っていた。時期は晩期のものと推定される。

ピット群

各調査区域の各所にピット群が検出された。大きさは径10㎝前後から1mほどのものまで様々である。表土の土が落ちこんでいるのもあり、新旧不明といった方が良い。なかには、内部から土器片・焼土・炭化物を出したのもある。建物の柱穴としてまとまるものはなく、性格は不明である。

出土遺物（第86・87図）

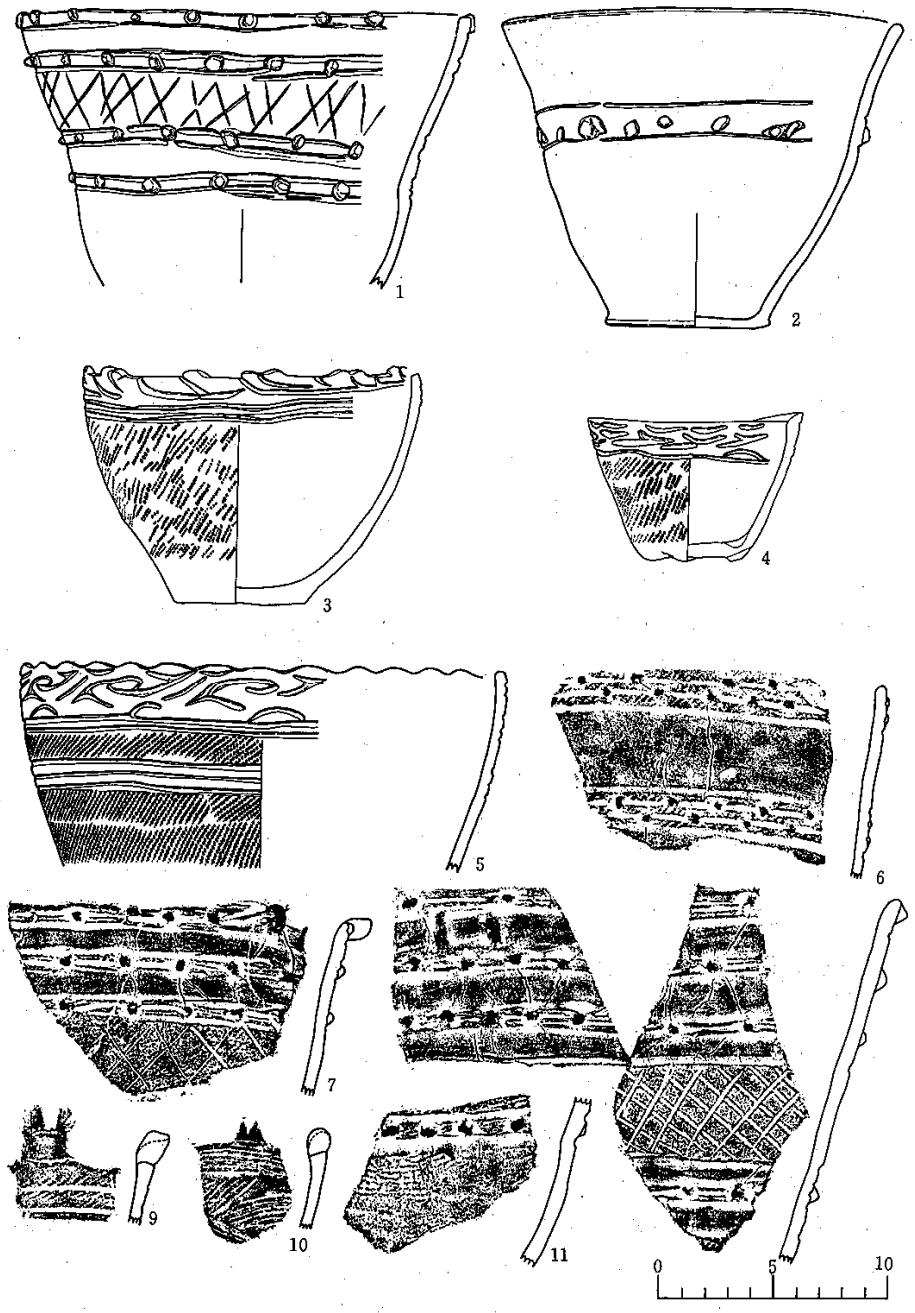
縄文時代の遺物は合わせて整理箱で30箱分ある。後期中葉から晩期前葉にかけての土器が大部分で、それに石器・土製品・石製品が伴出した。整理中のため、遺構とは無関係に種類について概略する。

土器:包含状態がよくないためか完形品は少ない。型式は金剛寺式と大洞Ｂ式が中心で、器形は深鉢と鉢が主で壺・注口の破片も若干ある（第86図）。

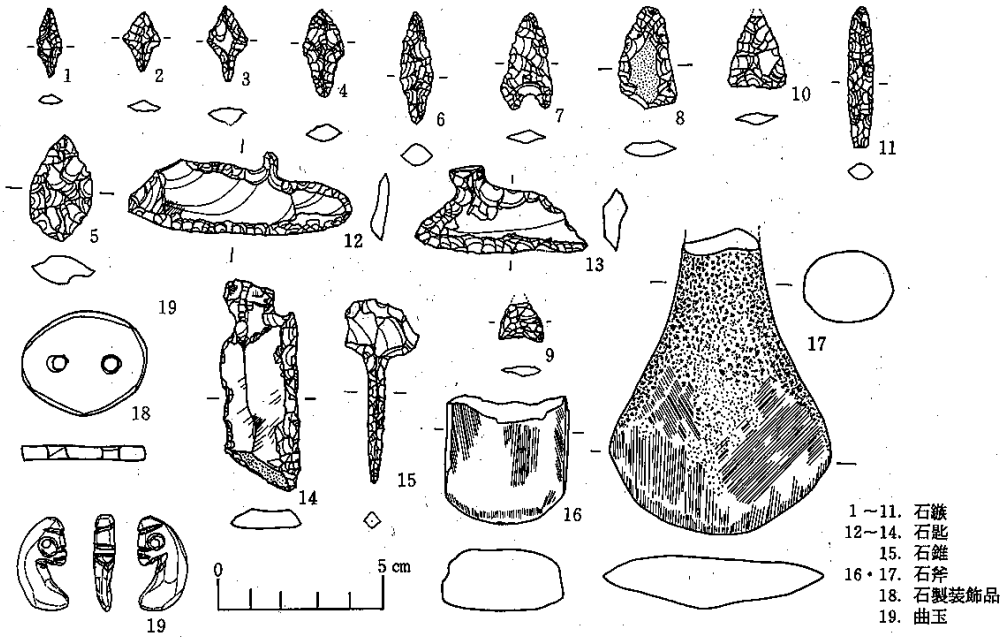
土製品：土偶（2点）と耳飾（2点）があり、その他土器片を円形にうち欠いたものがみられる。土偶は2個ともに頭部と下半部を欠き、表に乳房と正中線をもつ。耳飾は無文で滑車形を呈する。

石器：石鏃・石匙・掻器など種類が多い。石鏃は、無茎・有茎・柳葉形のものと変化にとむが有茎のものが多いようである。石匙は縦型と横型があり、横型が多い。

石製品：これも石皿・磨石・錘。石棒（石刀）垂飾具・異形石器（打製）など種類が多い。錘は円盤状のものと紐溝のつくものとがある。石棒はすべて破片であるが、尖頭部がふくらみをもつようである。垂飾品3個あり、緑色の軟玉製で頭部に沈線の入る勾玉や扁平な円礫に孔をあけ文様を刻んだものなどある。



第86図　出土遺物実測図および拓本



第87図　出土遺物実測図

B　平安時代の遺構と遺物

第2号住居跡（第88図）

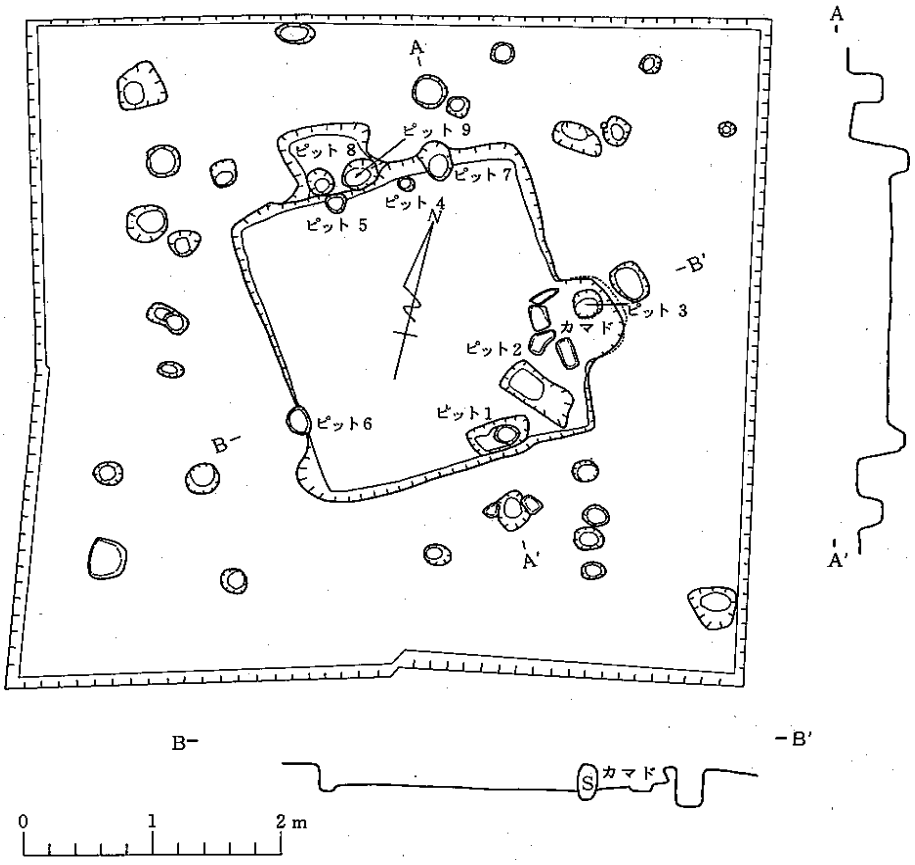
調査区域の東側にある。東西約2.4×南北2.6mの方形のプランをもつ比較的小形の住居跡である。遺構の確認されたのは、暗褐色土層である。現存の壁高は、西壁で42㎝、東壁で約20㎝で、たちあがりは垂直に近い。床面は黄色ロームで、全体に非常に堅く、保存がよかった。住居跡内部にピットが7個（ピット1～7）、北壁沿いに2個（ピット8～9）がある。また竪穴の周辺にも多数のピットが認められたが、本住居跡との関連は不明である。

カマドは東壁中央の南よりにあり、基部の一部と推定される石が検出された。壁を40㎝ほどほりくぼめてあり、内部に白色粘土塊・焼土がおちこんでいた。煙道は認められないが、カマドのある壁の外側にも焼土の分布がみとめられたので、煙道があった可能性がある。

遺物は、ごく少量で、カマド周辺から土師器（坏・甕）が若干出土したにすぎない。むしろ埋土中からは縄文時代の遺物の破片が非常に多かった。

第3号住居跡（第89図）

東西約29m×南北約3.1mの方形プランをもつ住居跡である。現存の壁高は西壁で29㎝、



第88図　第２号住居跡

東壁ではわずか5cmである。周溝はない。床面はロームで、あまり堅くない。

ピットは10個ある。（ピット1～10）どんな組合わせをするか不明である。

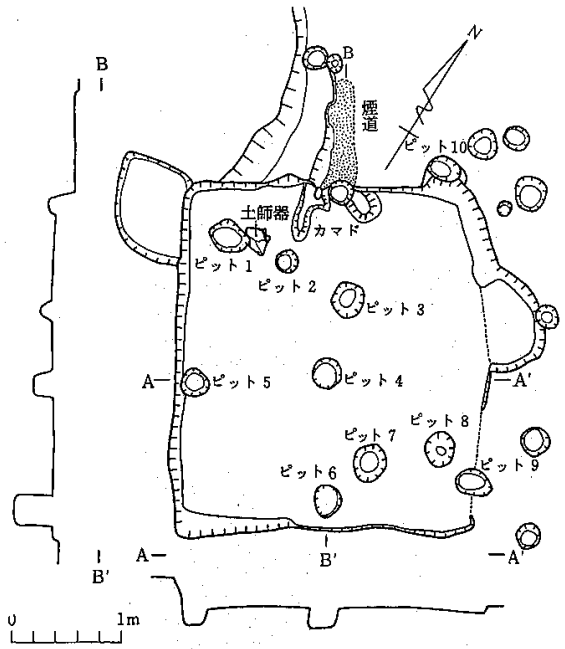
カマドは北壁中央にある。基部が幅80cm、奥行き40cmの規模で残こり、煙道へと続く。カマドの奥に深さ6cmのピットがある。（ピット11）煙道は長さ96cm、幅約20cmで、底面がかけていた。

遺物は少量で、床面から土師器（坏・甕）が若干発見されたにすぎない。

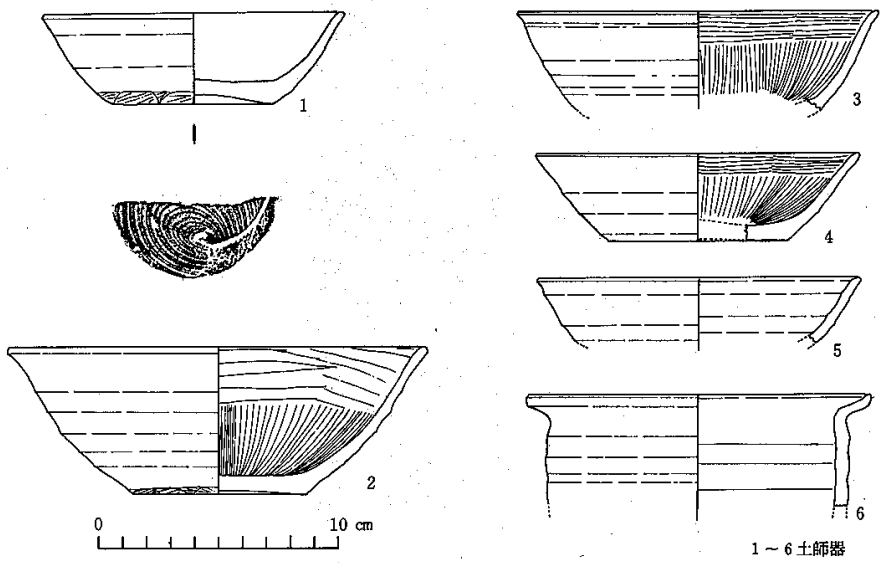
出土遺物（第90・91図）

平安時代の遺物は、2軒の住居跡底面から出土した土師器のみである。埋土中にも縄文時代の遺物は多数落ちこんでいたが、この時代のものは含まれていない。すべて土師器で須恵器はない。

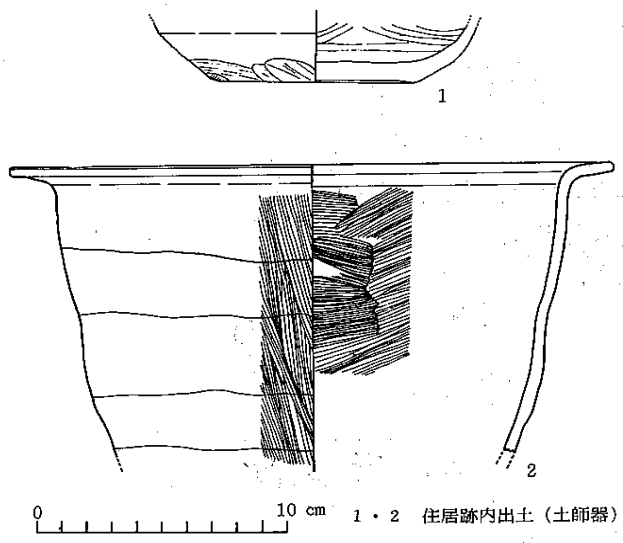
坏：ロクロ成形によるもので、内面にヘラミガキと黒色処理が施されているものと、非



第89図　第３号住居跡



第90図　第２号住居跡出土遺物実測図



第91図　第3号住居跡出土遺物

内黒でヘラミガキをともなわないものとに分けることができる。両者とも各々の住居跡から出土している。

甕：胴部に輪積痕をのこし、内外面とも刷毛目で調整されている。全体の器形は小破片のためわからない。各々の住居跡から出土している。これらの遺物から、2軒の住居跡は同期のもので、平安時代のものと推定される。

ま と め

断片的な観察であるが、一応今回の調査のまとめをしてみたい。

(1)　東足立遺跡縄文時代後期末から、晩期初頭にかけての集落が営まれた。その後平安時代になって、ふたたび小規模の集落を構成したものと考えられる。

(2)　縄文時代の住居跡は3軒しか検出されていないが、単独の炉跡のうち、いくつかは住跡に伴うものと考えられる。

（佐々木安彦）

参考文献

加藤孝・高橋富雄（1968）：「東足立遺跡」『宮城県文化財調査報告書第17集』